

岩波文庫

3912—3—43

地 人 論

內村鑑三 著

岩波書店

庫文波岩

3012—3013

論 人 地

著 三 鑑 村 內



店書波岩

目次

自序	七
第二版に附する自序	八
参考書目	九
第一章 地理學研究の目的	二
第二章 地理學と歴史 其一	二六
第三章 地理學と歴史 其二	四一
第四章 地理學と攝理	五三
第五章 亞細亞論	六四
第六章 歐羅巴論	八三
第七章 亞米利加論	一〇九

第八章	東洋論	一三二
第九章	日本の地理と其天職	一五三
第十章	南三大陸	一七四
註		一九三
解説		一九七

地
人
論

廣谷大川異制。民生其間者異俗。、、、、

修其教不易其俗。齋其政不易其宜。禮記

神は一の血脈より出でし凡ての民を悉く地の全面に住ませ、預め其時と住むところの界とを定め給へり。

聖書

自序

此書の讀者は普通萬國地誌並に歴史の智識を具へられしものと假定したり、故に書中別に精密なる地圖を載せずと雖も之を閲讀せらるゝに際して引照を善良なる萬國地圖に求められん事は著者の望んで止まざる所なり。

余は茲に余の義兄故岡田寛氏が永く吾人を去るの前此書に與へられし懇切なる校閱の勞を深く感謝せざるを得ず、吾人の事業一として吾人同志の共力に依らざるはなし、此小著述豈に惟り例外ならんや。

京都に於て

明治廿七年四月十三日

内村鑑三

第二版に附する自序

余は久しく本書の改題に躊躇せり、然れども二三親友の勸誘に従ひ、竟に先哲ア
ーノルド・ギョー氏の著書に倣ひ、其名を藉りて此書に附するに至れり、勿論彼の
優此の劣は余の言を待たずして明かなり。

日清戦争以後の日本人は余が本書に於て論究せしが如く大天職を充たすの民にあ
らざるを證するが如し、然れども余は天の指明を信ずる篤し、猶ほ暫く余の考察を
存して事實の成行を待たんと欲す。

余は茲に余の舊友ドクトル新渡戸稻造氏が余の此攻究に與へられし尠からざる獎
勵と援助とを感謝す。

明治廿九年十一月廿一日

名古屋に於て

内村鑑三

參考書目

此書を編するに當りて余は左に記載する諸書に負ふ所甚だ多し。

ギョー氏 地人論 The Earth and Man, or Comparative Physical Geography in its Relation to the History of Mankind, by Arnold Guyot.

ギョー氏 地文學 Physical Geography, by Arnold Guyot.

リッテル氏 地學 Geographical Studies, by Carl Ritter, translated by Rev.

W. L. Gage.

ペシエル氏 比較地理 Peschels Vergleichende Erdkunde.

ソマビル夫人 地文學 Physical Geography, by Mary Somerville, American Edition, 1854.

マーシエ氏 人工地理 The Earth as Modified by Human Agencies, by George P. Marsh.

ハッチンソン氏 山岳論 The Story of Hills, by Rev. N. H. Hutchinson.

ハットン氏 文明起原論 The Beginnings of Civilization, by Charles Wood-

ward Hutson.

ローリンソン氏 國民起原論 The Origin of Nations, by George Rawlinson.

ロッカー氏 宇宙論 The Theistic Conception of the World, by B. F.

Cocker.

ヘーゲル氏 歴史哲學 Hegel's Philosophy of History.

ラフイート氏 支那文明論 A General View of Chinese Civilization, by M.

Pierre Laffite, translated by John Carey Hall, M. A., Yokohama, 1887.

ドラモンド氏 阿弗利加論 Tropical Africa, by Henry Drummond, F. R. S.

其他ハムボルト (Humboldt)・ダーウキン (Darwin)・ドナーパー (Draper)・リ

ビングストン (Livingstone)・レクターズ (Racine) 等の著にして直接に間接に余

の教訓に與りし書名は略す。

書中載する所の六大洲山脈圖はギョー氏『地文學』に依れり、又余は茲に矢津昌永君が君の有益なる著書『日本地文學』より日本山脈圖並に其解明を此書に掲載するの承諾を與へられし厚意を謝す。

第一章 地理學研究の目的

之を空間の無限大に比すれば塵埃の細微なるも尙ほ大に過ぐるが如く、之を天體中にて大と稱すべからざる太陽に比すれば僅かに百三十萬分の一たるに過ぎず、之をその姉妹球なる木星に比するも尙ほ小豆が橙だいだいに於ける比例なり、然れども此塵埃小の空間の一點、此小豆大の地球こそ吾人生命の繋がる所にして我は此地に始めて生を有し、此地に育せられ、此地に自覺し、此地に愛し愛せられ、終に此地に死骸を遺して逝く、我に生を給せし地球、我の生命を與ふる地球、我の遺骨を托する地球、我之を研究せずして休まんや。

地理學の本領は地球表面今日の有様なり、其過去の歴史と内部の構造とは吾人之を地質學に學び、其空間に於ける運動、其他天體との關係は天文學つかさどの主る所なり、地理學もし過去に遡らざるを得ずばこれ現在を解明せんが爲なり、もし未來を洞察せざるを得ずばこれ現在の眞意を知らんが爲なり、地理學は實に現世的なり。

地理學もし地中に穿たざるを得ずば其表面の依つて建つ基礎を探らんが爲なり、もし天涯を覗かざるを得ずば下界と天上との關係を知らんが爲なり、地理學は實に皮相的なり。

地質學の如く深からず、天文學の如く高からず、現世的にして皮相的なる地理學は探り易くして解し易し、然れども其解し易きが故に吾人之を思ふこと稀なり、其解し易きが故に地の理は人の多く究めざる所なり、皮相的たる必ずしも淺薄の意にあらず、慈母の柔顔は彼女眞情の現出ならずや、現世的たる必ずしも寸時の意にあらず、現在とは過去と未來を繋ぐ永遠の一部分たるにあらずや。

地理學は實に諸學の基なり、我等地の事を知らざるにいかで天の事を悟るを得んや、吾人の智識は地を以て始む、未だ腔内五臟の妙器あるを知らざる前に我等は已に山川の子供たり、その阜丘は我等の遊園たり、その溪川は我等の漁場なり、我等に心靈の奥殿を開かるゝありて驚愕以て其無限を探らんとするの念起る前に、白頂秀峯先づ我等に詩感を起し、漲流怒濤先づ我等の靜思を攪亂す、地を以て始め天を以て終る、殖産、政治、美術、文學、宗教は此絶頂絶下兩極端に互る人生の階段な

り、地を究めずして此階梯を昇らんとするものは夢に雲井に上るが如く、發點なきが故に着點に達するを得ざる人なり。

地理なしの殖産は野蠻人の殖産にして殖産と稱すべからざるものなり、我の食はんと欲するものを我自ら耕し我の紡ぎしものを以て我が體を被ひ以て僅かに生命を終らんとせば、我は一億九千七百萬方哩を有せる地球に生れ來りし特權を放棄せし者なり、我は世界の民 (Weltmann) にして人は各々世界を彼の領土となし得るなり、カシユミヤの肩掛^{かたがけ}を以て寒を防ぎ、露國の麥粉を以て饑饉を癒し、南米の牛皮を以て我が靴を作り、巴里、里昂^{リオン}の職工をして我が絹絲を紡がしめ、北米の石油を燈し、印度の珈琲に快活を求め、五大洲の土壤をして我が體軀の分子たらしむるは、我の爲し得る事にして我の爲すべき事なり。

見よ幾多の小量なる經濟論は地理學上の無識より來りしを、バスコ・デ・ガマの喜望峯周航はベニス、フロレンスの固執資産家の迷夢を破り、ルーテルの宗教改革が羅馬以外に尙ほ神と眞理の存せるを示せし如く、歐洲の億兆をして伊國商業貴族の手を借らずして印度の富に達するの道を開けり、地理學に暗ければこそ至少の經

濟上の變動より我國幾多の有望資産家をして金融緩慢を嘆ぜしめ、狹隘なる領土の内に無限の欲望を幽閉し、權力に頼み、同胞を壓し、以て天與の聖慾を伸ばし得ざらしむ、是れ彼等の視力の未だ蜻蜒洲外に達せざるに依らずして何ぞや、黃河揚子江沿岸の富源を了得するものにして如何で先祖傳來の少資金を彈丸黒子の中に守護するを以て満足するものあらんや、墨^{メキシコ}西哥高原の一見は我國人口稠密を嘆ずる人の憂を煙滅せしむるに足る、北米の東岸、南洋の島嶼、以て我の領土となし得るなり、以て我の羽翼を伸ばすに足る、英國人の富めるはヨークシャヤの炭坑とランカシャヤの製造場あるに依らず、南米の牧場、東亞の桑田共に彼等に貢を呈して止まざればなり、我の國旗の翻らざるが故に世界は我有にあらずと思ふ勿れ、該博なる智識と猛勇なる精神は我を世界の主人たらしむるを得べし、世界地誌を學ぶを以て火星の地理を學ぶが如き用なき益なきことと考ふる勿れ。

さればにや富の増加と快樂の伸張は常に地理智識の進歩と伴ひ來れり、フィニシヤ人の「北海」並にバルチック海の探險はイベリヤ (Iberia) (西班牙) 半島の植民を促し、カディス (Cadiz)・ターシーシ (Tartessus) 兩市の建設となれり、商業上

一の目的を有せざりし十字軍の遠征すら尙ほ波斯、印度の市場を歐洲に紹介するに至り、ベニス、フロレンスの隆盛は實に此無功の戦争の後にありき、喜望峯の周航、米國の發見は世界殖産史上大變動の關する所なりし、合衆國の獨立は英國の領土を削減して反つて英國の富を増加したり、爾來南米に、濠洲に、阿弗利加に、愆と名譽と眞理の爲に剛勇なる探險家が足跡を遺せし處は植民と商業の追從する所となり、今や地球全面地圖面に上らざる處なきに至つて人類の希望は満足し始まりぬ。

誰か云ふ探險は已に終りたりと、發見すべき新大陸は最早存せざるなり、掠奪すべき「インカ」の寶藏今は昔時の譚に過ぎず、然れども探險は未だ終らざるなり、南洋に散布する二三の硫黃島は吾人の意に介するに足らず、弱國の隙を窺ひ我の境土を擴めんとするは君子國の恥づる所ならむ、千島群島の探險大いに宜し、我の國旗翻る處、碧眼奴の密漁する處たらしむる勿れ、西比利亞の單騎遠征亦壯なり、以て神州男子の膽を鍛ふるに足る、然れども吾人の渴望する探險は開明國觀察的の探險なり、休言いふまやわよ一衣帶水の對岸に住する三億五千萬の隣人は已に我の物を以て足れりとすと、漢江源を發する處、渭水峽谷を激流するの邊、未だ日本國を知らざるの

民多し、いふをめぐ休言米國の市場已に日本品の以て充すべきなしと、北米の西半、南米の全土未だ我に取りては殆ど新市場なり、印度は棉花唯一の購買所にあらず、大西太平洋兩洋の聯續正に近きにあらんとす、墨西哥灣岸の綿産地をして我の供給者たらしめよ、世界は日本を要し日本は世界を要す、全世界ならでは我は満足せざるべし。

地理學を學ばずして政治を談ずる勿れ、何となれば汝は月世界の政治を談ずるものなればなり、何となれば汝は龍宮城の内政を語るものなればなり、即ち地理學なしの政治論は有つて無きもの、像なきもの、實なきもの、夢、空想、幻なればなり、政治もし懶惰壯士の寢言ならずば、政治もし不平漢の空言ならずば、政治にしてもし實物にして神聖なるものならば、堅固なる地盤を離れて存すべきにあらず、吉田松陰が其僕某に告げし言は眞理にして事實なり、彼は曰く、

地を離るれば人なし、人を離るれば事なし、故に事を成さんと欲する者は應に地理を究むべし

と、是れ彼の政治論の時の空漠たる政治論に優りて健全にして深遠なりし理由なり。

今を去ること二千四百年の昔、史學の大祖ヘロドートスが自ら廣く諸國を跋涉し、地理學の堅固なる土臺の上に彼の有名なる歴史を編してより以來、沈着なる偉丈夫にして政治と經綸とを論じ此眞面目なる世界を感化教導せし人は必ず熱心なる地理學の研究家なりき、アレキサンドル、シイザルの地理學上の見識は實に後世の龜鑑なり、ナポレオン大帝の特嗜の學科は地理學なりし、彼は幼少の時他の兒童は遊戯に餘念なかりし頃地圖一卷を携へ綠樹の下或は瓦壁の一隅に獨り座を構へて熱覽沈思するを以て無上の樂みとなせりと、而して彼が長じて歐洲を司令するに至りしや、彼の計畫は常に世界大にして彼の軍略に會て地理學上の誤謬ありしことなし、英のチャタム公亦然り、彼の能く兩半球の地勢を察しサクソン民族の將來を觀破し時の天主教國にして專制國たりし佛國をして其掠奪を擅にするを得ざらしめしものは、大に公の地理學上の本能に據らざるを得ず、獨の將軍モルトケ伯亦地理學の泰斗なり、彼は壯年の頃歐洲全土を遊歴し、普國に超越權を與へて獨逸聯邦を形造るの計畫は彼が未だダニユーブ河邊に客たりし時彼の胸中に湧出せし者なりとかや、而して地理學上の觀察に基せる彼の確信は實に攝理の指命に適中し、獨逸民族は彼の教

導の下にその邊疆をライン河の左岸にまで擴張するを得たり、聞く我國維新の預言者なる仙臺の林子平は萬國地圖を閲して始めて彼の大思想を得たりと、銳眼を以て視る人には地圖は實に預言其物なり、獨の地理學者カール・リッテル曰く、「熱心と敬畏とを以て國の地形を學ぶものは其未來の如何を推知し得べし」と、地理學の攻究豈に忽にするを得んや。

地理の美術文學に於けるは慈母の其子に於けるの關係なり、すまものしつちくれ陶人の土塊つちくれに於けるの關係なり、慈母勿論天性の頑愚を變じて秀才たらしむる能はず、然れどもゲーテ婦人ありて詩人ゲーテありしなり、孟母ありて孟子ありしなり、詩人ボルンズを取りて日本國にあらしめよ、彼はボルンズならざりしなり、詩人ゲーテが英國の詩歌に絶望的思想多きを其の地理學上並に氣象學上の理由に歸せしは故なきにあざざるなり、詩人ミルトン曰く「詩神の降臨は秋分より春分までにあり」と、炎熱鐵を鎔かすが如き赤道直下に於て「失樂園」の草せられんことは吾人の甚だ疑ふ所なり、文化何程進歩するとも渺茫たる水面一物の視線を遮るなく只激浪平砂に單音的の樂

を奏する南洋の珊瑚島に生長せるものの中よりバイロン、シルレルの出でんことは余輩思惟せんとするも能はざるなり、詩人ウォルヅウォルスが英國代議院に建白して詩歌思想養成の爲にカムバランド並にウエストモアランド地方の勝地を通過して鐵道線路の開築なからんことを望みしも全く地理學上の理由に存するなり、スカンダナビヤ半島の峻嶺嶮巍たる處、是れイブセン (Ipsen)、ビーヨルンソン (Björnson) を産出せし地なり、佛のラマーチンの所謂「人は其周圍の天然の如し」との言は詩人並に美術家に就て最も適當なる言なり。

誰か云ふ宗教に地理學の要なしと、誰か宗教歴史を讀んで地理學の無用を認めしものぞある、埃及教より沙漠とナイル河を取去りて見よ、意味なき目的なき亂雜と化せんのみ、シナイ山其物が猶太教の註解なり、メッカ (Mecca)、イヘーメン (Yemen) の地にあらずは回々教の出づべきにあらず、而して今尙此教がサハラ戈壁間に互る乾燥國に蔓延するは其理何處に存するや、猶太國の地誌を學ばずして猶太教の發達と基督教の起源を學ばんとする人は此等宗教を兩つながら誤解するの人

なり、空碧そらみどりにして山青き處にのみ美麗なる羅馬教は發達し得べく又勢力を維持し得べし、怒濤峻嶮の中に蝕入し北光雪に閃きて燦爛まばゆき處、是れオデンの神を拜せし處なり、顯現する神は一なれども彼の帝座は或は火なり或は水なり、神は囁々たる山上より鳴り渡り得べし又微々たる軟花に笑ひ得べし、完全に神を知るに至るは極より極まで眞理が知れ渡りての後にあり、煙霧蒼天を掩ひて常に悒鬱たる英國に於て發達せし監督主義又は清教主義を山海美麗櫻花爛漫たる我國に其儘輸入せんと勉むるものは未だ地理學を學ばざる人なり、神來りて我等の中に宿り、芙蓉峯を以て榮座となし、三保の松原を以て足臺となし、櫻花馥郁として彼の胸間にあり、蒼々たる松森彼の腰を纏ひ、之を帶するに環海の白浪を以てするに及んで、我國は始めて教化し得たるのみ。

地理學に依りて吾人は健全なる世界觀念を涵養すべきなり、國家のみが一個獨立人たる社會にあらず、地球其物が「一個有機的獨立人」なり、地方が一國の一部分に過ぎざるが如く一國も亦地球てふ一「獨立人」の一部分たるに過ぎず、陽明子曰

く「大人者以天地萬物爲一體者也、其視天下猶一家、中國猶一人」と、我等は日本人たるのみならず又世界人(Weltmann)たるべきなり、一手も之を眼前に置けば宇宙を掩ふに足る、視力を一小國に集注して世界の市民權を放棄すべからず、詩人シルレル曰く、

一國民の爲にのみ筆を弄するは拙劣矮小の業と謂はざるを得ず、學者たるもの精神は斯の如き制限に堪ゆる能はず……、最強國民と雖も一小片たるに過ぎず、故に其運命にして人類全體の進歩に關係を有せざる事項は吾人を感激せしむるに足らず

と、孟子の謂ゆる「居は氣を移す」の言實に然り、眼を自國の外に注がざるものにして能く宇宙を包括する觀念の起るべき理なし。

世界觀念養成の實利あるは余輩の辯を待たずして明かなり、謙遜の念なり、寛裕の念なり、博愛の念なり、自重の念なり、愛國の念なり、是れ皆世界觀念の好果なり。

ダーウキン氏彼の世界周航記に叙して曰く、余は阿弗利加沿岸を廻航して始めて該大陸の大を知れりと、又曰く、太平洋は水界の王なり、地圖面に點々として存する其島嶼も之を洋中に求むる時は殆ど實在せざるの感ありと（余の記憶より寫す）、人に謙遜、寛裕、博愛の念を喚起せしむるの最上策は彼をして世界を周遊せしむるにあり、而して之に次ぐの策は彼をして世界地理を知らしむるにあり。

故に萬國郵便切手蒐集の如き、其物自身は一の實用なきが如しと雖も、その萬國地理の講究を促し、郵船の航路、鐵道の路筋等を學ばしむるが故に、世界觀念を發起するが爲には尠からざる功力ありとす、かの基督教國に於ける萬國傳道事業の如き、其直接の結果は論ずるまでもなければ、其之に金を投ずる老若男女をして勉めずして萬國の情態を探らしめ同感推察の情を以て世界を蓋ふに至らしむる間接の好結果は實に偉大なるものと云はざるを得ず。

世界觀念、博愛主義は自重愛國の念を滅殺すと云ふものは如何なる愚者ぞ、もし其識の狭きを以て愛國と稱するならば井底の蛙こそ最上の愛國者なれ、阿弗利加内地蠻族の酋長にして曾て探險家スタンレーを彼の茅屋に招き手を伸して其天井に達

せざるを示しス氏に問うて「汝は此の如き大厦を見しことありや」と云ひし人は實に眞正の愛國者なるや、我の福島中佐を擁し露と清とより外に國なしと信じ漠北荒陬の地を以て世界の最良田と見做す蒙古人は眞正の愛國者なるか（福島中佐の遠征記を見よ）、一面には英佛の砲撃を受けながら西向して陸地より英國に攻め入らんと威張りし清廷の夢想漢は眞正の愛國者なるか、愛國とは國自慢にあらず、スペインサー氏の所謂「愛國とは自利主義を自國に適用せしものなり」との言は其下等の意味を言ひしものなり、自利主義もし非徳なれば之を國家に適用するも非徳なり、眞正の愛國心とは宇宙の爲に國を愛するを言ふなり、而して斯の如き愛國心のみが最も國を利するの愛國心なり、彼我に優らんか、我宜しく行いて彼に學ぶべし、彼我に劣らんか、我宜しく行いて彼を援くべし、是れ實に渠の仙臺の林子平をして海防攻戰を講ずると同時に、有名なる『三國通覽』を著し、朝鮮琉球蝦夷の地誌を明かにし、大に天下に訴へて彼等弱國を補助教導すべきを以てせしめし精神なり、彼子平今を去る百年の昔、東陲の一隅に於て能く之を學び得たり、今日の識者と稱するものにして彼の如く地理學を活用するもの幾干かある。

宇宙の爲にする愛國心は世界大にして地球重なり、我の責任世界を包括して我は始めて我の重きを知るなり、宇宙學者ハムボルトの所謂「獨逸に生れし世界の市民」こそ眞正の獨逸人にして眞正の偉人なれ、國民悉く此浩闊自重の念を起すに及んで始めて國家の強大を望むべきのみ、自國の事物にのみ區々として深く外を學ばざる民の未來は知るべきのみ。

かゝる大關係を有する地理學は吾人の深き注意と研究とを要すべきものなり、地理教育は普通教育中甚だ緊要なる位置を占むるものなり、是れ地理學の簡易にして兒童の視察力を喚起するが爲にのみ然るにあらずして、數理學言語學と共に渾ての學科の土臺たるべきものなればなり、さればにや普通教育を以て世界の模範たる普魯士國プロシヤに於ては夙くより重きを地理學訓練に置き、リッテル(Ritter)、ペシエル(Peschel)氏等の誘導の下に今は世界に比類なき地理教科書を持つに至り、英國政府の如きも大に此點に見る所ありて、屢々該國地理學協會に諮問して普魯士風の地理教育を全國に施さんと勉めつゝあり、瑞西の歸化人にして米國プリンストン大學

の地理學教授たりし故アルノルド・ギョー氏は有名なるカール・リッテルの崇拜家にして、彼が米國人の無頓着なるに關せず三十年間孜孜として地理教育の新組織を傳布せしより、北米に於ける今日の地理教育なるものは近來著しき進歩を現し、無味乾燥なりとて兒童の最も忌嫌ひし此學も今は最も快樂にして最も實利ある學科たるに至れり、地名の暗誦、山川方向の暗記は記憶力發達の爲にあらざして其内に至大なる功用と深遠なる眞理の存すればなり、眞理を戀ひ慕ふ誠意を以てすれば地理學は一種の愛歌なり、山水を以て畫かれたる哲學なり、造物主の手に成れる預言書なり。

第二章 地理學と歴史 其一

地理と歴史とは舞臺と劇曲との關係なり、地は人類てふ役者が歴史てふ劇曲を演ずる舞臺なり、故に地理學なくして歴史を學ばんとするものは、盤なくして碁を圍まんとするが如く、盲人が天文學を攻究せんとするが如く、全く爲し得べからざるにはあらずとも殆ど爲し得がたき事なり。

地形必ずしも國民歴史を左右せず、自由意志を有する人類は自然の奴隸にあらず、彼は沙漠を海となし得べし、山嶽の障害物も彼は隧道を以て透徹し得べし、河身を變更し得べし、陸を穿ちて海洋を聯續し得べし、吾人はバックル氏に倣うて英國歴史を自然的現象のみを以て解せんとせず、吾人はドレーパー氏と共に合衆國南北戰爭を以て氣象學上の差異の結果なりと云はず、是れ歴史と地理學とを混同するものにして兩者の關係を論ずるものにあらず、人なる活動物と地なる不動物とは相關する緻密にして相異なる甚だ大なり。

然れども地が人の行爲に及ぼす感化力の大きなるは余の已に前章に於て論ぜしが如し、淡黒色なる印度人も蒼薇色なる英國人も言語學の達し得る時代までは同一種族の民にして、今は主となり僕となりて其懸隔は天地の差あれども、素はイラン高原空氣爽さわやかなる所に同一の天幕に居住せしものなりとす、同一の拉典人種にして希臘、伊太利兩族の歴史上の差異は如何に大なりしや、人は地を化し得べくして地に化せらるゝものなり、一國の歴史は其地と其人との相互的動作 (interaction) の結果なり、博士フリーマン氏曰く、

Another people in Greece might not have done such great things as the Greeks did; and the Greeks might not have done such great things in any other land. But the land and its people fitted one another, and so great things came of them.

希臘人に依るに非ざれば希臘國は大業を見る能はざりしならむ、希臘國に於けるに非ざれば希臘人は大業を遂げ得ざりしならむ、然れど地と民と相通合して兩者より大事業來れり。

豈に是れ希臘人と希臘國に於てのみ然らんや。

余は今茲に地形の歴史に及ぼす感化力を論ぜんとするに當つて左の分類に據らんとす、

第一、山國

第二、平原國

第三、海國

山 國

國の分界は水に依るにあらずして山に依る、野望的略奪家の大妨害物は山なり、自由愛國者の城壁は山なり、ライン河の滔々たるは獨、佛兩國の境界を永遠に定むるを得ず、ピレニース山脈の巍々たるは佛蘭西、西班牙兩國間の争ふべからざる界牌として存す、日耳曼海^{ゲルマン}の廣きと浪荒きとは英國をしてデー人種の略奪より免れしめず、チピオト山の低きも猶以て一千年の獨立を蘇格蘭人に供するに足れり。

詩人シルレル曰く、

On the mountains is freedom! the breath of decay

Never sullies the fresh flowing air;

Oh! nature is perfect wherever we stray;

'Tis man that deforms it with care.

(英譯なり、ハムボルトの著書より寫す)

自由は山に在り、腐敗の氣は未だ嘗てその新鮮なる氣流を汚せしことなし、
あゝ、自然は到る所に完全なり、たゞ人のみが憂苦を以て之を毀損す。

山と自由との關係は歴史上最も著しきものなり、寸尺の海岸線を有することなく、
アルプス山系峯巒の中に埋れる瑞西國は歐洲自由の本源なり、紀元千三百八年に三
小州の同盟なりてより以來六百年間隣國の變動沿革は曾て休むことなきに關せず、
周圍の天險は壓制の此仙境に入るを許さず、偶々ナポレオンの如きありて天の定む
る所を人力を以て破り得しも、僅かに四年を経ずして自由は再び其故國に復せり、
最も完全なる共和國はアルプス山中山高くして水冽き所にあり、世界の自由を重ん
ずる國は未だ此一小山國より學ぶべき事多し。

瑞西の東隣をチロール(Tyrol)と云ふ、アルプス山系の中央に位し、獨、塊、伊三國の間に跨り、其水は流れて三支となり、ライン、ダニューブ、ポー三河に給す、瑞西の同盟成るの頃より塊國の一部分として存し、常に敬畏を以て維也納^{ウィーン}朝廷の待遇する所たり、然れども一朝、佛の豺狼ナポレオン來りて此土を一の賣物に供し塊國より割いて彼の同盟國なるババリヤに與へんとせしや、溪谷に隠れし順良なる民は直に憤怒の民と化し、愛國者ホーフエル(Andre's Hofer)の教導の下に佛軍を國境天險の地に邀へ、年に三び戦ひ、殆ど蕩滅の敗を取らしめ、普軍を震盪せしめ塊軍を戰慄せしめし佛兵をして逡巡侵入するを得ざらしめたり、ナポレオン終に精兵五萬を遣し、卑劣手段を以て其將を擒にし、以て纔に彼の命に従はしむるに至れり、後五年にして再び塊國の版圖に復するや、塊帝はホーフエル家を貴族に列し、チロール山民は再び其安然なる峽谷の内に安堵するに至れり。

十三世紀の始に當つて佛國の南方、ランゲドック(Languedoc)の地方にアルビヤンシク(Albigenses)、ワルトンシク(Waldenses)、カサリ(Cathari)と稱する

徒あり、時の迷信暗愚の中にありて自由思想を宗教上に適用せしより法王政府の忌む所となり、終に有名なるアルピゼンシス十字軍を惹起すに至り、其慘憺たる殺戮の状は世界の戰爭史中稀に見る所なり、劍はランゲドックの自由宗教を壓せり、然れども攝理は隱場かくれはを是等自由先達者殘類の爲に供へたり、アルプス山の南面に當つて、サボイ(Savoie)州の東境に接し、今の伊國ピードモント(Piedmont)州の西隅、ポーの緩流が源を發するの邊、峻嶺嶮峨相連り溪水激奔巨岩磊々たる處、ルーチェルナ(Lucerne)、ペーザ(Pescaia)、サンマルチン(San Martin)の山郷と稱し、天造の岩城、四面環山の地、是れ即ちワルデンシスの殘黨を擁護し、七百年間の變遷を経て中古時代の自由宗教を今日まで保存せし地なり。

サボイ山中の自由教徒は常に法王政府體中の刺なりき、故に法王は屢々命を近隣の貴族に下し、強兵を向けて異端の巢窟を排はんとせり、然れども溫良無害なる山中の居住者も自由唯一の本城を犯さるゝに至りては直に擧つて猛烈なる義勇兵となり、鋤犁牧杖を擲ち、劍を腰にし、敵兵を險岸絕壁雙肩を壓する所に邀へ、汚穢なる羅馬の雇兵をして一步も此聖境に入らしめざりき、十七世紀の中頃サボイ公の派

遣せし六隊の天主教兵の爲に蹂躪せられ、一度は殆ど再び起つ能はざるに至りしかども、時の英國の大王クロムウエルの保護する所となり、終に延々今日に至り、伊國聯合の時に際してはエムマニユエル王の忠良なる兵となり、大に功を奏する所ありき、而して今や信仰自由到來の時に遭遇し、數年前の事なりき、伊國チェーリン府に於てワルデンシス黨の祝會あるや、世界は尊敬と賞嘆とを以て、自由の發言者にして其忍耐ある保存者なる此山中自由の民を祝したり。

余輩は更に何をか云はんや、ワラス (Wm. Wallace)、ブルース (Robert Bruce) の輩を擁護し英賊をして終に蘇國を服従するを得せしめざりし蘇格蘭北方の山地、東歐悉く土耳其の征服する所たるに當りて獨り回々教徒に膝を屈せざりしモンテネグロ國、是等の自由國は皆、山の賜物なり、自由豈に山を離れて論ずべけんや。

山は天よりの默示の降る處なり、其空氣透明にして四隣靜淑なる、其俗界より高くして天上に稍や近きこと、是れ默示の山上に多くして海面に尠き理由ならんか、人類の本能は山を以て神殿を築くの地と定めたり、オリムピヤの山頂、是れ希臘全

土の上に天智の降臨する處なりき、シナイ半島ムーサ山 (Jebel Musa) の嶺、是れ十誠の大訓が人類に授けられし處なり、ヒマラヤ山南面の靈鷲山、是れ佛教三千年の基を開きし處にして東洋教化の遠源ならずや、ベンゲル (John Albert Bengel) 曰く、「山は地の高所にして天に近きが故に最も聖き事業を爲すに適せり」と (Gnomon, p. 160.)

英雄出所山水好、天真爛漫たる偉人は多く山より出でて平地に尠し、見よ幾多の剛勇なる世界人物は岩石多きスコットランドの産出にかゝるを、北米ニューハムプシヤは合衆國中最小州の一なり、其地一分は湖面にして八分は山なり、岩石狼藉して至る處耕耘に便ならず、加ふるに土地淺薄以て他州の比すべきなし、著者曾て其中一田舎に宿す、談偶、土地物産の事に及ぶ、父老答へて曰く「我州の物産別に誇るべきなし、只一物の天下に供すべきあり、即ち人なり」と、而して米國史を繙くものにして誰か此父老の言を批難するものあらんや、ダニエル・ウエブスター (Daniel Webster)、ホレス・グリーン (Horace Greeley) 等の如き山間の童兒と

して成長せし、剛氣、實着、世の稱して以て代表的米國人となすものを産出せしこと擧げて數ふべからず、如何なる寒村なりと雖も常に二三の子弟を大學に送らざるはなく、而して州人廣く全國に散布し、責任ある位置を占むるもの一村多きは二三十名に及ぶと云ふ、天此地に對するや物を與ふるに吝かにして靈を賜ふに優かなり、鋤犁の以て貫くべからざる岩石の地亦不毛と稱すべからざるなり。

聞く西班牙國^{スペイン}北方の諸州、ピレニース山脈が延びてビスケー灣に濱する處、是れ逸帝國南方に當り、ツーリンギヤの陰森幽鬱たる處、ハルツ(Harz)山の岩塊磊々たる處、是れ獨逸國の剛骨男子を産出するを以て名あり、誰か潔白純良なるツウキングリ(Zwinger)の生涯を見てアルプス山溪の清冽なるを思はざらんや、陰險なり、奸智なり、狐疑なり、是れ多くは濁流緩慢として流れて海に注ぎ人その隣人と肩を接する處の産なり。

境界線として山脈に二種あり、即ち東西に走るものと南北に走るものはなり、前

者は國民を區分する上に非常の勢力を有し、後者は之に依つて分界さるゝ國民を聯合せしむるに於て妨害たらざるが如し、是れブーエー氏 (M. Bonet) の始めて指明せし事實にして、爾來歴史家の贊同を受けし一般の法則なるが如し。

アルプス山の三平行脈は中央歐洲を東西に走り、伊、獨兩國の分界として存す、而して昔より今日に至るまで獨逸王にして伊太利國を併呑せんとして曾て成功せしものなく、又伊太利人にして威力を獨逸に振はんとして永續せしものあるを聞かず、アルプスの山塊は地理學上の境界標なるのみならず、宗教上、言語學上、政治上、思想上の大境界なり、獨逸人は宰相ピスマークを以て云ふ「我等は再びカノーサに詣らじ」と、伊太利人は獨逸人を賤しむるに彼等の無風流にして朴訥なるを以てす、伊、獨兩國が一政府の下に來らんとするは最多望なる樂天家も豫想せざる所なり。

佛蘭西人と西班牙人は同じく拉典人種にして同宗教に歸依し、言語性能く相似たり、然れども彼等兩國間にピレニース山脈の横はるあるを以て佛蘭西と西班牙とは現然たる二國民として存す、ルイ十四世の政略は一時は彼の孫兒をして西班牙王の位に即かしむるに至り、彼をして有名なる *Il n'y a plus de Pyrénées* (「山ニ

ース山最早存せず)なる語を發せしめしと雖も、大王の命も山嶽を動かすの力なく、ピレニース山は尙ほ巍々として兩國の間に存し、佛蘭西と西班牙とを一國旗の下に同體たるを得ざらしむ。

チビオト山 (Cheviot Hills) は英吉利と蘇格蘭との間に横はる小山脈にして其最高點は海面より三千尺に達せず、然るに此阜丘の一連は永く兩國をして一體たざらしめし大障害物なりき、而して合同の今日に至るも二國人心の傾く所の相異なるは觀察者の皆な承認する所なり、東歐バルカン半島の結合するの難き、支那帝國の南北をして殆ど異國民たるの感あらしむるの理由、我函嶺が我國東北西南の兩半部をして大差あらしむるの事實は、皆ブーエー氏第一則の實例なり。

山脈南北に走るときは分界の功を奏せざるの實例亦甚だ多し。

伊太利半島を南北に走るアペニン山脈は伊國の東西部を結合せしむるに一の障害たりしことなし、拉典民族がタイバー河邊に覇業を起してより以來ルービコン川以南の併呑は甚だ容易なる業なりし、然れどもポー河沿岸の服従は羅馬人至難の業

にして、之を完うするに至りしは彼等已に威を地中海沿岸の地に伸ばせし後にありき（ルービコン河口の邊よりアペニン山東折して東西脈となるに注意せよ）、而して常に羅馬人の配慮として存し、敵國と同盟して羅馬大共和國分裂の虞あらしめしものは、實に山北の民にして山東の民にあらざりき。

キオーレン（チエーレン）山脈（Kjölen Mts.）はスカンダナビヤ半島を南北に串貫する峻嶺の連鎖なり、瑞典國其東にあり、那威國其西にあり、以て現然たる二國の形をなす、然れども此等兩國の歴史は常に一國の歴史なりき、勿論時には分離隔絶せしことなきにはあらざりしも、是れ何れの國に於ても見る所にしてスカンダナビヤ半島のみ然るにあらず、而して今や兩國はその國名と旗色とを異にすと雖も同じく之れストックホルム朝廷の配下に屬し、那威人の之に忠良なるは瑞典人に一步を譲らず、彼等はスカンダナビヤ人にして那威瑞典兩國人にはあらざるなり、我日本國の山脈も重に南北に互りて其歴史はブーエー氏第二則の顯明なる實例なり、是れ余が末章に於て別に論ぜんとする所なり。

誰か歐、亞の山脈の東西に互るもの多きを見て國民の割據と政治上の混雜とを疑

ふものあらんや、自然は東西の山脈を以て歐洲を分割せり、然るに米大陸に於ては全く之に反し、山脈多くは南北に互れり、是れ兩半球歴史の全く相異なる所にして、余が次章に於て論ぜんとする所なり。

山は能く國界を明かにし（殊に東西に互るものは）、獨立自由を其内に養成し、之を保存し、其間に住居する國民をして天與の特徴を發達せしむ、鍛鍊凝つて國民的精神となり、深遠なる思想となり、優麗なる詩歌となり、勇壯なる行爲となり、以て此陳腐世界をして全く腐敗せざらしむ。

然れども山は高くして狭し、山は思想の起る處にして之を實行する處にあらず、詩人ゲーテ曰く

Es bildet ein Talent sich in der Stille;

Sich ein Character in dem Sturm der Welt.

智能は閑靜の地に成形し、

品位は社會繁雜の中に熟す。

智能もし山に存すれば只智能として終るのみ、山を出でて平地に下るに及んで始めて實行となり品位と化するものなり、恰も山谷の溪水は或は狂奔して白沫を岩角の上に揚げ、或は千仞の斷壁を飛んで瀑布となると雖も、平野に降つて沃田を灌漑し市街を環流するにあらざれば世に實用を爲さざるが如し、山は學校にして平地は社會なり、山は養ふに能くして伸張は平地にあり、山は永く留まるべき所にあらざるなり。

是れ實に山國の缺點にして、國を山間に立つるの民は狹隘にして遠大ならざるの理由なり、山國の民の特徴として激烈なる愛國心を有すると同時に、嫉妬憎惡の念に深く、針小些細の過失は百世に互る怨恨の基となり、郡は郡と争ひ、村は村に抗し、外に強敵の犯すなき時は内訌紛擾の中に日を送るを以て常とす、詩人ゴールドスミスの此點に關する觀察は健全なり、

* Their morals, like their pleasures, are but low :

For, as refinement stops, from sire to son

Unalter'd, unimprov'd the manners run ;

And love's and friendship's finely pointed dart
Fall blunted from each indurated heart.

Some sterner virtues o'er the mountain's breast
May sit, like falcons covering on the nest;

But all the gentler morals, such as play

Through life's more cultured walks and charm the way,

These, far dispers'd, on timorous pinions fly,

To sport and flutter in a kinder sky. —The Traveller, 228-238.

モンテネグロ國と其民に關する地理學者の記事は左の如し、

モンテネグロ (Montenegro) 即ちカラダグ (Kara-dagh 黒山の謂なり)、

山國なり、高嶺の連續より成立ち、高きは八千五百尺より九千三百尺に達す、

……人口二十五萬、甚だ無學にして喧争を好む、四十餘族に分離し、争鬪絶ゆ

る隙なし、報仇は義務として信ぜらる、愛國心非常に強し。

山に氣骨ありて度量なし、思想多くして實行少し。

第三章 地理學と歴史 其二

平原國

平原は思想を實行するの場所なり、沃野千里、是れ高山大澤の中に養成されし偉雄が來つてその偉想を地に印するの所なり、伊太利國カムパニヤの平原は「七丘」の内に凝固せし拉典民族の一支が覇業を世界に建つるの起點なりき、印度ブンジャ一ブの平原は蒙古、波斯の雄族が皇紀を開き、政令を布くの地なりき、黄河、揚子江の平原は滿洲、漠北の酋長をして雄圖を逞うせしむるの所なりき。

41 山に據るの民は未だ防禦の位置に立つ民にして、天下を制せんと欲するものは平原樞要の地に據らざる可らず、是れ關八州が天下を制するの所以なり、是れ尾濃平原を扼するものは常に威を關西に振ひし理由なり、是れ秀吉の地理學的本能が京都を棄てて大阪に築き、家康に訓し彼をして小田原に據らずして江戸に築かしめし解

明なり、是れナポレオンの軍略が常に山間の要塞に眼を留めずして直ちに平原の中府を衝きし理由なり、此簡短なる地理學上の原理を認めずして、軍略政略兩つながら度を失ひ、後の歴史家をして嘆惜措く能はざらしめし實例甚だ多し。

平原は世界争鬪史の劇場なり、そは平原は國民富力の淵源なればなり、山林の薄利なる、鑛山の危険なる、以て永く國民の生命力を維_つぐを得ず、水産の暴利あるに關せず、以て國を建つるの基本となすに足らず、カリホルニヤの金鑛は北米西海岸に人を集蒐するの用ありしと雖も立憲國の秩序に安ずる勤勉なる民を造りしはサクラメント (Sacramento)、サノアキン (San Joaquin) 沿岸の田園なりし、世界に冠たる那威國の漁業すら_カ、_カ國山間幽谷に散布する麥畑の收穫の慥かなるに若かず、佐渡金鑛の豊かなるも一郡の農産物に及ばず、北海全道の漁獲は僅かに四十萬の民を支ふるに止つて石狩平原の開鑿は麥麵を日本全國民に給するに足る、國の富は實に其國平原の富なり、是れ白耳義の一小國が歐洲諸大國の垂涎する所たるの理由なり、是れ二十六萬町歩を有する埼玉縣が五千六百萬圓の地價を有し、六十萬町歩を有する長野縣が其物産の豊饒なるに關せず僅々四千萬圓の地價を有する理由なり。

富の淵源たり、政權の中央たり、英雄の活動地たる平原亦特種の缺點あるあり。山の特産は自由にして平原は壓制の巢窟なり、交通の便益は民の集合連帶を促し、確固たる制度の實施となり、人は個々として動かずして團體として生活するに至る、平原國の民は一組織の一分子たるに過ぎず、集合體として全土を壓するの權力を有し、一個人としては一日の生を繋ぐを得ず、世界の王にして社會の奴隸たるは平原國住民の常態なり。

世界の最大壓制國は露西亞なり、東は太平洋岸より西はボルチック海に至るまで、渺茫千里に互る一低地は一億萬人の奴隸を使役する一專主の領土なり、憲法政治の恩澤は西隣諸邦に普く、其光已に東端の君主國たる日本にまで輝き渡りし十九世紀の今日に當つて、ヴォルガ、ドニール沿岸の民は尙ほ其生命を一暴主の手に委ね、無期の兵役、西比利亞の竄流も唯々諾々應者の如くに肯んぜざるを得ず、もしヴォルダイ山 (Valdai Hills) をして尙ほ三千尺高からしめ、其支脈を黒海裏海の邊まで延長せしめしならば、自由は已にウラル山頂に達せしものを、ステッド (W. T.

If only there had been a plump of Alps in the centre of Muscovy, how different Eastern Europe would be to-day! Where Nature fails to create ramparts for freedom, the cause of liberty seems foredoomed to defeat. (Review of Reviews, Sept. 15, 1891.)

もしムスコビヤ(露國)の中心に於てアルプスの一塊あらしめば東歐今日の有様は如何に異なりしよ、自然が自由の爲に胸壁を築かざる所に於ては自由は敗滅に歸するが如し。

波蘭土國の悲劇的運命は實に之を環するに自由の胸壁を缺きたるが故なり、コースト(L. Kossuth)、バティヤーニー(Batthyany)等の憂國者にして終に洪匈利國の獨立を維持し得ざりしは西方塊國の方面に當つて一山脈のダニューブ平原を横斷することなければなり、平原は常に山間海濱の民の掠奪地にして、彼に服し是に媚び、常に牛耳を未開蠻人の手に委ねぬ、印度ブンジャーブ平原が七百年を出でざるに主を替ふるごと七回、蒙古、亞拉比亞、波斯の酋長等が陶人が粘土を陶冶するが如く

億萬の生靈を利慾の用に供せしと雖も、一人起つて之に抗せしものなかりしは、富饒なる平原國の運命として實に悲嘆すべきなり。

國産の輻湊地にして國民の集合地なる平原は亦腐敗の依て以て起る處なり、恰も清冽たる溪水が蜿蜒として流れて河口に近くや、沼池となり溝堀となりて病毒を發するの原因となるが如し、醫學者某の言に曰く、「人もし其隣人より平均四百尺の距離に住せば彼の平均命數は五十年なり、距離三百尺に減ずれば命數は四十年となり、六十尺の距離に近づけば三十年間生くべく、二十尺に至れば僅に二十五年の生命を保ち得るのみ」と、是れ實に人口稠密の度合と平均命數との比例にして何人も能く知る所なり、是れ實に樵夫一人は商估の番頭十人に敵する生活力を有する解明なり、是れ實に僅々六百萬の人口を有する滿洲が四億萬の人口を有する支那四百餘州を服從せし最大理由なり。

富の増加が常に國民の惰弱を招くことは餘り明瞭なる事實にして余輩の此に之を論究するの必要なし、富は堆積すれば必ず腐敗するものなり、平原もし其富を排散

するの道なければ、伊國カムバニヤの平原が病毒の醸造地となりたるが如く、富は平原居住者の心靈を犯し、終に延いて全國を腐朽せしむるに至る、平原は山民の活動地なれども、海に出でざる平原の民は朽死するに至る。

海 國

渺茫たる海面是れ廣濶の代名詞なり、山間の頑民、市街の怯夫、天涯無限蒼浪の上に浮ぶに及んで始めて宇宙の大を悟り、狹隘壓制の憎むべきを知覺す、海を望んで我等は始めて世界の民たるを知る、芙蓉峯の秀麗なるは太平洋の廣漠たるに及ばず、退保と嫉妬は陸の物なり、進取と寛裕は海の産なり、埠頭海に臨む處、是れ世界の王國に入るの門ならずや、黄河滔々海に流れて止まず、人のみは陸に填積して窒死すべきか。

海よ、海よ、我を寛ひろくせよ、

俗界の權者我を擒とらにし、

その古俗と舊習とは我を檻し、

我をして我が羽翼を伸ばし得ざらしむ。

我は海鷗かもめの自由を慕ふなり、

我は信天翁アルビトロスの飛力を羨むなり、

無窮の靈を有する我は、

此壓迫狹隘に堪ゆる能はざるなり。

海よ、海よ、我を清くせよ、

腐敗は平原都城を襲へり、

山間の仙境亦陋習に化せり、

浩然の氣我今之を全土に求むるも得ず。

洋面到る處酸氣多し、

海上波靜かなる時風に香味あり、

清淨を愛する我の靈は、

此穢くわい此汚せに堪ゆる能はざるなり。

海よ、海よ、我を強くせよ、

配慮は我の英氣を挫けり、

辛勞は我の思惟を壓せり、

我筋我肉將に縮減せんと欲す。

濤上風に逆ふ時我に膽力生る、

船頭楫を御する時我に恐怖なし、

活動を愛する我の生は、

此軟此弱に堪ゆる能はざるなり。

獨立の胸壁として海は山に亞ぐの價値あり、埃及國をして外敵の攻撃を受ること少くして太古時代に充分なる文明を發達せしめしものは其北方を守るに地中海あり東方に紅海を控へしが故なり、亞細亞大王ゼルキセスをして歐洲文明を初芽の中に

希臘半島に於て潰滅し能はざらしめしものも海なりき、海は英國獨立の維持者なりき、西班牙王フキリップ二世の大艦隊は人手を借りずして空の四方に散亂せられたり、大帝ナポレオンはイギリス海峡六時間の擅有權を占むる能はずして終に彼の終生の目的たりし英國を破碎し能はざりし、宜なるかな詩人コレリツヂの誇りしや、

*
And Ocean mid his uproar wild
Speaks safety to his island child.
Hence for many a fearless age
Has social Quiet loved thy shore,
Nor ever proud invader's rage,
Or sacked thy towers or stained thy fields with gore.

元の入寇を博多に邀へし我日本の獨立も亦海の賜物ならずと云ふを得んや。

然れども海の重なる用は防禦にあらずして交通にあり、海は我等を圍まんとして
49 存するものにあらずして我等を放たんが爲の者なり、海は妨害物にあらずして反て

最便の通路なり。

沙漠の一千英里は六十日の旅程を要すれども、風帆船の遅緩なるも大西洋二千五百英里を半百日に横斷し得べし、鐵路の便利なるも一噸の貨物を百哩三圓より少き運賃を以て運輸するに苦しむ、海運の低廉なる、汽船を以て太平洋四千三百海里を一噸に課するに僅かに十五圓にして尙ほ餘裕あり、山路の峻なるは海路の迂回なるよりも難し、海の達せざる處是れ最も僻陬の地なり。

海の歴史は擴張の歴史なり、亞細亞西端の海岸一小片に據りしフェニシヤ人は海に打勝ちしが故に地中海と「北海」とボルチック海沿岸の諸邦に勝てり、海に據りしが故に雅典アテンスの小邦は希臘聯邦に敵對し得たり、海に浮びしが故にベニスの一市は歐洲諸大國に比敵するの富と權とを握れり、海に出でしが故に和蘭の小なるも尙ほ歐洲第二等國に位するを得、海を利用せしが故に英國は今は世界六分の一の持主なり、海に據りし間は西班牙は今日の軟弱國ならざりし。

海に據らざりしが故に印度、支那の文明は停止の文明なりし、海を怖れし日本は永く東隅の一隱居國たりし、海に便ならざるが故に露國の廣大なる領土も英國の一

島嶼に及ばず、海に濱する尠きが故に塊地利國は歐土の外に羽翼を伸ばすを得ず。

人類は陸に國をなして海に相合するものなり、一洋萬邦を繋ぐ、海は其面の平かなるが如く人種をして悉く平等ならしむるものなり、視線を遮るに芙蓉峯の聳ゆるなく、歩を停むるにラインの流るゝなく、渺茫たる平面水天彷彿たる處、是れ人種觀念が忘却せられて人類觀念の起る處なり、四海兄弟主義に基おする世界王國の建設は海國の手に依てのみ成るを得べし。

歴史は山に始まり平原を通過して海に終る、三者其一を缺いて國民の發達は健全なる能はず、人類歴史の多分は此地理學上、三原素の相互の關係なり、人を學ばんとするもの豈に地理を審かにせずして可ならんや。

第四章 地理學と攝理

「攝理」とは宗教上の語にして英語の providence なる語を譯せしものなり、ウエブスター此語に意義を附して「神が萬有の上に執行する先見と配意」なりと曰へり、故に攝理 (providence) なる語は舊來の宗教學者が用ゐ來りし「意匠」(design) なる語と稍や意義を同うするものなり、即ち造物主が宇宙を造るに當つて時計師が時計を造るが如く一定の方式と確固たる目的を以てせられしを云ふなり。

故に攝理の觀念は絶對的意志存在の觀念を含有す、而して絶對的意志存在に關する問題は純粹哲學上の問題なれば余輩の爰に論究せんとする所にあらず、余輩の探究は歸納的なり、余輩に明瞭なる地理上の事實の供せられしあり、而して余輩は余輩の常識に訴へ、最も見易き推理法に則り、此地は意志なき偶然の作たるや、或は一大思想の其中を貫通するありて、現然たる意匠の其中に存するや否やを判別せんと欲す。

地球表面に五大洋と五大洲の散布するあり、而して皮相的觀察は之を偶然の配布に歸するならむ、然れども少しく注意して之を閱すれば少くとも左の機械的配布法に據ることを見るなるべし。

五大陸は、第一圖の如く、北極を中心點として三大陸塊となりて三方に向つて放射すること。

一、亞細亞Ⅱ濠太刺利陸塊

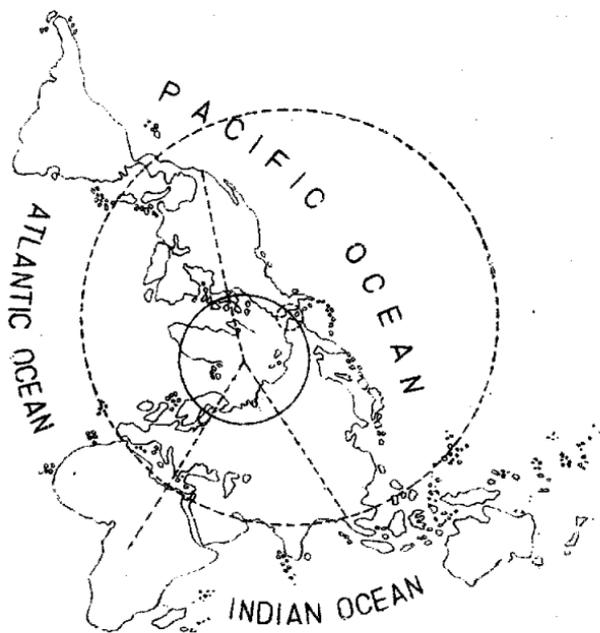
スマタラ、爪哇、バンダ諸島は兩大陸を繋ぐ連鎖なり、且つ東印度多島海は水底百尋を越ゆる所甚だ尠し。

二、歐羅巴Ⅱ阿弗利加陸塊

地中海は陸塊の凹みなり、是れ兩大陸の山脈の方向を以て徵すべくシシリ島が伊太利半島を阿弗利加北岸に連續するを以て證すべし。

亞細亞大陸西北部オビ河口よりウラル山脈の東斜面に沿ひ南方裏海に到る處は一凹地にして古昔は一面の海たりしの證は、裏海に棲息する動物が北氷

第一圖



洋産のものと同類似する甚しきを以て知るを得べし、故にもし黒海並に紅海を算入すれば、歐亞の境界は水と見て可なり。

三、亞米利加陸塊

是れ三大陸塊中最も判然たるものなり。

今此等三大陸塊を相互に比較する時は左の奇異なる符合あるを發見すべし。

一、各陸塊は南方に尖りて北方に擴大せり。

濠太刺利の南端サウス岬、阿弗利加の南端喜望峯、亞米利加の南端ホーン岬。

二、各陸塊は南北二分に判分す。

三、各陸塊の東南隅に近く大島の存するあり。

濠太刺利の東南にニュージーランド島あり、阿弗利加の東南にマダガスカド島あり、南亞米利加の東南にフホルクランド島あり。

四、各陸塊北部の東岸に當つて著大なる島あり。

亞細亞に日本島あり、北亞米利加にニューファウンドランドあり、歐羅巴は

東方に海を有せざるが故に島を有せざるが如しと雖も、ウラル山脈は島嶼が海中に突出するが如く、歐亞に互る大低面の上に屹立す。

五、各陸塊南北兩部の中間、東方に當つて著名なる多島海あり。

亞細亞、濠太刺利間に、呂宋、ボルネオ、ギニヤ、セレベス等を有する東印度並にメラニシヤ多島海あり、歐羅巴、阿弗利加間にエージアン多島海ありてシクラデス群島、シプラス、ローズ諸島を含む、南北兩亞米利加間には有名なる西印度群島あり。

六、北大陸は南方に向つて各々三個の半島を有す。

亞細亞に印度支那、デカン、亞拉比亞あり。

歐羅巴にバルカン半島、伊太利、西班牙あり。

北亞米利加にフロリダ、墨西哥（パナマは切斷せしものと見做す）、カルホルニヤあり。

是れ偶然の符合とは見えざるなり。

今機械的の配列を措いて歴史的に陸地の配布構造法を攻究する時は尙ほ一層「意匠」の其中に存するを見るを得べし。

地の目的は如何、人類を發達せしむるにあり、地理の目的は歴史の目的なり、而して後者の如何は歴史哲學者の論ずる所なり。

リトレー (Littré) 曰く、歴史は生理的定道論の論理を以て解釋し得べき自然的現象なり。

ブンセン (Bunsen) 曰く、歴史は重に人類宗教的良心の發達なり。

ヘーゲル (Hegel) 曰く、歴史は心靈自由の發達にして、原因結果の連鎖なるが故に、その渾ての現象は合理的に解し得べきものなり。

シェリング (Schelling) 曰く、歴史は絶對的意志の發達にして、徐々たる神の自現なり。

生理的定道と云ひ、宗教的良心又は心靈自由の發達と云ひ、絶對的意志の開顯と云ひ、其内に進歩啓發の意を含まざるはなし、人類は地球廻轉の度數と共に完全に向ひ進みつゝあることは極端なる厭世論者にあらざる限り悉く識者の承認する所なり、

而して人類の棲息所たる地は此進歩啓發を助け促すものならざるべからず。

人類の進歩啓發を促す爲に地は如何なる特質を有せざるべからざるか。

一、進歩を助けんが爲に地は開拓、耕耘、運輸、交際の便利を人類に供せざるべからず。

二、啓發を助けんが爲には地は多少の障害を人類に供せざるべからず。

地の配列構造にして全く人類進歩を奨励せざらん乎、人類は失望に沈んで進まざるべし、一の障害物をも供せざらん乎、進歩簡易に過ぎて心靈の怠惰と倨傲とを招き、智と靈とは啓發せざるべし、適宜なる奨励と適宜なる障害とは教育上の必要にして、天が人に與ふるに地を以てせしや此特質を有する地球を以てせり。

我等の棲息する地球は教育上絶大の價值を有するものなれば、甚だ完全にして全く完全ならず、即ち此地球は人の勞力を以て始めて完全たるを得るものなり。

地球全面を大體に觀察する時は吾人は其最も良く人類の幸福を計らんが爲に構造配布せられし者なるを見るなり、其二三の實例は左の如し、

一、陸は地球面の三分の一にして水はその三分の二なり(陸二七と水七二の割)、是れ一には陸上の植生に水を給する爲、二には水は陸に勝りて運輸に便なれば陸と陸との交通をして便ならしめんが爲なり。

二、陸地は温帯に多くして熱帯寒帯に少し、——地をして可成だけ快樂なる住所たらしむ。

三、低地は赤道を去ること遠きに從つて多く、高山高原は重に赤道直下であり、——炎熱劇しき所に於ては海面よりの高度を増して之を刪滅し、太陽光線の斜角強き所にては高度を減じて悉く之を吸収せしむ。

四、各陸塊は之を中央部に於て兩斷するに水を以てせり、以て東西交通の便を開けり、——亞細亞、濠太利間に東印度多島海、歐羅巴、阿弗利加間に地中海(紅海)、南北兩亞米利加間にカリビヤ海並にメキシコ灣あり。

五、大山脈は重に陸塊の一方に偏して常風の下位にあり、是れ濕氣を其一方に

凝結せしめ、不用の高原沙漠を減少せんが爲なり。

六、寒暖二種の海流より利益を受くる陸は多くして損害を蒙るは尠し。

然れども地上に不便缺點亦尠しとせず、其二三を擧ぐれば、

一、寒帯に氷結の地あり、熱帯に不耗の沙漠多し。

二、東西通路にスエズ地峽、パナマ地峽の如き交通の障害あり。

三、阿弗利加、濠太刺利の如く山脈陸の四方を圍み、海岸と内地との交通を妨げ、且つ雨路を遮斷して數萬方里の不毛沙漠の地を作れるあり。

其他枚擧するに遑あらず。

然れども地球表面一般の觀察より論ずる時は便益は多くして障碍は尠し、獎勵は常にして妨害は例外なり、即ち海陸の散布、形狀、構造等は人類の發達を援け促すの徴候あることは少しく意を留めて地理學を攻究するものには甚だ顯明ならざるを得ず。

人類の發達とは勿論その體、智、靈の均齊的發達を謂ふなり、故に其發達は之を代表する一個人の發達に於て學ぶを得べし、其模範的一個人の發達の順序を述べれば左の如し、

一、小兒時期——重に肉體の發達時期なり、彼の思惟は想像的なり、靈性は幼稚にして單純高尚なる觀念を感受し易しと雖も、之を理性に照し、疑問に附し、討議攻究するの念は甚だ微弱なり。

二、青年時期——智識發達の時期なり、軀肉は外部の伸張を止めて内部の筋骨は強固を増し、理性漸く進みて事物の原因を疑議討究するに至る、經驗層ウむに従つて益々生命の實價あるを悟り、彼に理想なるもの起り來りて之を實行せんとの念禁ずる能はざるに至る。

三、壯年時期——實行活動の時期なり、體、智、共に成熟に達して今や思想の實行は始まりぬ、生命は勞働となり、地は一の職工場と見做さるゝに至る。

四、老年時期——靜思の時期なり、體力、智力は衰へ始めぬ、業ウ已に成りて今は安らかに天命を待つのみ、靈性頓に發達の度を加へ、永遠の美音を耳にす

るに至る、詩人ウォルツウォルスの句に云へるが如し、

* Wings at my shoulder seem to play;
But, rooted here, I stand and gaze
On those bright steps that heavenward raise
Their practicable way.—*Evening Ode.*

人類一般の進歩も同一順序に據るものなり、但し人類全體の發育史には老年時期のあるなし、「個人は失せて愈々益々大なり」(Individuals wither, but the world grows more and more)、人類の最終期は克己博愛の時代なり、故に博士コッカー氏は人類の進歩歴史を左の四期に區分せり、

第一、服従時期

第二、良心發達時期

第三、自由發達時期

第四、意志發達時期

而して余輩の觀察する所を以てすれば、地は人類の此發達を促さんが爲に造られし

ものなり、即ち彼の産室並に幼時發育の爲の大陸あり、彼の教育場即ち獨逸人の稱する「ジムナジウム」(鍛鍊場)に供せられし大陸あり、彼の活動大陸あり、克己博愛の性を養成發揚するの大陸あり、余輩は今順を逐うて余輩の思考を開陳せんと欲す。

第五章 亞細亞論

人類の始祖は地球表面上何處に顯れしやは未だ人類學上の大問題なれども、其始めて歴史的人民として生れし地は疑ひを入れるべきにあらず、即ち亞細亞大陸の中部ヒマラヤ山の西北面より西の方イラン、アルメニヤ高原の邊にありしことは史學上の確説として存するなり。

吾人をして今亞細亞大陸の地圖を開かしめよ、而して其地形構造は此起原的の性を帯びざるかを研究せしめよ、吾人は亞細亞の地勢に於て左の要點を見るなり、

一、亞細亞大陸は諸大陸の中央に位し、後者の軸線は前者より星光線的に四方に放射すること（第一圖を見よ）。

二、亞細亞大陸の山脈高原は規模甚だ宏大にして、その區分も随つて粗大なること。

三、山脈高原の集合する所は稍や中央部の西に偏し、支那帝國の西端、印度斯

第二圖



坦^シの北隅、パミル高原にあること。

四、北緯五十度以南に左の沃饒なる水域が、此中心點の東西南北に、距離を隔てて存すること。

東、太平洋水域（支那）

南、印度洋水域（印度）

北、アラル海水域（土耳古^{トルキスタン}）

西、ペルシヤ灣水域（バビロニヤ）並にナイル河水域（埃及）

五、中央點を通過して南南西より北北東に向ひ一大山脈の連互して大陸を東西に二分すること（スリマン山脈、天山山脈、亞爾泰^{アルタイ}山脈）。

今之を歴史的に解すれば左の如し、

一、起原は勿論中心の意を含む、而して人は陸上の動物なれば彼の歴史は陸の中心點より始まらざるべからず。

二、人類幼年期の發達は廣大なる高原に逍遙するを要す、彼の筋骨は強健ならざるべからず、彼は平原の惰弱淫逸に沈むべからず、活潑なる精神の開發と

剛健なる體軀の基礎とは高原空氣爽かなる處に於てのみ望むべしとは余輩の已に論ぜし所なり。

三、人種特有の性質を養成せんが爲には重巒峯嶺を以て各々互に相隔絶するを要す。

四、文明最始の武歩は氣候溫暖（平均七十度乃至八十度）、土地膏腴、至少の思力を以て耕耘殖産に従事し得る沖積層原野を要す。

五、二種の正反對主義の充分なる發達には人類は其散布の始めより交通に至難なる天壁を以て全く兩分せらるる事を要す（事は第八章に審かなり）。

因に云ふ、東西兩洋の分界は歐亞の界を以てせずしてスリマンⅡ亞爾泰山脈を以てすべきなり、是れ人類配布の始めより歴史の兩分せし分界線なればなり。

試みにカシユミヤ、パミルの邊を歴史の發點と假定せよ、而して之より以東の國民に問うて見よ、汝等の祖先は何れの方面より來りしやと、支那人も日本人も朝鮮

人も皆答へて云はん「西より」と、是より以西の國民は皆答へて云はん「東より」と、スリマン山以東、太平洋に至るまでは、文明東漸し、以西、地中海、大西洋、米大陸を経て太平洋東岸までは、西漸せり。

亞細亞高原は世界歴史的諸民族の最始の「ホーム」なりき、英國人の先祖が未だ獨逸北方森林濕地の中に居住を定めざりし前、希臘人、伊太利人、佛蘭西人、西班牙人が未だ地中海の諸半島に割據して各、其特質を發達せしめざりし前、露人、波蘭人、ブルガリヤ人が未だスラフ人種として異様の言語と風習とを適用せざりし前、波斯人も印度人も獨逸人も瑞典人も今日世に白哲人種と稱するものは、其始めは亞細亞中部の高原に居住し同一の言語を用ゐる同一の感情と制度とを以て支配されしアリアンの一種族たりしことは、骨相學と言語學と人類學とが充分に證明する所なり。

第二の歴史的國民として、殊に古代史の劇場に於て最も著しき活動をなせしアシリヤ、フィニシヤ、ユダ、コプト（埃及）、亞拉比亞人等を抱括するセミチック人種も、其起原は南方亞細亞の高原にありし、今の所謂アララット山なるものは實にノアの方舟はこぶねが漂着せし所にあらずとするも、セミチック祖先がチゲリス、ユーフラ

トの水原近き邊に起りしことは又疑ふべきにあらず。

第三の歴史的人種にして、東には支那人、日本人として存し、西には歐洲白哲人種の中に強固なる國民の基本を据ゑし洪匈利人として存し、ラブランド人、バスク人、土耳其人として分支配せしもの、之を總稱してチュラニヤン人種と云ふ、而してその起原は今の露領土耳其斯坦の東方、オクサス、ヤクゼルテスの姉妹川が天山山脈萬巒の頂に堆積する雪を以て養はるゝ邊にありしことも亦反對すべからざる歴史的考察の結果と云はざるを得ず。

人種の區分は、パミル高壁の三面に於て果行されしが如し、其北なるものはチュラニヤン即ち蒙古人種として東西に分支し、其南なるものは或は南下してデカン半島を占領し、或は西向してイラン高原に遊牧し、進んで黒海の南西を拓し、終にヤバン (Avan=Ionian) 諸島、希臘半島に侵入せり、而して已にアルミニヤ高原、ヴハン、ウルミヤの湖畔に現然たる一種族をなせしセミチック人種は、或は南向して波斯灣頭に移住するあり、或は西向して地中海東岸を占領するあり、而して人類が始めて歴史の頁面に顯れし時は已に判然たる東西兩洋の區別ありて、其西半は已に國民競

争の途に就き、人種の軋轢已に始まりし時なりき。

余輩は今パミル高原西流の後を追うて其成長發達を學ばざるべからず、東流せしものはその特殊の歴史を有すれば余輩は別問題として之を講究するを要す。

西方亞細亞

西方亞細亞の地たるや其面積殆ど二百八十萬方哩にして歐羅巴大陸より露西亞一國を除きしものと相比敵す、然るに其地勢たるや之を高地低地の二部に區分し得るのみ。

即ちイラン高原なるものは東の方スリマン山脈より西の方エージヤン多島海に至るまで高臺燥地相連り、南面にタウラス(Taurus)、ザグロス(Zagros)の東西脈ありて「平地」並に波斯灣に對し、北面にはアララット(Ararat)、ヘルブルツ(Erburuz)の諸山亦東西脈として存し、アラル、裏海の兩水域に接す、延長二千五百哩、幅六百哩あり、其最高點はアララット山にして海面を抜く事一萬六千九百尺、其西方海近き邊は平均二千五百尺の高度を有し、東方スリマン山に近づくに及んで六千

尺に達す、アララットの高原は全高原を二分する所にして其平均高度は五千尺なり、是れチグリス、ユーフラートの兩對河が源を發する邊にして西方亞細亞の中心點なり。

「平地」は兩大河の沿岸を云ふものにして、ザグロス山の西南斜面、亞拉比亞沙漠の東北部にあり、二河の地域耕耘に適するの地十萬方哩に達す、殊に兩流相近づくの邊より波斯灣頭に至るまで沿岸二百五十哩は膏腴なる沖積層地にして、田園となすに易く、豐熟の正確なるより早く農業の進歩せし處なり、是れ實に西方亞細亞の樂園なり。

亞拉比亞半島は其面積西方亞細亞の三分一以上を有すと雖も其地たるや熱帯に偏すると土地の荒蕪たるより古代文明に仲間入なかまぐちするの機を有せざりき。

西方亞細亞に附するに埃及を以てせざるべからず、此國は阿弗利加大陸の東北隅に位すと雖も其人種並に歴史は亞細亞的なり、ナイル河の下流にありて、其富其貴は全く一流の賜物なり、北に地中海を控へ、他の三方に沙漠を擁し、亞細亞本土と連續するに乾燥荒蕪たるシュール(Suhl)沙漠の横はるあり、以て宛然たる孤島獨

立の形をなせり、其土地の豊饒なる近々五百五十哩の河邊峽谷の地は七百萬の人口を養ひ得べし。

是れ西方亞細亞地勢の一斑なり、人類の幼年期三千年は此舞臺の上に演ぜられたり。

西方亞細亞の地理は一高原一平原より成る、而して健全なる國家は山のみを以て成立せず、又平原のみを以て發育する能はざるを以て、西方亞細亞の地理は唯一大國の存在を許すのみ、即ち兩大河の沿岸を得しものは時の全世界を得しものにして、之に對して權衡を保ち得べきものは他に存するあるなし、故に此地に於て七大帝國相踵いで起り、文明に歩一步を加へて去れり。

埃及はナイル下流の沖積層地に起り、其土地の沃饒なると、耕耘の容易にして收穫の正確なると、其四塞要害の位置にあるとより、智能未だ進まず、經驗未だ乏しき人類の開發期に於てすら、文明は最速度の進歩をなせり、耕耘灌溉の法、彫刻建築の技にして、今尙ほ見るに足るべき者擧げて算ふべからず、殊に土木工事の如き

に至つては今世人も未だ曾て及ばざるの偉壯に達せり、ナイル河は全國貫通の便を供し、地中海は新文明を西方諸國に分布せり、紀元前千四百年頃埃及國の勢力頗る増進し、アッシリヤ國に侵入し、西方亞細亞を蠶食するや、時の開明國と稱するものは悉く埃及の文化を利するを得たり。

カルデヤ國はチギリス、ユーフライト兩大河の間に起り、その地理學上の位置並に便利は埃及に劣ることなきより、此處に亦新文明の發端を開けり、純粹文學はカルデヤ人を以て始まりしが如し、紀元前四千年の昔已にアガデー (Agade) の有名な書籍館ありたり、斗量法は發明せられたり、快晴なる彼等の氣象は早くより天體の觀察に彼等を導き、遊星の運行、日月の移轉に關する彼等の記事は今尙ほ天學者の參考として科學上の價値あり、彼等の彫刻は埃及人に勝りて細密なりき、彼等の製造は著しく上達しぬ、彼等の商船は兩大河を降つて波斯灣に浮びぬ、彼等の勢力は兩大河水域の全部を蓋ひ、時の文明國と稱するものはカルデヤ國の支配の下に來れり、カルデヤは實に歷史上第二の世界王國なりき。

埃及並にカルデヤに依つて開發せられし文明は紀元前七百年頃第三第四の世界王國なる前後兩回のアッシリヤに譲り渡されたり、其全盛の時に當つてはイラン高原の西半、兩大河の水域、埃及の全部、亞拉比亞の北部、悉く此世界王國の吸收する所となれり、其國王は又美術文學の優渥なる庇保者なりき、カルデヤの工藝美術は改良せられたり、壯大なる宮殿堂宇は建築せられたり、然れどもアッシリヤ人の天職は寧ろ文明の保護たるにありて、其開發にはあらざりき、恰も後日羅馬人が希臘文明を保存して之を歐洲の新國民に傳へしが如し、又アッシリヤ人の政策たるや、其征服せし國民を本國より他に移植するにありたれば、狹隘なる地方的觀念は彼等によりて撲滅せられ、世界的觀念は喚起せられたり、かの猶太人全體をしてカナンの地を去つてユーフラート河岸に移轉せしめしが如きは其一にして、其政策たるや、元敵國服從の目的に出でしものなりと雖も、其間接の結果に至りては猶太民族の中心に人種的觀念を絶ち、人類の博愛の念を生ぜしめたり。

第五第六世界王國として史場に現れしものはミデヤ並に波斯ペルシヤなり、共にアリヤン

人種の支族にして、イラン高原の東部、ザグロス山脈の東北斜面、空氣乾燥、地味荒瘠の所に養成され、其族長サイラスに靡かれて兩大河平原に降るや、パピロン城内肉山酒池の中に安逸を極めしベルシャザーの王室は其一撃の下に斃れたり、後ダリウス大帝の企圖に依り、波斯帝國は世界が未だ曾て見ざりし大領土を有するに至れり、即ち東は印度より西は歐洲ダニューブの河邊に至り、其面積は今の全歐羅巴に稍や髣髴たりき。

ダリウスのアリアンの政治的技術は始めて組織的制度を彼の大帝國に施し、一種の郡縣制度に依り全國を廿三の大區(Satrapies)に分割し、武權文權の別を明かにし、法令を出して大帝自らも之に則るの制を定めたり、爰に至つて世界は始めて法なるものの實施を目撃せり、權利の觀念を人類に紹介せしものは實に波斯人なり。

波斯滅びて第七の世界主人として歴山王^{アハキメネス}起れり、彼はアツシリヤ人がナイル「兩大河」の二文明を混合せし如く、歐を亞に介し、亞を歐に輸入せり、發見的の國民あり、改良的の國民あり、又紹介的の國民あるあり、歴山王の事業の如きは重に紹

介的の性質を帯びしものなり。

文明初發の時代に當りては一國の改良進歩は永く一地方の專有物として存すべからず、而して交通不便の太古の時代に於ては暴主の壓制に據るにあらざりて文化を配布するの法他にあるなし、幼年時代は專斷的の教訓を要するなり、而して西方亞細亞は自由獨立の念を發起するの地勢を有せざるなり。

數科目を同時に學び得ざること、是れ亦幼年時期の特質なり、兒童は一物にのみ注意を込め得べし、而して人類も其幼年期に當りてはその青年期に於ける均齊的發達を望むべからざるなり、彼等は埃及に依りて殖産術の大意並に腕力の使用法を學べり（方尖塔、^{オベリスク}、巨柱の如きもの）、カルデヤに依りて數理學の初歩、美術の發端を學び、智性發育の域に進入せり、波斯人に依りて始めて法律的觀念を起し、個人的意志を支配するに社會的意志を以てせざるべからざるを知れり、即ち教育家の稱する體育、智育、德育の三育は三大世界王國に依りて順を逐ひ序に従ひ人類全體に注入せられたり、而して三階の發育亦專制君主の鐵意に依らざるべからず、西方亞細亞

の地勢は能く此種の訓導を施すに最も適したるものなり。

幼者は巨と數とを重んじて理と質とを輕んずるものなり、之を教ふるに人身究理の美妙なるを以てするよりも山嶽の巨大なるを以てすべし、一君子の徳性を以てするよりも百萬の甲兵を羅列するに若かず、而して巨と數とは國民の綜合より來るものなり、山嶽に擬せしバビロン城の構造、ゼルキゼス大帝の二百萬の遠征軍は世界王にあらざれば供すること能はざるの大觀なり、西方亞細亞の地勢は能く萬國民の統一を促し、壯觀偉幻の中に幼稚の人類を薰陶せり。

斯く人類は其幼年期を西方亞細亞に經過し、期滿トキちて青年時期の鍛鍊を要するに至りしや、文明の中心は亞細亞を去つて歐洲に渡れり、西亞は能く其天職を盈たせり、彼女は其愛子を西隣に委ねたり、文明西向して終に世界を一周し、東隣より再び其乳母の地に歸復するまでは彼女は休養して可なり、攝理は今彼女の勞働を要せず、土耳其、亞拉比亞の蠻徒にして纒かに彼女の體面を保存するあれば足れり、彼女は失望すべからざるなり、血紅を漲らして西天に没せし太陽は、再び黄金色の

雲間より榮光に裝はれて東天より彼女の上に輝かんとす。

余輩は今文明を歐土に引渡せり、然れども余輩は未だ西方亞細亞の感化力にしてその最大なるものの一に注意せざりき、人に體、智、靈の三原素あり、而して亞細亞の誠實にして周到なる、人類に靈育を施さずして之を他人の手に委ねざるなり、埃及の富、カルデヤの文化、共に人類進歩の必要なり、然れども彼に心靈の存するあるにあらずや、人は麵麩のみを以て生活するものにあらず、彼に永遠を望むの慾あり、彼に造物主を父と呼ぶの特權あり、亞細亞もし其子に靈育を授けざりしならば彼女は其天職を完うせざりしなり。

地中海の東隅、亞拉比亞沙漠の西北に當り、一小國あり、古來カナンカナンの地と名く、後、猶太民族の住する所となりてより猶太國を以て稱せらる、其面積僅かに六千方哩、我の四國一島に及ばず、又歐洲最小國の白耳義の半なり、西に地中海を控へ、東にアラバの窪地と稱し海面より低きこと六百尺乃至千百二十五尺なる一大溝を擁す、南方にシェールの沙漠ありて埃及、亞拉比亞に連り、北方は狭くして纔かにツロ、シドンの地と相接す、其位置たるや歐羅巴、亞細亞、阿弗利加の三大陸を三方

に控へ、ナイル河流並に「兩大河」沿岸なる古代の文明兩中心點の中間にありて、二國の交通は必ず道を此國に取らざる可らず、故に孤立して一國の状態を爲すと同時に、廣く世界の形勢に意を注ぎ得べく、恰も通商の道に當る山間の小村は自ら商業に従事せずして世の變遷を明かにし得るが如し、此四通八達の一小國こそ心靈の大思想が人類間に注入されし處なりき、是に住するに多感的の民を以てすると共に其地理的形勢は宏莊威嚴の念を養成するに最も適合せり、西方海に瀕するの邊は、是れシャロンの平原にして薔薇花馥郁として四時絶ゆることなく、豊熟の麥田は洋洋として黄金海の狀をなす、東向すれば阜丘漸く高く、シェフェラー(Shaphelah)と稱し、山地平原の相接する處なり、登りて中央部高原の地に達すれば、是れ猶太民族本據の地にして、神聖なる歴史の多く繋る處、エルサレムあり、ベツレヘムあり、ヘブロンあり、共に天啓ありし地と稱し、岩石所々に狼藉するに關せず、古より據つて以て一神教の單純を保維せし所なりと傳ふ、高原の東南に當り、死海の窪地に向つて傾斜するの邊はエシモン(J. simon)即ち荒野と稱する處にして、其の荒漠不毛の狀は高原の繁榮田畑と相反し、迫害せらるゝ愛國者の隠所となり、無人

寂寞の地に獨一無二の靈と交通を開かんとするものの常に喜んで求めし祈禱場なり、尙ほ進んで東向すれば即ちアラバの窪地にして、峻坂を下つてのみ之に達するを得べし、其ヨルダン河は源をヘルモン山上堆雪の中より發し、南流してメロム、ガリラヤの二湖となり、屈曲蜿蜒百有餘哩にして終に死海に入りて没す、其濕潤に富むが故に、峡谷全く熱帶地方の狀を呈し、陰森たる綠樹恰もアマゾン河岸にあるが如し、中央部の高原北に進んで漸く低く、溪谷開けて耕耘の業甚だ易し、之れ羅馬時代のサマリヤにして其豊富なる反つて國民の孱弱衰微を招き、南方の荒野に業を修めし預言者の警誡を煩はせし處なり、尙ほ北進すればガリラヤの地となり、キシヨンの濁流、メギドの平原のある所にして、古來より劇戰場を以て名あり、東にガリラヤの湖水ありて、羅馬繁榮の時にありては、莊宮宏宇湖水に影映し、人口殷富の輻湊する處なりき、而してキシヨンの支流テールポルの麓に起る處、ヘルモンの白頂遙に天涯に聳えて高く、少しく高丘に上れば西の方「大海」(地中海)の白浪カーメル海角に當るを望み得べく、而も羅馬國道の通過するありて、坐して世界を窺ふの位置にありしナザレの一僻村、是れかの大工の一子耶蘇基督の成人せし處にして、

人類の道德的觀念は此一小村の感化力に與ること實に小少ならず、然り六千方哩の一小國は人類に一神教を傳へたり、而して其の感化力の深遠なるや、埃及の文化は腐敗に屬し、波斯羅馬の制度は纔かに古典學者の專有物として存するに至りしも、猶太國の遺産物たる一神教は世と共に其勢力の減少するを見ず、常に人類の進歩に伴ひ、文明と共に西漸し、之を助け之に助けられて今に到れり、世界大勢の趨く所を攻研せんとするものは一神教を信ずるも信ぜざるも猶太國と其遺物とを究めずして可ならんや。

猶太國の北境、レバノンの西麓、山と海との間に介する邊をフキニシヤ國と云ふ、此處にツロ(Tyre)、シドン(Sidon)、ザレプタ(Zarepta)等太古の市場の起るありて、廣く航海を歐大陸の南北岸に求め、雜貨交換を行ふと同時に歐羅巴、亞細亞間の思想の媒介となり、野鳥が果實を分布するが如く埃及バビロンの文化を西方諸國に輸送せり、進歩は發見と改良とのみにあらずして、亦之を傳布するの民を要す、西方亞細亞の文明はフキニシヤ人の商船に乗つて歐洲の東端希臘半島に渡航せり。

第六章 歐羅巴論

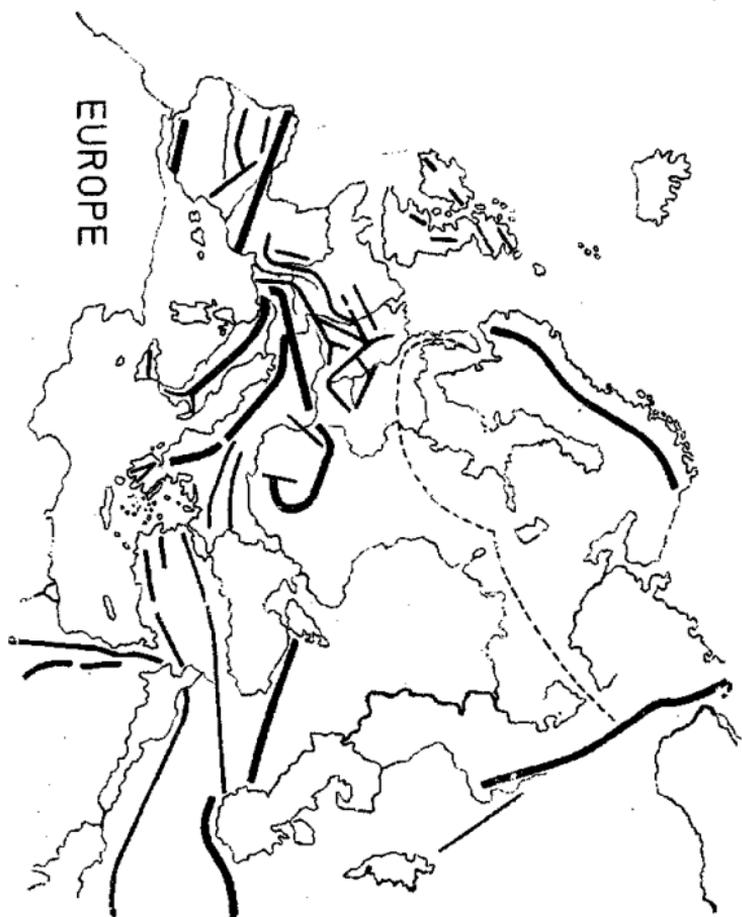
世界王國は失敗なりし、人類が一君主の下に一團體として存せんことは攝理が彼に命ぜし方針にあらざりしなり、共同の利は一人の以て爲し能はざる事を萬人相頼りて以て爲し遂ぐるにありと雖も、其害は個人の尊嚴と價值とを滅縮するにあり、人は單純なる集合動物にあらず、彼は眞正なる神の聖殿 (true shekinah) にして彼は彼自身にして完全なるものなり、社會組織の完全のみを以て人性の完全を求めんとするものは未だ人の何たるを知らざるものなり、我は神に依りてのみ己を自覺し得るものにして、神に依りてのみ他を知り得るものなり、人と人との關係は最も親密なるものなりと雖も間接の關係たるに過ず、自己以外の關係にして直接なるものは神あるのみ、人は先づ神を求めて而して後友を求むるを得べし、神に依りて繋がるゝにあらざれば鞏固なる社會團體は望むべからざるなり。

亞細亞的團體は機械的集合なり、威力は三百萬方哩内に散布せし種族を粘結せし

のみ、人性的組織團結はバロ、ネブカドネザル等の思惟せしが如き簡易なる業にあらず、人類は先づ分離せざるべからず、完全なる結合は充分なる分離の後にあり、舊記に曰く、

全地は一の言語一の音のみなりき、茲に人を東に移りてシナルの地に平野を得て其處に住めり、彼等互に云ひけるは、去來甌瓦を作り之を善く熟かんと、遂に石の代に甌石を獲、灰沙の代りに石漆を獲たり、又曰ひけるは、去來邑と塔とを建て其塔の頂を天にいたらしめん、斯して我等名を揚げて全地の表面に散ることを免れんと、エホバ降りてかの人衆の建つる邑と塔とを觀たまへり、エホバ言ひたまひけるは、視よ民は一にして皆一の言語を用ゆ、今既に之を爲し始めたり、然ば凡て其爲さんと圖維る事は禁止め得られざるべし、去來我等降り彼處にて彼等の言語を消し、互に言語を通ずることを得ざらしめんと、エホバ遂に彼等を彼處より全地の表面に散らしたまひければ、彼等邑を建ることを罷めたり、是故に其名はバベル（淆亂）と呼べる、是はエホバ彼處に全地の言語を消したまひしに由りてなり、彼處よりエホバ彼等を全地の表に散したまへ

第三圖



り。(創世記十一章一節より九節まで)

シナルの地とはカルデア國にして「兩大河」下流の平原なり、全地を通じて一言語たらしめんとは一世界王國となさんとの意なり(今の露國に於て國內に露西亞語の外他の國語を禁止するを照例せよ)、「我等名を揚げて全地の表面に散ることを免がれん」とは永久に世界王國を維持せんとなり、「エホバ降りて彼等の言語を淆みだし彼等をして彼等より全地の表面に散せし」とは世界王國の壞亂と分離とを謂ふなり、斯の如き王國はバベル(淆亂)なり、アレキサンドルの王國、成吉思汗ジンギスカンの王國、ナポレオンの王國皆然らざるはなし、西方亞細亞に於て人類は其幼年期の發育を遂げしと同時に、機械的團結の無功にして淆亂の基たるを學べり。

人類は分離せざるべからず、彼は彼の隣人より別居して彼の自力を試鍊せんことを要す、個人的獨立の念、是れ彼が彼の青年時期に於て學ぶべき事なり。

而して攝理は此の如き試鍊所を人類の爲に設けたり、歐羅巴大陸是なり。

歐羅巴の地勢たるや亞細亞大陸の西面より突出する一大半島なり、其面積は僅か

に三百八十萬方哩にして、本大陸の五分の一に過ぎず、其半島形は延びて其全體に及び、全土悉く半島の集合と稱するも可なり、故に到る所良港灣多く、隨つて陸地面積の比例に海岸線の甚だ長きことは他大陸の比に非ず、即ち亞細亞は一英哩の海岸線に對するに面積四百八十六方哩の割合にして、亞弗利加は七百十一方哩、南米は四百四十方哩、濠太刺利は三百九十方哩、北米は三百二十方哩なるに、歐羅巴は僅かに二百方哩なり、海運交通の便以て世界に冠たるや明かなり、歐羅巴の全土は悉く北溫帶中にあり、其極北部は少しく寒帶に入ると雖も、暖流の感化力は溫帶的の風土を西北全部に供し、以て全大陸を擧げて智能發育の好土たらしむ、此大陸に沙漠大高原の存するなく、全土到る處耕耘殖産に適せざるは殆ど稀なり、もしナイル、「兩大河」の沖積層兩平原の如き饒土の存するなくば、又リビヤの沙漠イラン高原の如き乾燥不毛の地の存するなく、事物悉く極端を脱して中和を保てり。

歐羅巴の山脈は二山系に屬す、一は亞細亞的山脈と稱し東より西するものなり、次は歐羅巴山系にして東南より西北するものなり、前者にコーカサス(Caucasus)、バルカン(Balkan)、カルパシヤン(Carpathian)、ピレニース(Pyrenees)の諸

脈あり、後者にアルプス (Alps) 並に其平行脈とキオーレン (Cheerlen) (Kjølen)、脈とあり、而して前後兩山系の相會する所は即ち瑞西の山國にして、萬疊の峰巒左右相對し、峻嶺嶮峨相交又し、以て自然の岩壁の中に自由を擁護する處なり。

此淆亂狀を呈する山脈の方向と、蝕入多き海岸線とは、小大陸を數個の獨立部に區分す、今歴史に據らずして單に地理學上より歐洲の地勢を察する時は左の明瞭なる區分を見るを得べし。

- 一 ボルガ、ドニーベルの水域 (露西亞)
- 二 スカンダナビヤ半島 (那威、瑞典)
- 三 ジュットランド半島 (丁抹)
- 四 大不列顛群島並に愛蘭 グレートブリテン
アイルランド (大英國)
- 五 イペリヤ半島 (西班牙、葡萄牙)
- 六 イタリヤ半島 (伊太利)
- 七 バルカン半島 (土耳其、希臘)
- 八 ダニューブ水域上流 (壤地利、洪牙利)

九 ダニューブ水域下流 (羅馬尼亞)

十 兩山系幹脈の交叉する所 (瑞西)

十一 アルプス山脈の西斜面ピレニース山脈まで (佛蘭西)

十二 兩脈延びて低阜丘となり互に相交又する邊 (ボヘミヤ、モラビヤ、ババ

リヤ、サクソニー、スウエ

ービヤ等、半獨立國の存す

る所にして歐洲政治地理上

混雜を極むる處なり)

是れ造物主が歐洲を國民思想發達の爲に造りしの徴にあらざして何ぞや。

歐羅巴地理は世界王國の建設を許さざるなり、亞細亞的の統一は歐洲に於て行はるべきにあらず、歐洲人は天の區畫に隨つて割據し、其各種の天資を發達すべきなり、殊に其區分の稍や均齊的なるは一國をして他に超越することなからしめ、以て隣國互に競争の念を生じ自力の智覺發育を促さしむ、而して國と國との確執競争は

人と人との關係に及び、其極たるや、人群市街を填むに至るも、人々自ら孤獨寂寞の念に堪ふる能はざるに至る。

* Yes; in the sea of life ensued,

With echoing straits between us thrown,

Doting the shoreless watery wild

We mortal millions live alone.

The islands feel the enclaspings now,

And then their endless bounds they know.

文明は亞細亞を去り、歐羅巴の代表者として希臘に迎へられたり、今や人類は四千年來幼年時期の舊慣を去りて、斬新なる青年時代に進入せんと欲す、直に之を大陸大の劇場に於て演ぜしむるの危険甚だ多し、人類は先づ小規模に之を試むべきなり、自然は急劇なる變動を好まず、試験は一小部に於て足れり、歐洲歴史は希臘に於て下稽古したげこを要せり。

亞細亞大陸は小亞細亞となり現然たる半島形をなして歐洲に向ひて突出す、其歐土に面するの邊は港灣屈曲陸中に侵入し、其ヘルモス(Hermus)、メアンデル(Maeander)兩河の如きは共に文明の西流を促すが如し、而して其以弗所、スミルナの如きは亞を歐に輸するが爲の渡口なるが如し、而して其エージャ海たるや、四塞環山殆ど湖水の狀を呈し、南面にカンヂヤ(クレタ)島の自然波止場を控へて「大海」の風波を遮らしむるが如し、加之、シクラデス、スポラデス等、一百餘島は其内に棊列して、文明をして亞より歐に渡らしむるが爲に供へし泉水の飛石たるが如し、而して希臘半島は歐より亞に向ひて突出し、其サロニカ灣(Saronicus Sinus)は亞より贈物を受けるが爲の蔽膝まへだてなるが如し、亞歐互に相接する處は、兩友物を贈受する時の狀をなせり、西方亞細亞の文明が小亞細亞エージャ多島海を通過して希臘に傳達せしは、地理學上の教導に依りしものにして、又攝理の指明せし所なり。

エージャ多島海は「地中海中の地中海」にして人類が航海術の初歩を練習する爲の小池なり、希臘は實に歐羅巴の雛形なり、而して地理學上の希臘のみ然るにあら

ず、歴史上の希臘亦小歐羅巴なり、博士フリーマン氏曰く、

歐洲の政治歴史にして其前例を希臘歴史に求め得ざるものなく、希臘の歴史

にして其實例を歐洲史に求め得ざるものなし。

にして其實例を歐洲史に求め得ざるものなし。
アテンス 雅典、スパルタ、テベス、エートリヤ等、其領土の分限より論ずれば一小郡の大に及ばざりしと雖も、其外交上の駈引に於て、其内治の方針に於て、其嚴然として獨立國の體面を維持せしに於ては、歐大陸の最強國と稱するものも彼等に超越すること能はざるなり。

五百年間に互る希臘人の經歷は全く新方向に人類進歩の方向を轉ぜり、世界王國の觀念は土臺的に破壊されたり、共和政治は個人的發達を促すが爲の最良制度として認められたり、バビロン、埃及より讓受けし美術の幼芽は希臘人の涵養する所となり、其發達は非常の速度を以てし、終にフィディアス (Ph. dias)、ポリグノートス (Polygnotus) を出し、彫刻繪畫の正模範を以て萬世に供するに至れり、其政治上の思想は極めて高尚なるものにして、其ペリクリースに於て文明世界は理想的政治家を得たり、希臘文明は亞細亞文明の正反對なりし、後者の卑陋粗大なりし比例

に前者は高尚極美なりし。

希臘は歐の代表者として亞に接し、亞の長を取りて之を歐化し、亞の強を挫き、歐の微弱を護り、前者の衰滅を弔ふと同時に後者二千年間發達の方針を示せり、希臘は彼女自身の爲に偉大なるにあらずして、歐亞兩文明の媒介者として世界歴史に功績を表せしなり。

然れども希臘の地勢と地理學上の地位とは彼女の功績を廣く世界に分布し得可きに非ず、そのアレキサンドルは希臘民族の武威をインダス河邊にまで及ぼせしと雖も、彼の王國は直ちに亞細亞化せられたり、希臘文明を再び亞細亞に試みんとするは、新しき酒を舊き革囊に盛るの類なりき、囊張裂け酒洩出でたり、新しき希臘文明は新しき歐土のみ受け入るゝを得たり、文明は西流し始めぬ、アレキサンドルの亞細亞征服は一時の逆流のみ、希臘文明を擾亂の中に保存し之を歐洲全土に配布せしものは實に伊太利なりき。

見よ伊太利半島の東南希臘に向つて伸ぶるを、其長靴形は南北に直立せずして踵

を以て希臘を受くるの状をなせり（伊太利は無禮者なり）、即ち其靴底に當るの邊なるタレントム（Tarentum）灣の沿岸、並にシシリ島の東部は始めて希臘人の植民を受けし處にして、希臘文明の侵入は此邊よりせり、伊太利は希臘と歐大陸の中心との間に横はる掛橋かかけはしの地位にあり。

歴史世界が擴張して地中海大となりしや、伊太利半島は世界の教導者並に保護者たるの自然の地位を占めたり、此國その東隣の希臘國より大なる事數倍、而も東西脈の國內を小區片に分界することなく、その南北脈なるアペニン山は險嶺甚だ尠く、其平均高度四千尺に充たず、以て脈の東西斜面を分離せしむるに足らず、時の文明諸國中伊太利の如く結體の状を呈せしものは他に存せざりしなり、殊にその地中海の中央に位するが故に時の文明世界の集視點たるを得せしめ、問はずして世界の首府たるの位置に居れり。

故に拉丁民族ラテンが一度タイバー（Tiber）河邊七丘の中に起り、覇をルービコン（Rubicon）以南の半島に敷くや、伊國は争ふべからざる世界の女王となれり、詩人バージル、希臘人の技藝文化に對し、羅馬人の天職を謳うて曰く、

* That others fairer forge the breathing bronze,

I grant; and give quick features to the stone;

Pleas'd causes better; map the vagrant sky,

And name the constellations as they rise;

Do thou, Roman, to rule the races mind;

These be thine arts; the law of peace to found,

To spare the vanquish'd and to crush the proud.

紀元四百年に至りて時の文明世界は全く羅馬化(Romanize)せられたり、東はユーフラート河より西は大西洋に至るまで、北はチビオート(Cheviot)山より南はリビヤ(Lybia)沙漠まで、金鷲記號の威令は行き渡りて、世界王國は再び地上に設立せられたり、然れども羅馬帝國は亞細亞的團合にあらざりしなり、羅馬は共和國として起り、共和國の如く世界を支配せり、各國民の特性は羅馬に依て湮滅せられざりし、否な反て然らずして益々伸張するを得たり、羅馬は希臘をして世界を智化せしめ、猶太に之を靈化するの便益を供せり、羅馬の天職は實に舊世界を綜合して

新世界の發端を開くにありし、希臘人の文明と猶太人の宗教を歐洲大陸に紹介傳播するにありき、視よ伊太利國は南端に西方亞細亞と希臘とを受けて北境は佛、獨、塊の三國を以て包まるゝを、伊太利國は能く其天職を盡せり、文明は彼女に依りてライン河邊に橋渡しはしわたせられたり。

羅馬は北邊野蠻人の爲に亡されたり、而して文明は亦西漸北漸してアルプス山の西北面に轉ぜり、カール大王 (Charlemagne) に至つて世界の中央權は獨逸民族の手に落ちたり、カールの大望は世界帝國を歐土に建設せんとするにありき、然れども歐洲の地理と彼の子孫の歐洲的分離觀念は彼の期望を畫餅に歸せしめたり、有名なるベルダン條約 (Treaty of Verdun) に依りて彼の天下は三分せられたり、而して地理學的觀念に則りし此分配は今尙ほ變更すべからざる分配なりき、其ノイストリヤ (Nenstria) は佛蘭西國として發達すべく、其ローレン (Lorraine) は獨逸國たるべく、其アウストラシヤ (Austrasia) は塊地利國キイストリアたるべきなり、後に至りてポルボン家となりホーヘンゾーレルン家となりハツパスブルグ家となりて鹿を歐洲の

中原に争ふに至らしめしものは、實に天の示明せしベルダン條約の餘波たるのみ。

爾來一千年間の歐洲の歴史は地理學的境界の中に各國民を安堵せしむる爲の順序手段と云はざるべからず、歐洲の争亂とは野望家が此既定の天界を越えて其領土を擴張せんとするより起りしものなり、英吉利王その孤島に安んずるを得ずして領土を大陸に得んとするに當つて有名なる「百年戦争」起り、努力奮戰の後終に寸地をイギリス海峡以南に有するを得ざるに至りて始めて止みぬ、西班牙王其西陲の地を以て足れりとなさず、文明西漸の大流に逆ひ、人爲に成れる相續論の條項を頼み、威を伊太利半島並にライン河口の邊に振はんとせしや、ライデン城を濫せんとして敗れ、テロール山中に逐はれ、三十年間の彼の夢想は沙漠の「ミラージ」として消え、終に彼の故國に退隱し、エストラマジユラの寺院の中に經文を誦しつゝ失せり、天境を犯して私慾を充さんとするものは宜しく西班牙の大王カール五世の運命を鑑みるべきなり。

佛國亦此褻瀆野望の士を生ずる多し、渠の預言者サボナローラに叱咤されてフロ

ーレンス市より驅逐せられ法王の威名を頼んでネーブルス王國を得しと雖も得しと同時に之を失ひ空手にて再びアルプス山を横ぎりて歸國せしカール第八世、西班牙王カール五世と覇を歐洲に争ひ彼も亦伊國に垂涎し三度之を襲ひて三度敗れ寸地をアルプス南面に得ずして終りしフランシス第一世、此世の榮華を以て良心の譴責を掩はんと欲し至少の託言より無名の軍を起し二十五萬の生靈を犠牲に供して佛蘭西の國境をライン河以東に定め微弱なる名義に託して西班牙國の王位を彼の孫兒の爲に獲て以て「ピレニース山最早存せず」と絶呼し無理に大王の虚飾を維持し借財と争鬪と革命の流血とを彼の子孫と國民とに譲りし虚人ルイー第十四世、我獨り定めて我獨り斷行すと暫時の幸運に身を委ね歐洲を我物の如く思ひ歷山王の亞細亞王國を歐土に回復せんと試み大陸を得て之を失ひ終にセントヘレナの孤島に於て敵人權護の内に命を終りし野望の奴隸ナポレオン・ボナパルト、——是等は皆地理を知つて之を解せざりし人なり、天は佛國の境界を定めたり、ピレニース山は未だ存するなり、ライン河は未だ流れて止まざるなり、何者ぞ此天界を犯して他を蹂躪せんとするは、彼等は天罰を蒙らずして終らざりしなり。

瑞典王カール十二世はボルチック海以外に武を試みて漂流慙愧の内に命を終れり、丁抹、和蘭を保持せんとせし塙國の政略は悉く失敗なりし、歐羅巴の平和は國民各々その天の定めし區域内に満足するに至りて始めて期すべきなり、アルサス、ローレンの佛、獨間の競争地たる、バルカン半島の未解問題として存するは、皆人意が未だ天意に合せざればなり、伊國統一は歐洲歴史に於ける千三百年來の難題を決せり、土耳其人の逐攘、バルカン半島の團結、ライン沿岸小邦の去就は歐洲の平和を完結せんが爲に必要なり。

余輩は云ふ、歐洲の地勢は戰亂を促すものなりと、佛、英、獨、塙の如き其面積人口稍や相比敵する邦國が互に相隣して權力の軋轢を來たさざるが如きは全く望むべからざるなり、戰爭其物は害なり退歩なり、然れども解すべからざる攝理は戰爭を以て人類進歩の必要として命じたり、逆説の如く見えて眞理中の眞理は人は戰つて後始めて他と和するの道を知ること是なり、戰爭の目的は平和にあり、戰亂を促せし歐洲は世界萬世の平和の基を開きたり。

國と國との戦争は延いて黨と黨とに及び、渠のゲルフ派ギベリン派の争鬪の如きは數百年間の長きに亙り、嫉妬憎惡の念は代を逐うて絶えず、宗派戦争の激烈なる、異端征伐の殘酷なる、余輩平和的の東洋人の眼より以てすれば歐洲人の事跡は魔鬼の事跡と見るより外なし。

然れども人と人との分離は反て人と神との和合を促せり、生靈は孤獨に存在し得べきものにあらず、和を外に求めて得ずして是を内に求むるに至る、社交上の損失は心靈上の利得となれり、歐洲歴史中暗黒時代と稱するものは是れ實に國民の冬期なりし、寒風凜烈外部の發達を遮り、樹々枯木の狀を呈して併立するの際、知らずや根柢は地下に蔓り、終に宇宙の中心に達し、永遠乾燥することなき源泉に達するを、時未だ春ならざるに花葉霜雪を犯して發し、馥郁爛漫として天の美と香とを地上に放つに至れり、而て國民としては合同すべからざるものも、黨派としては年來の讐敵たるに關せず、宗派としては全く趣を異にせりと雖も、眞理の淵源人生の奧義に至つては同一なるが故に、心靈の奧殿に於て眞理の神に接せしものは神の國民として連聯結合するに至れり、亞細亞的の團體は外部の粘結なりし、歐羅巴的の團

體は内部よりする生理的同化なり、人類が歐洲に於て學び得し貴重なる眞理は差違の中の一致なりき。

爰に於てか眞正の自由の觀念は歐洲人の腦裏に浮び來れり、自由は獨立の賜物なり、而して分離は獨立を促すものなり、自由とは個人眞價値の知覺なり、人は君主たる者の所有品にあらず、又國家の一分子たるに過ぎざるものにあらず、彼は萬物の長にして神を父とし持つものなり、彼は彼自身にて完全なるものなり、彼を政略の機關に供するもの、彼を利慾の爲に消費するものは、彼の神聖なる權利を侵害するものにして斯の如きは神と人と萬有とに對し褻瀆罪を犯すものなり、我等をして人の如くあらしめよ、我等をして人たるを妨ぐる勿れ、我等は生命を棄つるとも人たるの權利は放棄せざるべし、我等の組織する社會も國家も此の神聖なる權利を保護發達せしむる者ならざるべからずと、新理想は之を演ずるに常に新劇場を要す、ペリクリス、デモステニスの國民主義は希臘半島に於て行はれずして歐大陸に於て實行せられたり、希臘國は其理想の割合に國の狭小なるが爲に亡びたり、歐洲も其最大理想を實行するの國土なくんば新理想歐洲を破壊するか、或は歐洲新理想を

壓抑死に至らしめしならむ。

自由思想は十三世紀の初めより^ま兆し始めぬ、ペトラルカ、ボツカチオ已に此英氣を呼吸せり、ダンテは深く此泉に汲み、彼の詩歌は已に新世紀を預言せり、アルビゼンシス、ワルデンシスの自由の徒は刃を以て壓せられたり、ボヘミヤ人ハッスは燒殺せられ、ウキクリフ英國に自由思想を唱へて彼の遺骨は暴露されたり、然れども十六世紀に入つてより、春草の暖雨に會して萌芽するが如く、自由思想は歐洲各所に發起し始めぬ、二百年間の自由の爲の戦争は個人、君主の兩主義が調和の下に歐洲に存在し得べからざるを示せり、自由主義を涵養せし歐洲各國は今自由の迫害者となれり、歐洲は自由の産出所にして其實行所にはあらざるなり。

ウキクリフ燒殺せられて後七十七年、ルーテル生れて後九年、サボナローラ刑せらるゝの前六年、歐洲の西陲に國を定むる西班牙は伊太利人コロムブスの手に依りて新世界を暗黒の中に得たり、西班牙國自由黨總理エミリオ・カステラー氏コロム

ブス時代を評して曰く、

良心は革新を要せり、基督教は改良を要せり、人類の信仰はその理想に達せんとせり、而して傳來の思想と信仰の條目とを棄却せずして此天職を充さんが爲に、名を不朽に傳へたるサボナローラの強健なる智識と、ルーテルの革命的教理は世に出でたり、而して自然も亦革新を要せり、コロムブス爲に世に現れたり、發見者に關する記録を探り見よ、大航海家の世に出づるは天の指定せし時にありて、吾人の地球と理性とが同時に之を要求する時にありき。

イベリヤ半島の位置たる歐大陸の極西にありて、半島大陸の尖頭なり、其地勢は東より西に互り、歐洲を脊にして大西洋新大陸に向つて面す、其五大河なるミンホー (Minho)、ドゥロー (Douro)、テーガス (Tagus)、グアヂェーナ (Guadiana)、グアダルクィビヤ (Guadalquivir) は悉く西流して大西洋に注げり、オポールト (Oporto)、リスボン (Lisbon)、カヂス (Cadiz) の如き良港は西岸大西洋に面する所にあり、地理學は西班牙、葡萄牙兩國より大西洋の探險と新大陸の發見とを要求せり、而して歴史は地理の此要求に應じたり。

時の葡萄牙は歐洲航海術並びに探險業の中心點なりき、カステラー氏復た曰く、

リスボンの感化力に依らざりしならばコロムブスは航海家第一流の位置を占むるに至らざりしならむ、遠洋航海はリスボンを以て始まり、其航路の廣遠にして規模の絶大なりしは地中海航海が舊時の河水運漕に優りしよりも優れり、ジノア人コロムブスはリスボンに至れり、リスボンは科學の中心點にして識者の視線はテীগス河口に蒐^{あつ}れり、……熟思焦慮の後彼をして此地に至らしめしは實に彼の事業に彼を導きし内心の聖訓に依りしなり、舊來の歴史家が稱する如く、コ氏の葡國に來りしは颶に遭うて其海岸に破船せし故なりとするも是れ偶然にはあらずりしなり。

コロムブスは技量と智識とを葡萄牙に得たり、然れども彼を送りし名譽は西班牙國に歸せり、コ氏が西班牙國に至りし時は該國全盛の時なりき、異教信徒は國外に逐攘せられ、グラナダ城落ちてリオン、カステイラ兩王國の合併となり、西班牙人の特性たる義俠心の發達其極度に達せり、國民が其天職を盡すの時は其精神の新たに發揚せし時にあり、八百年間の回々教徒よりの軛^{くみ}を脱せし時、是れ西班牙國が世

界に大事業を供する時なりき、カステラー氏曰く、「時満ちてコロム布斯我國に來れり」と、歐洲人の最大理想を實行するが爲の新大陸は西班牙人が葡萄牙人の教訓に成れる伊太利人を遣して發見せしものなり。

歐羅巴大陸は東に閉して西に開けり、故に東するは逆流にして西するは正流なり、東は回顧なり退歩なり、西は希望なり進歩なり、東向して歐洲は滯滞せり、西向して始めて開發の途に就けり、コロム布斯は歐洲を正向せしめしものなり。

西大陸發見せられて歐洲は西面せり、商業の中心は地中海を去つて大西洋に轉ぜり、伊太利は古來の中央權を失へり、ベニス、ジノアは衰運に向へり、西班牙、葡萄牙は水先案内となりて東西大陸の連絡を開けり、而して新開期の女王となり東西兩大陸交通の衝路に當り東の粹を輸出して西を開き西の美果を輸入して東の弱と衰とを補ひ以て四百年間世界の大勢を左右せし一強國は、大西洋の波上に出でたり、之れ即ち清教徒の故國なる英國なり。

When Britain first, at Heaven's command,

Arose from out the azure main,

This was the charter of the land,

And guardian angels sing the strain:

Rule Britannia! Britannia rules the waves,

Britons never will be slaves.

天の命ありて英國始めて

青海原より起ちし時、

その特權なればとて、

護まもの神は讃へて曰く、

不列顛國ブリテンよ波に覇たれ、

不列顛人ブリテンは奴隸ならじ。

不列顛國ブリテンの天職は誤認し得べきにあらず、其東南に歐大陸を受け、ライン河口、

105
バルチック沿岸より西せんとするものは必ず英國に渡江錢を拂はざるを得ず、其北

西南の三方は直に大西洋の激浪を受け、メキシコ灣流、西南歸北貿易風の衝路に當り、環海の良港灣屈指するに遑あらず、川は小なりと雖も大船の湖上を許し、灣形弓をなして靜湖を激浪の中に懷き、全海岸を擧げて埠頭の一連鎖たるの狀を呈せしむ、海岸の屈曲刻入は西面を以て殊に甚しとす、其クライド (Clyde)、マーシー (Mersey) 二河の如き、其水量は各、我の隅田川に過ぎずと雖も、前者は河口より三十哩の上流に潛^{ひそ}んでグラスゴウの大造船場を有し、大艦巨艦を驍^{よそ}ふの所なり、後者は河口にリバプール市を擁し、兩大陸の貨物の輻湊する所、米に對する歐の門なり、プリストル (Bristol) なり、ポーツムス (Portsmouth) なり、サウサムプトン (Southampton) なり、ポストン (Boston) なり、之をして他國にあらしめば一港以て全國の輸出入を掌り得べし、余輩萬國の港灣を驗するに其數と良否とは國の生産力に比例するが如し、もし紐育港をして日本にあらしめんか、之れ無用の長物ならざるを得ず、横濱神戸は大陸の物産を輸送するの處にあらず、大國に大港あり、小國に小港あり、港灣の分布決して偶然ならず。

然るに英國に國不相應の港灣あり、是れ英國は英國の爲に造られざりしの證にあ

らずして何ぞや。

良港灣のみは英國をして最大海國たらしむるの理由にあらざるなり、ヨーク州の炭坑、デルビー、ランカシャヤ諸州の鐵山は永く十九世紀の到來を待受けしにあらざや、五萬方哩の小國能く五大洋を巡航するの艦材と炭料を有す、英の波上に覇たるの理由は實に一にして足らざるなり、之を商估に譬へんか、英國は海上の運送屋なり、其陸半球の中心に位し（第一圖を見よ）、世界萬邦に達するに最大便利の位置を占むるを見て、以て倫敦、リバプールが世界貨物の輻湊所たるの理由を知るを得べし、歐洲は英國に依りて世界と連續す、英人の天職は實に歐羅巴思想の擴張分布にあり。

米大陸を發見せしものは西班牙なりき、然れども米國を造りしものは重に英國なり、英國は歐洲の西隅に孤立し、歐の粹を吸取して其害を受けず、宗教改革も政治革命も至少の擾亂を以て決行せられたり、大陸諸國に先んずる二百年已に健全なる憲法政治あり、フェルディナンド二世ありて「三十年戰爭」の悲劇を自由教徒の上に試みるなく、リシエリヤ、マザリンの奸徒ありて彼等を壓迫するなく、歐洲文明の

良果は能く英土に成熟するを得たり、新世界に播植するに舊世界の最良種を以てすべきなり、歐が米に渡るに英を通過するは地理學上の順路なり、而して歐が米に渡りしに英を通過せしは歴史上の事實なりき、歴史は地理を離れて獨歩せざるなり。

期滿とよみちて歐土が其自由教徒の爲に狹隘を告ぐるや、一百有餘の英人は信仰と政治の自由を求めんが爲に輕舸に乗じて大西洋の激浪を冒し、一千六百二十年の冬北米プリマス灣頭に達せり、「メーフラワー」號の船室内已に新開國の未來百年に互るべき長計の議せらるゝあり、米國憲法の骨子は實に此船中に成れり、英の粹は實に此一小船内にありき、新大陸の植民は「メーフラワー」渡海前にありき、然れども其發達は此著名なる航海より始まり、歐洲の粹今は新土に移植せられたり、一千六百萬方哩の沃野は自由主義實施の良田として人類に供せられたり、希望は常に西に存す、米洲はより歴史的活動の中心となれり。

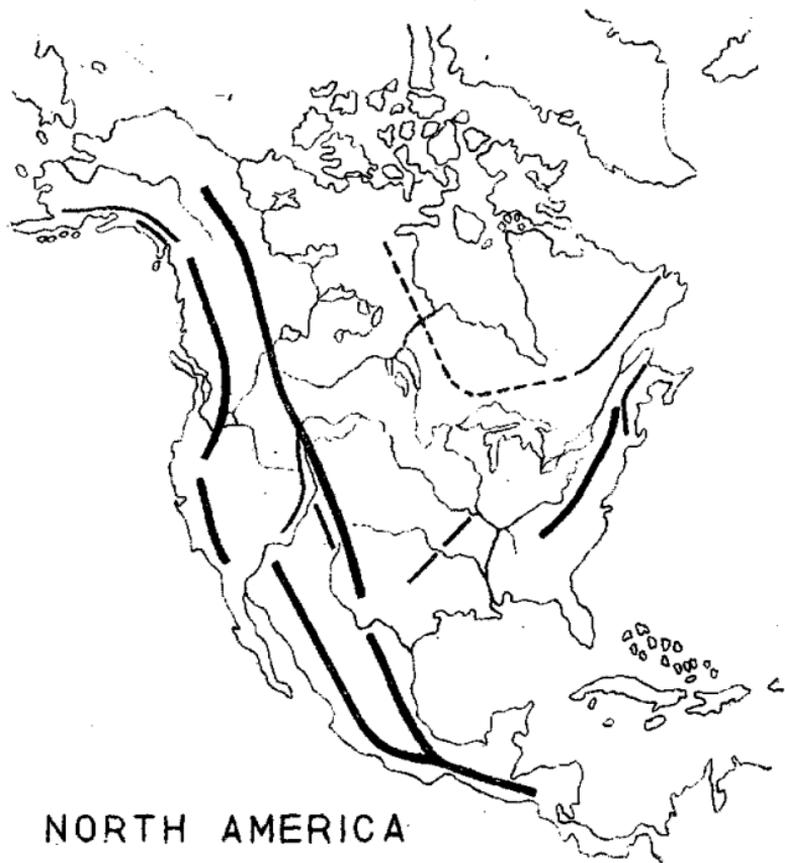
第七章 亞米利加論

亞細亞は起原的大陸にして人類は此處に於て其幼年期を經過せり、歐羅巴は鍛練的大陸にして思想の發育は此處にありき、人類今は思想實行の大土を要せり、而して攝理は之を亞米利加に藏し、人類が之を要するに當りて之を彼に供せり。

米兩大陸は南北兩氷洋間に延長する一大陸塊なり、其幅員亞細亞より小なること百萬方哩、歐羅巴の四倍強、阿弗利加の一倍半なり、亞細亞は高山高原に富み、歐羅巴は山野相半し、亞米利加は特に平原大陸なり、歐羅巴、亞細亞の山系は重に東西するも、亞米利加の山系に南北せざるは稀なり、「平原大陸」、「南北大陸」、之れ米大陸の別名として存して可ならむ。

米大陸の骨子はロッキー、アンデス山脈なり、一連の隆起、北米の極北パロー岬に起り、南米の極南ホルン岬に終る、之を米大陸の脊柱となす、其大陸の西岸に沿ふを以て亞米利加は太平洋に背して大西洋に面すと稱するを得べし、大平原其東

圖 四 第



NORTH AMERICA

にあり、西面は急斜にして直に海に至る、此南北性の山脈より米大陸の歴史的經過を豫察する時は思ひ半ばに過ぐるならむ。

一大山脈に添ふに一大平原あり、北は北水洋マッケンジー河口に始まり、英領亞米利加(カナダ)、北米合衆國を通過し、墨其哥灣メキシコに杜絶し、再び南米の北端オリノコ河口に始まり、ラノス平原となり、アマゾン大平原に連續し、尙ほ南に延びてラプラタ水域「バムパス」原野となり、亞爾然丁共和國アルゼンチンの南境に至つて止む、もし輕舸に乗じてマッケンジー河口より南向せんとせんか、溯上二千九百哩にして其水源に達すべく、それより陸上纔かに數哩にして直にハドソン灣の水域に達し、サスカチワンの支流を下り、ウイニペグ湖を南北に横斷し、再び紅河レッドの大流を溯れば、ミゾーリー河の支流ダコタ河の水源と相接するの處に至るべし、余輩の輕舸を陸上に曳く數哩にして一度び之を南流に任せば、直流南下四千哩、一の妨害物なくしてミッシピ河口に至るべし、海に航する二千餘哩、オリノコ河の河口に臨み、尙ほ南向して其水源を究めんとすれば、終に一支流の南流するに會するあり、是れ有名なる

カシキヤレー (Casiquiare) にしてオリノコ、アマゾンの兩水域を連続するものなり、舟は再び南下し始めむ、ネグロ河は終に其幹流アマゾンに注ぐ、我等は東流せずして南よりするマデイラの大流を取り、南上する事一千哩、北流の將さに盡きんとするの邊に於て、暫く濕潤期の至るを待てば、降雨地に溢れて我等をして舟を南行せしむるを得べし、忽にして我等の南流に會するあり、即ちパラゲー河の上流にして、降つてパラナ河となり、終にラプラタの廣流となり、ブエノスアイレスに於て南大西洋に入る、マッケンジー河口よりラプラタ河口に至るまで一萬五千哩間、舟を陸上に曳きしこと僅かに二回、而も其距離數十哩に過ぎず、米大陸は實に一大水域より成ると稱ふも過言にあらざるなり。

大平原の東方、大西洋岸との間に又南北脈の蟠るあり、北米にあるをアパラキアン山系と稱し、ミシシピ水域の東境なり、南米にあるをブラジル山系となす、之に加ふるにアカライ (Acañai) の山塊を以てすれば米大陸の山脈は盡きしなり、米の地理は單純なり、一目以て之を記憶に畫するに足る。

米大陸の隆起は其西方に偏し、脊脈東方の斜面甚だ緩慢にして西斜面は甚だ急激なり、地勢東に向つて開き西に向つて閉づ、是れ吾人の注意を惹くべき第一點なり。

大陸全體の位置よりするも米は歐に媚びて亞を避くるが如し、北緯六十五度ベールング海峡に於て四十八哩の近きに接する米、亞大陸は、南向するに隨つて距離益々廣きを加へ、北緯三十八度日本桑港間に於ては五千五百哩となり、赤道直下南米とボルネオ島との間に至つて一萬哩の廣大に及ぶ、然るに歐と弗とに向つては全く此傾向を異にし、歐の凹入する邊に向つては米は突出し、「北海」、ボルチック海の深く陸地に浸入するに對してラブラドル、ニウフヘランド新見國の凸出するあり、墨其哥灣メキシコカリビヤ海の大曲灣を米大陸東側より彫取するに對し、イペリヤ半島、阿弗利加北西部の西向して大西洋に突出するあり、セントロック岬まで突出する南米の東半は、大西洋の東岸阿弗利加カメロン山の麓まで蝕入するギニヤ灣に嵌入するが如し、大洋は南北兩氷洋を連續すると雖も、南米の南端ホールン岬と阿弗利加の南端喜望峰との間より、北の方西班牙と北米紐育との間に至るまで其平均幅は三千九百哩に

して超過削減殆ど稀なり、歐は米を求むるが如くにして、米は歐を迎ふるが如し、是れ吾人の注意を惹くべき第二點なり。

米大陸の海岸屈曲は重に大西洋岸にありて太平洋岸に少し、ハドソン灣の深く其東北隅に浸入するあり、セントローレンス灣は同名の大河を受け、二者共に海洋船をして陸内八百哩の處まで航するを得せしむ、コッド灣、デレウエヤ灣、チェサピーク海は、深く陸地に蝕入して最良港をなし、墨其哥灣メキシコの大弓形は北米南部をして全く海岸國たらしむ、カリビヤ海は大西太平洋を僅少距離の中に來らしめ、東流するアマゾンの大河は世界最大沃原を海岸に向つて開放するものなり。

海岸線の屈曲に富むは勿論良港灣の多きを意味す、モントリーオル (Montreal)、ハリフハックス (Halifax)、ボストン (Boston)、紐育 (New York)、ヒラデルヒヤ (Philadelphia)、ボルチモール (Baltimore)、ノルフォーク (Norfolk)、チャレンストン (Charleston)、サバンナー (Savannah)、ニューオーレンス (New Orleans)、ガルバストン (Galveston)、ベラクルーズ (Vera Cruz)、アスピナル (Aspinwall)。

・パラ (Para) ・バハヤ (Bahia) ・リオデジネロ (Rio de Janeiro) 等、大港良埠の
 多きことは實に枚擧するに遑あらず、港灣の良否と多寡とは國の生産力に正比例す
 とは余の已に述べし所なり、兩米大平原を扼する港灣は多くして巨ならざるを得ず。
 東岸に屈曲良港多きに對して西岸に其尠きに注意せよ、タコマ (Tacoma) ・セア
 トル (Seattle) ・バンクーバー (Vancouver) を控へたる普吉ット灣 (Puget Sound) ・
 金門内の桑港 (San Francisco) ・生産力に乏しき沿岸を有するカリホルニヤ灣、一
 の波止場たるに過ぎざるアカプルコ (Acapulco) 港、船舶碇繋に便ならざるパナマ
 (Panama) 港、リマ (Lima) ・バルパライソ (Valparaiso) の小灣弓——是等を東
 岸の大埠頭と對照すれば、彼の富、彼の雜、是の單、實に同日の談にあら
 ざるなり、米は東向して出入の門戸多く、西向して殆ど關せらるゝの狀あり、是れ
 吾人の注意を惹くべき第三點なり。

歐は東に閉ちて西に開け、米は之に正反して西に閉ちて東に開く、歐の河は多く
 は西に向つて流れ、米の河は歐に向つて注ぐ、歐 (殊に英) の港灣多くは西開し、
 米の港灣に東開するもの多し、歐の炭角を受くるに米の灣曲あり、米の崎岬に應ず

るに歐は曲入を以てす、アーノルド・ギョー氏彼の『地人論』に歐米兩大陸を以て代表せらるゝ新舊兩世界の地勢より歴史上の未來を論じて曰く、

兩世界は面と面とを合せて互に相階つゝあるの狀を呈す、彼等は互に相寄りんとするが如し、舊世界は新世界に向つて傾き、其河流は西向して大西洋に注ぎ、其民の西移を促しつゝあるが如し、米は舊世界に向つて面し、其陸地の斜面と廣闊なる平原は皆東向して歐に面す、米は熱心に兩手を開いて歐人の來つて之を惠まんことを待つが如し、一つの障害物の歐人の侵入を妨ぐるなし、アデス山、ロッキー山は大陸の西岸に驅逐せられて此侵入を遮るを得ず。

米大陸の地勢と構造とは余輩をして其歴史的活動の略ぼ左の如くならんことを預言せしむるを得べし。

一、米の開発は東よりし、其原動力は歐より來るべし、恰も歐の開発は東方希臘より始まり、原動力は西亜より來りしが如し。

二、國民的區分は米に於ては行はれざるべし、米は一大共同國たるより外は自

然的境界の許さざる所なるべし。

三、文明西進の順路より考ふれば米に於ける人類の發達は亞と歐とに於てせしものに超越せざるべからず。

一、コロムブスは歐の西陲西班牙より發して米大陸を發見せり、爾後米の探險は皆歐人の手に成れり、東洋人が米に渡りしとの説は依るに歴史の考證の存するあるなし、カナダは「金田」にして舊圖に今の英領アメリカに附するに Terra de Yezo (蝦夷地) の名稱を載するありとするも實際的歴史は斯の如き記事に頓着せざるなり、米は歐人に依りて發見せられ、歐人に依りて開かれたり、是れ彼等の天職なればなり。

米の開發は東に始まりて西に向つて進めり、千六百七年ビルジニヤ州ジェームス河口に最初の英人植民地の建設せられてより、三十年を出でずして北は今のメイン州より南はジョルジャ州サバンナ河口に至るまで英吉利、和蘭、瑞典等歐洲新教國民の區劃割居する所となれり、大西洋岸に居を定めし新國民は西向して歩一步を進

めり、アパラキヤン山系を横断しオハヨ河流に従つて下り、ミシシピを渡り、ミゾーリ、プラット、カンサスの諸流を溯り、漸次にロッキーマン脈を越え、終に一千八百四十七年に至りて始めて桑港を開くに至れり、舊世界の進歩は山より平原に、高きより低きに、中より外に向へり、新世界は全く之に反し、海より山に、外より内に向へり。

二、米の水脈山脈は兩つながら甚だ單純なり、特に其南北するの方向は全大陸をブーエー氏第二則（第二章を見よ）の下に置き、即ち國民的分離は米の許さざる所なり、北亞米利加を以て論ぜんに、北米九百萬方哩の大陸塊は現然たる一國の體をなせり、之を南北に區分するの自然的境界あるなし、之を東西に區劃し得ると雖も各區は他區の聯合共和を以てのみ存在發達し得るものなり、吾人の攻究に便ならんが爲に北米の中樞部たる合衆國を以て論ぜんに、此國は左の四部に分界し得るを見る。

第一 大西洋岸諸州

第二 ミシシピ河水域諸州

第三 ロッキー山高原諸州

第四 太平洋諸州

合衆國の全面積は三百萬方哩にして、歐大陸の四分の三、西方亞細亞全體と彷彿たり、日本帝國の二十倍、不列顛、ブリテン、愛蘭土の二十五倍、獨逸帝國の十五倍、佛蘭西共和國の十六倍なり、然るに此大國之を地理學上僅かに四分するを得て、政治上社交上は唯一團體として存し得るのみ、そは四部相依りてのみ互に相存在發達し得ればなり、即ち左の如し。

大西洋岸諸州は製造業、商業の地たり、アパチカン山系の鐵材良炭に富むと、其河流の傾斜急激にして機械運轉の用に供すべきと、其良港好灣を以て備足すると、又比較的其土地の瘦薄にして耕耘に適せざるとは、東部諸州が製造商業地として成立すべき自然の徴候にして、其原料は他より仰がざるを得ざるの位置に居る、東部は西部に依りてのみ富貴と繁盛とを致すを得べし。

ミシシピ平原は共和國の田園なり、際限なき水平面の如き麥田、億を以て算する豚群、南方の糖作、北方の穀産、歐の餓を癒し、亞の空を補ひ、尙ほ其鶏犬をして

餘食あらしむるの膏地なり、然れども農は商と工とを待つてのみ成立し得るものなり。

ロッキー山高原は鑛業地なり、鑛業勿論農と商とに依らざるを得ず。

太平洋諸州は稍や一國の體をなせり、然れども西隣の三大部に對して獨立拮抗するの位置に立たざるのみならず、其進歩と發達とは共和國の一部としてのみ期すべきなり、太平洋諸州の未來は未だ朦朧の内に存するが如し、其充分なる發達は東洋諸州の發達と緻密たる關係を有するならむ。

故に米國の分裂は自然の許さざる所なり、曾て三十年前の内亂の際、南北の勝敗未だ決せざる時、英、佛の名士は多くは共和國の分裂を豫期せるときに、新英洲の雄辯家チャーレス・サムナー叫んで曰く、

アレガニー山脈（アバロキヤン山系の一派）が其南北するの方向を轉じて東西するに至らずんば、余は我國の分裂を信ぜざるなり

と、而して有名なる Mason and Dixon 線は政治地理の一想像線たるに止まり、四年間の奮戦は共同一致を破らずして罷みぬ、合衆國四十六州は同一の運命と利益

とを有す、ミシシピの大流之を南北に貫通する間は彼國永久の分裂は期すべからざるなり。

共同一致は合衆國のみに止まらざるなり、英領亞米利加が其歐洲領主の手を離れて大共和國に加入することは唯、時日上の問題なり、「加奈陀合併論」は已に十數年間兩國人の頭腦に存せり、「五大湖」とセントローレンス河は同一の人種にして同一の國語を使用する兩國民を永く離隔するに足るべき妨害物にあらず、スーペリオー湖以西太平洋に至るまでは僅かに北緯四十九度なる天文學上の分界線の區劃するのみ、ミシシピ水域とウキニベグ湖水域間の分水嶺は海面より僅々一千六百尺の高さにあり、地理學は兩國の合同一致を示せり、其之をして未だ然らざらしむるものは國民的傲慢に屬する至少の感情のみ、墨其哥^{メキシコ}及び中央亞米利加は西班牙人種の植民する所となりしより北方サクソン民族と合同して北米大共和國を建設するに至るは未だ遠き未來にあるが如し、然れども是等西班牙的諸邦が他と組みせずして能く立憲自治の制度を實行し得るや否は目下の問題なり、墨其哥は合衆國民の智と富

とを借らずして發達し得るや、是れ具眼者の心中に存する疑問なり、今や米人の布設に係りし中央墨其哥鐵道はコロラド州デンバー (Denver) 府より南の方サンタフェー (Santa Fe) を通過して墨の中央府メキシコに達せり、兩米貫通鐵道の策は已に數年前より講ぜられつゝあり、ニカラガ、ホンジュラスに於ける殖産工業は多くは合衆國人の手に成れり、キューバ島を合衆國に賣却せんとの説は西班牙朝廷内に行はれつゝあり、誰か知らん天が定めし北米の合同一致は余輩の希望に先んじて實行を見るに至らんことを。

南米の未來如何に付いては余は別に論述せんと欲すれば今茲に曰はず、然れども北米大陸が一國となりて地球表面に現れんとするの徴は地理と歴史との示す所にして余輩之を疑はんとするも能はざるなり。

歐は米に面して之に流出せんとし、米は歐に向つて之を受けんとす、然るに米大陸一千六百萬方哩は今を去る四百年の昔、カルデヤ王國起りて六千年の後までは開明人種の知らざる所なりき。

コロムブスの米國發見は歴史上他の著明なる事實と伴ひ來れり、余は曾てコロムブス時代を論じて曰く、

十五世紀の希望は如何、金星已に東天に登り五更夜已に終らんとする時に拂曉を待つ番兵の希望なりき、發見に先んずる百七十年、ダンテ・アルジェリは中古の眞想を歌ひ終れり、半百年後れてペトラールヒ起り文學復興の師父と呼ばれる、十五世紀の初年メデイチ家の名聲漸くアルノ河邊に高く、ギオバニ、コズモ、ロレンゾ、父子孫續いて美術文學を庇保し、歐洲已に心理の重んずべきを知り、羅馬の教訓の必ずしも悉く眞理ならざるを悟れり、發見に先んずる四十年コンスタンチノールは土耳其人の手に落ち、東帝國は異教信徒の領地となりてより、印度並に東洋との貿易頓に衰へ、スエズ、アラビヤを通過せし貨物は他に途を求めざるべからざるに至れり、ベニス、ピサ、ジノアの如き其富強の原因の東洋貿易にありしものは是が爲に益々萎微し、其回復を計らんには唯二途ありしのみ、即ち土耳其人放逐にあり、新航路發見にあり、困窮は發見の母なり、東方途塞がりて西方二大洲を現出せり。

米國發見並に最始の探險は伊太利人、西班牙人、葡萄牙人等所謂拉典民族の手に依りて成れり、彼等は宗教に於ては羅馬加特利教の熱心なる歸依者なり、政治思想に於ては君主政治の忠實なる臣なり、彼等は義侠と名義とを重んじ、快活にして豪氣あり、彼等の行爲は小説的なり、彼等は進むを知つて守るを知らず、先鋒たり得るも殿者たるを得ず、深遠なる思想、確固たる主義は彼等より望むべからざるなり。故に米國の建設は拉典民族を以て^ハ荆^ハまらざりき、コロムブスの植民事業は悉く失敗なりし、コルテス、ピザロの墨^メ其^キ哥^ゴ、祕^{ベル}露^ルの征服は寶貨の掠奪に止つて永遠に互る建國策を講ずるに至らざりき、佛蘭西國民の米國植民事業も亦然り、セントローレンス河岸、「五大湖」、ミシシピの上流は彼等の發見に係り、拓植の事業は大に歩を進めしと雖も二百年を経ずして米大陸に於ける佛國の領地は悉く之を英國に讓與せざるを得ざるに至れり（千七百六十三年巴里條約）、米の建設は宗教に於てはプロテスタント教徒にして政治思想に於ては自由の主張者なる北歐チュートン民族の手を以て始めて成れり。

北米合衆國は米大陸の中華なり、彼女は新大陸を代表し、之を教導する者なり、彼女の干渉に依りてのみ歐洲諸大國は王政的政治を新大陸に施すを得ざるなり（有名なるモンロー主義）、彼女の憲法は墨其哥メキシコ以南西班牙スペインの共和國の模寫する所となり、彼女の召集に依りて米大陸諸邦の協議會を開くに至れり、過去、現在、未來に於て新大陸の牛耳を採る者の北米合衆國たるは全世界の許す所なり。

而して何者が北米合衆國を建設せしや、佛人にあらず、英人にあらず、獨人にあらずして、歐人中自由の大思想を抱懷し、此主義を以て相連結せしものなりき、歐の粹は其胚胎せし自由なり、而して自由は米に移植せられて蕃殖し、終に今日の美果を結べり。

英は米に供するに其清教徒を以てせり、「モントフォート」公サイモンがイーブスハムの戰場に斃れし以來、徐々として發育しつゝありし英國の自由主義が凝固して此に至りし者なり、歐の自由思想は英に於て最上の發育に達せり、而して新自由國の憲法は英の自由を以てすら尙ほ不滿なりし清教徒ピュリタンの草案より成れり、北米合衆國の憲法は歐の粹の粹なりと言はざるを得ず。

佛は米に供するに其ヒューゲノー黨の子孫を以てせり、天主教徒としての佛人の植民事業は敗れて新教徒たるヒューゲノー黨の植民は大成功なりし、彼等は東海岸諸州に散布し、彼等の少數なりし比例に合衆國の建設事業に盡せし彼等の功績は著大なる者なり、獨立の初期に當り大陸會議 (Continental Congress) の議長たりし七人の中三人はヒューゲノー黨なりき、佛國をして新共和國の獨立を承認せしめし者四人の中二人は又此黨の人なりき、其の他ファンネル (Faneuil) なり、ベヤード (James Bayard) なり、ガラチン (Albert Gallatin) なり、合衆國の初代史に於て鏘々さうくの聞えありし者の中に此黨の人の多かりしことは明瞭なる事實なり。

蘭は米に供するに亦その華を以てせり、曾て「オレンジ」公ウキルヘルムの下に西班牙の虐王に抗せし徒が今の紐育を創置せし者なり、ヘンドリック・ハドソンは始めて彼の名を有する河を溯り、其河口に新植民を置き之を新和蘭と稱せり、蘭は歐大陸に於ける自由制度の創作者なりき、而して新自由國を大西洋の彼岸に開設するに及んで蘭は直接間接に之に與かりしこと大なり。

瑞典國の自由教徒も又米の建設者中著名なる元素なり、グスタブス・アドルフハ

ス (Gustavus Adolphus) の下に獨の自由教徒を援け、アルプス以南の壓抑政略をしてチュートン民族を侮辱せしめざりし者、是れ今のデレウエア州に植民せし者にして其本國の勇と直とを齎らし來りて新自由國を強固ならしめしこと少しとせず。

其他獨乙人なり、蘇格蘭人なり、ボヘミヤ人なり、モラビヤ人なり、苟も自由を重んじ平等と獨立とを戀ひ慕ふものは皆故國を去つて墳墓の地を米大陸に求めたり、とくに於てか歐本國に於ける國民的仇敵の念は忘棄せられて自由てふ高尚なる感念を以て互に相繋がるゝに至り、差違の中に一致を來し、人類は再び結合共同するに至れり、余は曾て米國に於ける歴史上の經過を論じて曰く、

米國てふ名は自由てふ語と同意義なるに至れり、ペーコンの「アトランチス」、トマス・ムーアの「ユートピヤ」は米國に於て實成せられつゝあり、頑愚迷信が威力を擅にし、忠實熱心が天與の自由を壓せらるゝ時、陰鬱雲深くして地上身を容るゝに處なき時、義者の信仰と仁者の喜は常に西方新大陸にありき、奸賊ギース佛國の王室を擅掠し、溫順なるヒューゲノー黨が信仰自由と公民權とを失ひし時、義勇に富めるコリニエーをして唯一の濟民策として竊かに彼の親

威を派遣し新佛國を建立せんとせしめしは米國なり、ピューリタン祖先已に本國の壓制を厭ひ新英國の基礎をプリマス灣頭に定めしより、虐王位に登り奸臣朝に蔓^{はび}りし時、英國の良民をして常に望を囑せしめしものはハドソン、サスクエハナ河邊の廣野なりき、曾て猶太國の預言者が特種の天啓に依り預言せし地上の天國を造らんとするものは皆眼を米國の未開地に注げり、クエークル宗がウキリヤム・ペンの嚮導の下にデレワヤ、スクールキル河邊に新社會の組織を試み、劍を用ひず威を示さずして銅色人種を感化せし如き、天主教徒がボルチモール公の下にメリーランドに於て慈悲愛憐的の植民地を開きし如き、歐洲人の理想にして最も美なるもの最も優なるものはコロムブスの發見せる大陸に於て稍や實行せられたり、壓制は米土の許さざる所、曾て十三州の同盟が英國の輓を脱せし以來舊世界の陳腐政治を以て新世界に施さんとせしは皆悉く失敗なりし、ナポレオン三世がメキシコに於て新帝國を開かんと欲して終に善良なるマキシミアン大公をして最始最終のメキシコ帝王として銃殺場の露と失せしめしより、近くはドム・ピードローの大量を以てすら帝位を南米の最大國に保

つを得せしめずして、今は「大湖」並にセントローレンス河岸よりホールン岬に至るまで十二有餘の共和國の相聯續するに至れり。

舊世界の理想は新世界に於て實行せられ始めぬ、而して一部は已に實行せられたり、米國は實に二千年間の文明論國の希望なりき、伊國の外交家にして考古學を以て有名なるガリアニ (Ferdinando Gallani) 曾て米國獨立戰爭中未だ勝敗の決せざりし前に預言して曰く、

余は單に地理學上の理由より米國の勝利の爲に賭する者なり、そは已往五千年間才能は常に地球運轉の方向に逆ひ東より西に向つて進みたればなり。

有名なる旅行家バーナビー (Barnaby) 亦た同時代に記して曰く、

當時一思想の人心を扼するあり、即ち世界の權力は西に向つて進みつゝあるが故に何人も熱心に米國が起ちて全世界を指揮せんとするの時を待ちつゝあるが如し。

進化論の發言者なるチャールス・ダーウキン氏は、彼の人種進化論中に、博士チン

カ (Zincke) 氏の語を引用して左の歴史的考察を下せり、

希臘國に於ける智能の發育、羅馬帝國の世界占領等、其他渾ての歴史上の事實はサクソン民族の西大陸移住と相關するものとして考ふるにあらざれば一の目的と價值とを其中に見る能はず。

ヒマラヤ山の西麓イラン高原の東端に始まりし文明は西漸するに従ひて發達し、西亞の理想は希臘に熟し、希臘の理想は歐洲に於て實行せられ、歐の粹と理想とは米に於て結果せり、人類は亞に合同を計りて失敗し、歐に分離して、再び米に於て合せり、地理學の摘指する所、心理學の預期する所、歴史の經過せし所、悉く相符合せざるはなし、自然其物は眞理なり、自然ナチュールに従ふものは天道に歩むものなり、地理學の教導實に天よりの聲ならずや。

第八章 東洋論

境界は山と海とに因るとは余輩の已に論ぜし所なり、山高くして峻ならむか、隣邦之に依つて益々疎遠なり、海廣くして波荒からんか、對岸之に依つて別世界の觀あり、高山大海、人種を區劃す、而して全世界を兩分し、東西兩洋の大區分を來たせし者は實に世界の最高山と最大海となり。

世界の最高原は中央亞細亞に在り、喜馬拉亞^{ヒマラヤ}の東西脈將に盡きんとする邊、亞爾^{アル}泰^{タイ}、天山等の南北脈來りて正直角に之に接し、東西脈を此處に横斷し、尙ほ南に延びてスリマン^(Suliman)となり、印度河吐口^{インダス}に至りて海に入る、兩大山脈の相交又する處は即ちパミル^(Pamir)高原にして古より「世界の屋根」と稱し東西兩洋に分かるゝ處、二大人種が境を接する處なり。

余は東洋の名を附するにパミル高原以東の地を以てせり、亞細亞大陸全體を以て東洋國と稱し、スリヤ、パレスチン、波斯等を之に抱括するは單に方角上の理由に

依る者にして地理と歴史との承認せざる所なり、余は已に西洋文明がパミル高原の西麓に翹^たまり、地勢に伴はれて西方亞細亞、歐洲を通過し北亞米利加に到りし順路を述べたり、パミル以西太平洋の東岸に至るまでは「屋根」の一斜面と見て可なり、初代人民の移轉は流水の方向に因れり、シホン(Sihon)、ジホン(Jihon)の姉妹川が西向するは人類の半數を西大陸の西端に向つて指示せしにあらざるを得んや。

「世界の屋根」の西斜面、之を西洋といひ、その東斜面を東洋といふ、前者は太平洋の東岸に盡き、後者は同大洋の西岸に終る、山に依りて分れ、海に依りて合す、最高山初めに人類を離隔し、最廣海終に再び之を連續せり。

パミル高原を中心點として山脈に順ひて南北せよ、南する者はスリマン脈となりて印度洋に盡き、北する者は天山脈となり較^や東向して有名なるヅンガリヤ(Dzhungaria)通路に於て杜絶し、再び亞爾泰脈となりて東北に延び、セレンガ河に貫かれ、後ヤブロンイ脈(Yablonoi)となりて起り、尙ほ東北してスタノボイ脈となり、終に亞細亞大陸の東北隅「東岬」となり、ベーリング海峡に突出して終る、インダ

ス河口よりペーリング海峡に至るまで西南より東北に大陸を斜に兩斷する大山脈なり、余の稱する東洋諸國なるものは其の東南斜面にある邦土を云ふ、其面積六百五十萬方哩、人口七億三千萬を有す、即ち世界陸地の八分の一を占め、人口の二分の一を有す、バミル高原より東に向ひ、峨々たる巨嶺大岳を作り、克什米亞カシミアの仙郷を繞圍し、エベレスト峯となりて二萬九千尺の天涯に聳え、ガンジス平野を南麓に擁し、重嶺奇峯相密接し、纔かにプラマブートラの激流の通過を許し、尙ほも東向して揚子江をして其北麓を洗はしめ、南嶺となりて、支那南部、寧波の邊に於て海に盡く、此東西大脈は東洋を南北に兩分し、印度と支那との大區別あらしむ、南部印度は南面して印度洋の水城なり、北部支那は東面して太平洋水城を作る、南部は熱帶的にして北部は溫帶的なり、南部はアリヤン人種の占領する所たり、北部は蒙古人種の巢窟なり、支那、印度は東洋の二中心なり。

印 度

喜馬拉亞脈ヒマラヤの南斜面を總稱して印度と云ふ、之を東西二部に區分す、西なるを印

度^ド斯^ス坦^{ケン}と云ひ、是を本印度となす、東なるを印度支那と云ひ、其名稱の如く東洋の二大部を連結する處なり。

本印度は殆ど正三角形の半島なり、東西一千六百哩、南北一千九百哩、面積一百五十五萬方哩、日本の十倍、支那本部と相匹敵す、北緯四度に始まり三十六度に終る。

夏至線は印度を南北兩平等部に區分す、南なるはデカン半島にして三方山を以て圍まれし平均一千尺以上の高地なり、北なるは平原地にしてガンヂス、インダス兩河の水域をいふ、北境西藏國に接する處は峨々たる世界第一の高嶺、蜿蜒として東西一千五百哩に亘り、低地より直ちに平均一萬八千尺の高度に達す、大岳峻峯相聯り、エベレスト衆巒を率ゐて二萬九千尺の天外に聳ゆ、其南麓にテライ(Tarai)の叢林ありて熱帶的野獸の巢窟たり、登ること四千尺にして溫帶地方の植生あり、一萬二千尺にして寒帶に達し、一萬六千尺にして永久の雪あり、熱帶の繁と氷帶の漠は一望二萬尺の中に畫かるゝあり、雜駭なり、急劇なる反對なり、是れ印度地理の特徴なり。

高嶺と高地との間に跨る郊原、是れ印度の中華なり、東西一千六百哩、中間のア
 ラバリ (Aravalli) の阜丘ありてガンヂス、インダス間の分水嶺たり、東部ガンヂ
 スの水域は廣袤四十萬方哩、土地の肥沃なる、物産の多饒なる、實に世界無比とな
 す、世に稱する「印度の富」とは實に其地を指す、森に檀香あり榕樹あり、野に丁
 子、芥子、胡椒等、興奮性に富む藥味多く、米、麥、甘蔗、靑藍、棉花、鴉片、玉
 蜀黍等、有用の陸産繁殖せざるなし、叢林は獅子、虎を産し、濕潤の地に水牛、鱉
 魚あり、動植兩生の發育此地に於て其極に達す、デルハイ (Delhi)、ラクノー (Luck-
 now)、ベナーレス (Benares) 等、大市宏街此地に起り、世界の最舊文明は今尙ほ
 連綿として威力を存す。

ガンヂス郊原の西に盡る處、アラバリ阜丘の南に當り、荒漠たる曠野長さ四百哩
 に亙るあり、是を印度大沙漠と稱す、ベンガル地方の雨量世界無比なるに對し、此
 處にサハラ^{アラビヤ}亞拉比亞の乾燥なるあり、彼の潤、是の乾、彼の沃、是の瘠、豪富と
 赤貧相並んで存す、沙漠の海に盡る處をクッチの大澤となす、水にあらず、陸にあ
 らず、臭氣疫癘の生ずる處、亦印度地理の一異觀なりとす。

インダス原野は中央平原の西部なり、即ち古來ペンジャーブ (Punjab 五河の地) と稱し、其沃其大ガンヂス原野に迨^{およ}ばずと雖も、四方廣漠の間に介して田園の美を以て鳴れり。

此豊富の地、之を繞らすに僻陬荒漠の地を以てす、東隣の印度支那は徴々たる弱國なり、本土の教化に與るを得るも之に利害を及ぼすの國柄にあらず、北隣の西藏は喜馬拉亞^{ヒマラヤ}大墻壁の反對面にあり、未開の蠻^{ばん}貊^{ばく}、南面の文化強盛に比して何かあらん、印度の正隣は其西方にあり、伊蘭^{イラン}高原はスリマン脈を以て始まり、ボクハラ、サマルカンドの沃野は「五河の地」を去る遠からず、莊嚴を極めたる大帝國は屢々是等西亞の地に起りて覇を四方に施けり。

スリマンの境界、之を横斷するに二個の峽路あり、北なるをカイバル (Khaibar) と云ひ、南なるをボラン (Bolan) と云ふ、實に印度の二大關門にして大患の「五河」ガンヂスの平原に臨むや必ず此通路を取れり、關西の民多くは慄悍剛毅の徒、關東の華奢柔弱なるに比すれば實に豺狼の群羊に於けるが如し、印度は實に其西北蠻人

の掠奪地として存しぬ、今の印度人と稱するものも素は西亞高地の民にして、侵入者として南下し、土民をデカン半島の南隅に驅逐し、喜馬拉亞^{ヒマラヤ}の南麓に居を定めしものなり、而して掠奪の民は常に掠奪せられずして止まざりき、山地硬骨武烈の民が溫暖肥沃なる平地に降り、暫時にして其生來の硬と烈とを失ひ、華奢淫弱の風に沈むや、彼等は再び西北土蠻の侮る所となり、其侵入を招き掠奪を蒙るに至れり、斯の如くにして新陳代謝する事十數回、掠奪者の河流は西北隅より印度半島に注入して止まず、紀元前五百十二年波斯王ダリウス・ヒスタスピスが「五河の地」を侵略せし以來、カイバル峽路を通過せし侵入は實に十八回の多きに至れり、成吉思汗^{ジンギスカン}、チモール、バーベル、ナダヤシャの如き、蒙古、波斯、亞拉比亞、アフガニスタンの強族にして一撃を印度に試みざるものは殆ど稀なり、有名なるパニ帕特(Panipat)の三大戦争の如き、生靈二億萬の安危を決せし大戦争は實に枚擧するに暇あらず、掠奪なり、殺戮なり、破壊なり、大變革なり、是れ印度歴史なり、國民志想發育の如き、國家制度編成の如き、特種文化の養成の如きは、慘憺たる印度歴史の許さざる所なりき、勇烈なる土蠻と隣する國にして豊富有福印度の如くなるは實に慨歎す

べきの位置と云はざるを得ず。

此位置と此地を有せし印度人の特性は如何、獨立觀念の如きは壓搾消滅せられたり、生命財産の不安は恐懼の念となり、幸福なる社會の組織、強固なる政府の建設の如きは得べからざるものとして放棄せられたり、加ふるに溫暖の氣、沃饒の地は民の懶惰淫逸を促し、自然と戰ふの必要なきを以て之と和し、終に之が隸屬となれり、規模宏莊を極めたる其山川郊野林澤は頻りに民の想像力を喚起し、自身の羸弱を感ずると同時に自然力の勝つべからざるを悟り、心靈無限の冀望を達せんとするに之を事物に於てせずして思惟界に於てせんと勉めたり、印度人は肉に壓せられて靈に伸び、地に失ひて天に得たるが如し、ジョージ・ローリンソン氏印度文明を論じて曰く、

印度文明は重に靈智的にして物質的にあらず、政治、歴史、工業、貿易、商業、製造業等現在の生活に意を注がずして、印度人は注意の全力を形而上の問題に込め、自己に就て、未來に就て、神の性、人と神との關係に就て、沈思を

擬らせり……彼等は全く意を内部に留めて外部を問はざりき、心靈界の無邊無限を求めて物質界の不定變幻を問はざりき、故に印度文明の長所は抽象的にして推測し難し。

印度人のアリヤン性、勿論此種の文明を來せし一大原因ならざるを得ず、強健多望なるアリヤン人種何れか一方に發達せずして休やまんや、之を希臘半島の小邦相併立するの位置にあらしめば獨立思想となり、美術觀念となれり、之を伊太利半島なる世界の中央地に配布せば世界律を編み、萬國を統御するの術に長ぜり、之を寒氣凜烈なる北洋の一孤島に放てば有名なるアイスランド文學を供し、所謂「ノーズ」宗となりて北洋の民を訓誡せり、同一の強健種族なり、殊に抽象力は彼等の長ずる所、もし他に發達の途の妨害さるゝあれば此天與の長所を伸張するに至りしは決して怪しむに足らざるなり。

印度人の才能は全く形而上的の傾向を取れり、二億萬の民、世界に供するに一の制度、法律、實用科學のあるなし、其思惟の豐饒深遠なる、其畫イマジンエーション像の莊嚴なる、其論結の大膽なる、之を歐に求むるを得ず、之を米に索むるも當らず、印度宗教は

實に印度地理の靈化せしものなり、エベレストの巒々として莊嚴なるあり、ガンヂス原野の廣大肥沃なるあり、印度大沙漠の耿として威焰赫灼たるあれば、ベンガルの叢林深として幽玄寂寥たるあり、其理想や喜馬拉亞の雪千古の白きあり、其儀式や七光陸離極樂鳥の羽翼の如きあり、印度人は彼の美麗なる自然を思想界に移せり、彼は世界を導くに彼の富饒なる思惟を以てするならん。

支 那

東洋の東に盡くる處之を支那となす、南北千五百哩、東西千四百哩、殆ど四角形をなせる一大國なり、北緯十八度に始まり四十五度に終る、西境に雪嶺の高壁ありて蒙古西域の地を劃し、東の方太平洋を隔てて米新大陸と相對す、面積百五十四萬方哩、歐大陸より露の一國を除きしもの、佛の七倍、英の十三倍なり。

此大國之を南北に區劃するに二大山脈と三大河あり、即ち北嶺、南嶺なり、黃河、揚子江、香江（西江）なり、北嶺は海に至らずして盡き、淮水其東に發して河江の間

を流る、南嶺は喜馬拉亞^{ヒマラヤ}脈の東派にして蜿蜒として東に互り浙江省寧波に至りて海に終る、河水江水各、源を大陸中央の高地に發し、雪嶺の北と南とを繞り、屈曲東流して河口相遠からずして東海に注ぐ、香江（西江）は南嶺以南を排水し、雲南に起り兩廣（廣東、廣西）を貫通して海に入る。

故に支那を區分して、北、中、南の三帶となし得べし。

北帶とは北緯四十度より三十五度の邊までを稱す、重に黃河の沿岸にして支那文化淵源の地となす、氣候較^や寒に過ぎ、冬期は河水氷結して航運の便を絶つに至る、然れども北溫帶の植物は能く生熟し、小麥、大麥、燕麥等、開明人種の食料品は一として好適せざるはなし、其陝西甘肅の地を以て中央亞細亞に通路を開くが故に最始の移住拓植は此處より始まり、伸びて南方に及べり。

中帶とは南北兩嶺間の潤谷を云ふものにして揚子江水域の全體を云ふ、其面積七十五萬哩、渺茫たる廣原沃野、萬邦殆ど儔ひすべきなし、江水は實に小大洋と名くべく、其幹流と支流とは全沿岸に供するに航運上至大の便益を以てし、長江海に盡くる所より蜀山四川成都の邊まで、東西一千三百哩、自然的大運河として存す、其

漢口は河口より四百哩の内地に在りて尙ほ海洋的の埠頭なり。漢水の便、洞庭湖の利、天の樂園、四通八達の地、水利に豊かなる斯の如きは地球面上他に於て求むべからざるなり。

南帯とは南嶺以南を云ふ、香江（西江）水域に加ふるに浙江福建の二省を以てす、二十八度以南の地なるを以て其物産は自ら熱帶的なり、以て北帯の缺を補ふに足る。此等三帯は南北交通の便を缺ける三區域にあらず、黄河揚子江間の分水嶺は超越し難きの境界線にあらず、殊に其東端は海に至らずして盡き、淮水之より發して兩水の間流るゝあり、故を以て東方海に近くの邊に於ては二帯相合して一大平原となり、長城より以南北緯三十度に至るまで、東經百十三度以東海に至るの間は、面積二十萬方哩、人口一億八千萬を有する一大平原なり、世界最大の人爲的運河は之を南北に通過し、延長六百五十哩、船を直隸省（河北省）の白河に放てば海に頼らずして南の方浙江省杭州に至るを得べし、佛人マガイラン氏曾て記せるあり、「余は北京を發して陸行僅かに一日にして運河河流の便を以て澳門マカオに達するを得たり、此里程大凡一千五百哩なり」と、以て支那内地の水路交通は河流の方向のみにあらざる

を知るべし。

中帯、南帯間、南嶺脈の嶮は北嶺の比にあらず、其峯巒高度一萬二千尺に達するものあり、之を横斷するに峽路甚だ少し、故を以て南帯の風土人情は北中二帯に比して自ら其趣きを異にし、廣東人の名は北部人士の常に賤しむ所なり、もし之に住せしむるに異人種を以てせしならば南嶺の一脈或は二國の境界となりて存するならん、然れども其嶮は佛と伊とを區劃するアルプス山の嶮にあらず、加ふるに同一人種の其兩面に住するあり、又浙江福建の二省が海に濱して兩帯の間に跨るあり、南北の反對、其相接するや甚だ劇烈ならず、北京政府が覇を南嶺以南に施くは地理學上の理由なきにあらず。

因て知る支那は團圓なる一大國なるを、其廣袤は露西亞に均しく、其長幅稍や相同じく山野較や相半ばするの狀は恰も佛蘭西の如し、即ち露の大に加ふるに佛の地形構造を以てす、其熱帯に始まりて溫帶中和の位置を占むるが上に曠漠たる高地沙原の其間に存するなく、國內到る所耕耘に適し、一百五十萬方哩の一大田園なり、

支那は其れ自身にして一世界なり、人世の必要物は其内に存せざるはなく、之を全く封鎖するも四億萬の生靈は安然に棲息するを得、支那人は外に待つ必要なし、中華の地沃野千里、何ぞ膝を屈して交を蠻夷に求むるを須もちひんや。

中華の地大國と隣を接する甚だ遠し、其四境に之と匹敵するの邦土あるなし、北は蒙古の北狄なり、西は漠南の西戎なり、南蠻の暹羅安南、東海の倭賊、一として中華の大に對等すべき者なし、而して西南印度に達せんと欲せば、喜馬拉亞ヒマラヤ脈の峻嶮なる之を四川雲南の方角より經過すべき様なし、故に海運の便なき古代に於ては東洋二大國間の交通は常に路を大陸中央の高地に取れり、彼の唐僧玄奘が佛教を求めんと欲して印度に至りしや、西の方玉門關を出でて戈壁ゴビの沙漠を横斷し、天山と喜馬拉亞と相接する處なる葱嶺葱嶺（ポロ山）を過ぎてブンジャーブの西北隅より印度に入れり、又伊人マールコポロが元朝に至りしも同じく此通路を取れり、故に支那の隣邦と稱すべき印度、バクトリヤは共に數千里の遠きにあり、佛國が伊、西、英、獨と境を接するが如き狀は支那人の推量し能はざる所なりき。

此位置にあり此構造を有する支那に於て發達せし文明は如何、余輩は歴史に依らずして其何たるかを豫定するを得るなり。

孤立なり、統一團結なり、是れ支那の地理學上の位置と構造とを有する國に於ては避くべからざる結果と云はざるを得ず。

自國を稱して中國中華と云ひ、外邦を稱するに悉く蠻夷を以てす、吾人は支那人の無識と自大とを笑へり、然れども是れ彼等が強大なる隣人より隔絶せしが故にして彼等が自ら求めし弱點ならざるは地理學者が彼等の爲に辯ずる所なり、支那人に貴公子の自尊と餘裕あり、清朝會て隙を英國と開くや、彼等の無邪氣なる、天子西征して陸路より英國を襲はんと思へり、四方二千哩に互る大國の民、己に足るを知つて外に待つを知らず、中華の地、誰か之と雌雄を争ふものあらんやと、權力平均(Balance of Power)なり、外交政略なり、是れ六千年間支那人の腦裡に浮ばざりし問題なり、支那の歴史が比較的に平穩なる、其文明の單純なる、皆其地理學上の位置の孤立せるに依らざるはなし。

外に對する遠くして内に接する密なるあり、殆ど四角形をなせる一團國、平原の四方に連互するありて山脈の之を分斷すること少く、加ふるに大河の幹流支流が運輸交通の便を供するあり、團欒四通八達之地、是れ統一を促さざるを得んや、支那の平坦なる勿論露西亞の水平なるにあらざ、然れども之に山野の不同あるは反て健全なる一致を促し、物産の雜駁、風俗の差異は國民協同の媒介にして、露國に鑛物の缺乏するが如き、水力の使用し得べきなきが如きは、其強大なるも尙ほ自國に足りて外に仰ぐの必要なきを得ざらしむ。

故に統一は支那の自然なり、支那を分離せんと欲せしものは自然に逆ひしものなり、春秋割據の有様は支那に於ては永續すべきにあらず、故に秦一たび天下を統一してより分離は稀にして統一は常なり、歐洲に於ては國民分離して天下始めて治まり、支那に於ては諸侯割據して干戈絶ゆる間なし、漢楚天下を兩分せんとして能はず、三國天下を争ふ四十四年にして又統一に歸す、晋の天下南北朝となりて唐に合せられ、五代の紛亂五十餘年にして宋代となりて終る、支那を分割するの難は歐を

統一するの難きが如し、シャールレマンの理想、ナポレオンの希望は支那に施し得べくして歐洲に施す能はず、支那歴史の趨く所は歐洲歴史と正反對なり。

故に分離と競争とは歐より來り、一致と合同とは支那の産なり、自由と獨立とは前者に伴ひ、和合と從順とは後者より出づ、西洋の社會結晶は個人的盟約に成り、東洋の國家成立は家族的團結に成れり、シャールレマンの家長政略は直ちに敗れたり、周公の選賢上功主義は支那人には容れられざりき、米人の理想は王なきの國、監督なきの教會 (Country without a King, Church without a Bishop) なり、支那人の治國平天下は尊尊親親主義に依る、前者に歐羅巴地理の分割限りなきあり、後者に支那地理の團圓なるあり、歐亞兩主義の相異なる、「マダネ」の兩極の性の異なるが如し、故に歐の長は亞の短にして、歐の缺は亞の有なり。

分離は競争を生み、競争は獨立自由を生ず、物雜駁にして美術科學あり、科學ありて進歩あり、分離の健全なる結果は進歩なり。

然れども分離其物は虚無的なり、紛争分離より來り、確執紛争より來る、不尊な

り、不敬なり、懷疑なり、破壊なり、是れ分離の病理的結果なり。

團結は和合を生み、和合は從順尊親を生む、忠孝の道なり、淑徳の美なり、敬虔なり、團結の健全なる結果は建設保存なり、然れども團結其物に停滯の性あり、怠慢團結より來り、腐敗怠慢より生ず、物一樣にして抽象力なく、抽象力なくして理想あるなく、理想なくして美術科學あるなし、科學なくして進歩なし、團結の病理的結果は澁滯なり、回顧なり、因循なり、頑愚なり、退歩なり。

分離の利害は歐のものなり、團結の利害は亞に屬す、歐の缺乏は團結にあり、亞の弱は分離性の足らざるにあり、完全なる文明は歐が亞と婚を結んで後にあり。

支那文明の長と短とに就ては余輩此處に喋々するを要せず、其能く四億の生靈を統一する、其國民の黽勉にして穩和なる、其長を敬し上に仕ふるの切なる、共に萬國の仰いで龜鑑となすに足る、然れども其大理想に乏しきこと、其美術の卑陋なること、其外形の禮に流れ易くして眞善を認むるの力弱きこと、其進歩の遲鈍なること、是れ支那主義の特質として吾人の常に目撃する所なり、東洋の開發は之に西洋主義を注入して團結の害を排除するにあり、恰も西洋の革新は東洋主義を和して其

分離の害を去るにあるが如し。

支那印度兩文明の比較

東洋は支那、印度の兩中心より成る、二者面積殆ど相同じく、人口各十億を以て算す、之を離隔するに喜馬拉亞の大山系あり、之に住するに蒙古、「アリヤン」の兩異人種あり、其相距るや遠く、其相異なるや大なり、然れども是れ世界國民の好一對、東洋の大家族は此二者の合呑を以て成る。一は大嶺の西南麓にあり、氣候赫灼、植生繁茂を極め、之に住せしむるに抽象力に富める「アリヤン」人種を以てしたれば、熱帶的の早熟と共に形而上的の文明を呈せり、一は其東北面にあり、氣候溫和五穀豐熟し、之に住せしむるに實際力に富める蒙古人種を以てしたれば、溫帶的の生熟と形而下的の文明を産せり、印度人は體を忘れて思考の全力を靈に注ぎ、支那人は靈に意を介せずして體を事とせり、前者は未來を重んじて後者は現在を以て足れりとし、彼は靈界に伸びんと欲し、是は此地に安堵せんとせり、彼は無限を追ひ求め、是は實際を探りて止まず、兩性の相異なる實に男女の別あり。

支那印度兩文明は二者共に相容れざるが如し、然れども兩者に東洋的の同一性あり。

他邦より孤立して單純獨特の性を有する其一なり、單獨の方向に伸張して均齊を缺くこと甚しき其二なり、各々其本領に於て統一を専らとせし其三なり、二者目的を異にして方法を共にせり、總括を求めて分解を避けし一點に於ては二者共に西洋文明の正反對の方向を取れり、綜合は東洋の特性なり、而して支那は政治的に綜合し、印度は靈智的に綜合せり、中古時代の歐洲人が渴望して止まざりし一帝王一法王は東洋に於ては太古より個々に實行されしなり、即ち支那は「ギベリン」黨 (Ghibellines) の理想の如く始終一帝を戴き、印度は「ゲルフ」黨 (Guelphs) の理想に叶ひて常に一宗教の方向を取れり、然れども兩黨の希望たりし政教一致は尙ほ人類未來の事業として存す。

今世界三大文明の特質を擧ぐれば左の如し、

歐羅巴文明——政界教界に於ける分離

支那文明——政界に於ける綜合

印度文明——教界に於ける綜合

三者混合相同化して始めて完全なる文明あり、一は他の二者に頼らざれば其缺を補ふ能はず、人類の希望は三者の調和一致にあり。

第九章 日本の地理と其天職

海端有^レ國名扶桑 俗與^ニ風光^一皆雅嫺

、、、、、、、、、、、、、、、、

孤棹嘯風琵琶湖舟 萬古含^レ雪芙蓉峰頭

花香一目千樹春 月高八百八島秋

是れ我等の愛する日本帝國なり、東大陸の東端、太平洋の西北隅、一鏈の島嶼半月形をなし、亞細亞大陸を後陣に控へ、哨兵線を大洋中に張るが如し、帝國の面積十五萬方哩餘と稱す、即ち英に優る二分、佛と獨スペインとに劣る各四分、班スペインよりは小にして、伊よりは大なり、人口は四千萬を算す、即ち英よりも多くして、獨スペインよりも少く、稍や佛と相匹敵す、地球面上一大國民となりて雄飛し得るの土と人とを有す、其位置たるや北太平洋の中和を占め、熱帯の終る所に始まり、寒帯の始まる所に終る、山に芙蓉峯あり、其秀、瑞のブランク（モン・ブラン）、メタホーンに及ばずと

雖も其姿の優と正とは衆蜂の儔ひすべきなし、其河に石狩あり、英のテームス大にして民の黽勉は能く之に日本海の船舶を輻湊せしむるに足る、其隅田は蘇のクライドの水量を有し、巨艦艦艫の之に出入するを得せしむべし、其淡水に琵琶湖あり、瑞のゼネバに均しき水面を有し、孤棹舟を浮べて風月に吟じ、技工水を利用して民福を致し得べし、一國民を作るの要素は一として備らざるはなし。

日本帝國一名之を蜻蜓洲と云ふ、蓋し其南北に長くして東西に狭く、中央にたくして兩端に尖縮するの狀、渠の脈翅蟲に類似する所あるが故に然か稱せしならんか、其頭部を能登半島とせんか、其背部隆起する所を甲信の高地とせんか、其腹と尾とは伊豆半島が大島八丈島として海に盡る所とせん、其右翼は東北三道並に北海道にして、其左翼は關西西南の地と見做さん、其後翅後縁に刻入のあるは東海の濱に屈曲港灣多きを示さんか、翅脈に縦横あるは我國山脈の方向を示すが如し、前後兩翅の分るゝ所は西南に内海、東北に青森灣のあるが如し、余は實に蜻蜓洲の名を愛するなり、吾人の先祖は卓見なりし、彼等は能く脈翅蟲類の構造を究め、帝國地形の

圖 五 第



概略を示せり、吾人開明に進める彼等の子孫は此詩歌的名稱を廢すべからざるなり。
 もし日本國を天女に擬せんか、窈窕たる彼女の仙姿は大陸に背し大洋に面し、高麗半島の盡くる邊より加察加カムサツカの南角に至るまで大洋面を掩ふが如し、彼女は頭を北海に擡げ、胸を東北の山野に持し、腹を關東の郊原に据ゑ、富士山帶を以て帶おびせられ、尾濃の原野を下腹となし、畿内に下肢となり、山陰山陽の一足を後にし、南海西海の他足を前に進むるが如し、彼女は旭日に面し夕陽に背す、東向して望むが如し、西背にして弱者を擁するが如し、彼女の麗姿に聲あるが如し、耳あるものは焉ぞ聞かざるを得んや。

日本國の海岸線は屈曲東岸に多くして西岸に少し、即ち本州を以て論ぜんに、馬關より内海東海を沿うて陸奥の三厩みつまやに至るまで海岸線の延長は三千二百十二哩なり、然るに三厩より西海岸日本海に沿うて馬關に至るまでは僅かに一千五百九十五哩に過ぎず、東海に松島灣（東京灣、駿河灣）、伊勢灣、大阪灣、瀬戸内海等の深く陸地に蝕入するあり、加ふるに鹽釜、横濱、清水、四日市、神戸等の良港を有し、水輸の

便實に備れりと謂ふべし、是に反して西海岸に於ては屈曲港灣甚た乏しく、纔かに能登半島の西北に向つて突出するありて伏木ふしきの一港を日本海の波濤より防禦するに足るのみ、後志しよべしの小樽（是れ又良港と稱すべからず）を去つて西南六百里、長門の赤間關に至るまで一良港灣の西海岸を惠むあるなし、其羽後ふたごの舟川は風波を避くるに便なれども陸運に難なり、其土崎、酒田、新潟、直江津等は大河に濱し沃野を擁し以て大市場たるを得ると雖も、河口に砂泥充塞して海に通ずるに難く、纔かに輕舸に因りて洋上の船舶と往來するを得るのみ、其七尾、敦賀、宮津、境等は良灣の形をなすと雖もその掌握する産出地は甚だ狹隘にして大船を寄するの要甚だ尠し、加ふるに西北季節風の強荒なる、航海は半歲殆ど杜絶し、舟楫の便甚だ佳からず、其東海の灣深くして風和やはらかなるに比すれば、彼の優、是の劣、實に同日の譚にあらざるなり。

余輩は云へり日本は東に面し西に背すと、即ち東に開いて西に閉づ、即ち歐洲の正反對なり。

然れども西南の一隅は全く此規定に反するが如し、九州の地勢は西に開いて東に

閉づ、猿猴身を鞠めて夕陽に向つて坐するの狀なり、其東面日向灘に濱する所は港灣出入の缺乏本州の西海岸に於けるが如し、其細島ほこじまと油津あぶらづとは僅かに小船の碇泊を許すのみ、上つて豊後豊前に至るも東向して大港の開くあるなし、然るに西海岸に至つては全く然らず、『日本地文學』の著者矢津氏は記せり、「肥前ニ至リテ殆ド屈曲ノ状態ヲ盡セリ、或ハ岬嘴長ク出デ、或ハ港灣深ク入り、西ニ向テハ東西松浦ノ二半島突出シテ伊萬里灣ヲ抱キ、彼杵ツノノ半島ハ鯛ノ浦（大村灣）ヲ擁シ、東ニ向テ島原半島トナリテ筑紫瀨（有明海）ヲ包ミ、終ニ宇土ノ一角ヲナシテ薩摩大隅ノ二大角ヲ出シ薩摩灣ヲ抱ケリ」と、而して此屈折中、良港埠一にして足らず、其佐世保は海水深くして巨艦を泊し得べく、其長崎は陸運に不便なるも世界最良港の一を以て算せらる、其三角みすみは東肥の沃野の產出物を悉く掌握するに足る、東岸の貧、西岸の富、亦同日の譚にあらざるなり。

本州の南西部も亦此西向の傾きあり、其大阪灣の西向して開放する、其「日本の地中海」なる「瀬戸内海」が我のジブラルタルなる門司海峡より東に向つて延び、星列碁布の島嶼の間を屈折して深く茅渟海チヌのうみまで浸入する等、一として西向の徴候に

あらざるはなし。

全國、西南と東南に開け、西北に閉づ、天女は前と裳とに注意して背を顧みず。

日本國の山系亦余輩の熟考を要す、そは海岸線は他邦との關係を審かにし、山脈の方向情質は内治の如何を明かにし、兩者に依りて國民が世界に盡すべき天職の如何を判決し得ればなり。

余輩は復た爰に『日本地文學』記者の言を借るの必要を感ずるなり、彼は日本山系の大略を記して曰く、

蓋シ我ガ帝國邦土相異レル方向ヲ採ルニ脈ノ大山系ヨリ成レリ（一）ヲ樺太系ト云フ即チ東北方ナル樺太島ヨリ地脈ヲ延キ宗谷峽ヲ渡リテ蝦夷島トナリ其ノ中央ヲ南々東ニ貫通シ襟裳崎ニ出デ遂ニ脈ヲ中土ニ列ネ少シク方位ヲ轉シ南南西ノ進路ヲ以テ太平洋ヲ走り中土東岸ニ於テ少シク背ヲ露ハシ本系ノ内部ニ駢趨スル火山脈ト共ニ信濃ノ境上ニ達セリ（二）ヲ支那山系ト稱ス即チ西南支那大陸ノ餘波ニシテ火山脈ハ琉球島ヨリ九州ニ進入シ霧島火山脈トナリ古生紀

山脈ノ軸線ハ肥後ノ海濱ヨリ同島ヲ東北ニ横過シ豊後ニ出デ遂ニ四國島ニ渡リ判明ナル該島ノ軸線トナリ阿波ノ東部ニ於テ少シク缺損シ再ビ紀伊半島ニ起リ大和ヲ横通シテ三、遠兩國ノ間ニ入り遂ニ信濃ニ達ス支那山系ノ一派ハ中國中央ヲ地形ノ如ク連互シテ其軸線トナリ大湖ノ北邊ヲ過ギテ飛驒ノ境上ニ進入ス此兩派ノ峽谷ハ即チ所謂瀬戸内海ニシテ火山脈ハ此ノ溝間ヲ逸過セリ

樺太及ビ支那ノ兩大山系ハ信濃及ビ飛驒ノ境上ニ於テ互ニ相衝突シ地皮ニ一大裂溝ヲ生ゼリ且ツ此ノ兩大山系ノ内部ニ沿ウテ駢趨シタル數流ノ火山脈モ又爰ニ集リ地皮衝突ノ接合スル縫裂線ノ弱點ヲ求メテ其ノ勢ヲ逞ウシ劇烈ナル噴起作用ヲ以テ遂ニ高峻ナル諸嶮峯ヲ築ケリ此ヨリ火山脈ハ一轉シテ南々東ノ方向ヲ以テ縫裂内ヲ横走シ甲斐駿河伊豆ニ互リ遂ニ富士帶ト稱スル一大派ヲナシテ太平洋中ニ突出シ伊豆七島ヲ噴起セリ以上ハ本邦ヲ組成スル大山系ノ大勢ナリトス

樺太山系並に支那山系は稍や平行脈にして、唯、僅かに少しく駢趨の方向を異にするのみ、故に日本の山脈は重にブーエー氏第二則に因るものと謂はざるを得ず、

即ち山脈は邦土の延長に從て連互し、南より北にするの方向を取れり、然れども二系相接合する所に高嶺巨岳相聯りて邦土の延長を横斷するあり、其最も著名なるものは富士山帯にして遠く太平洋中に起り、青ヶ島八丈島となりて波上に顯れ、伊豆七島となり、天城山となりて伊豆半島の骨子を作り、函嶺となりて本島の南北脈に接し、竟に二脈相衝突する點に於て富士山となり一千二百丈の天外に聳ゆ、尙西北して淺間山を生み、戸隱山妙高山となりて日本海に盡く、是れ實に本邦の最高地にして全國は此處に於て東北部と西南部とに兩分さる。

富士山帯と駢趨する山脈亦一にして足らず、飛濃山脈の信濃に起り越後越中の際に於て海に盡くるあり、又伊勢山脈とも稱すべきものありて、紀伊の南端潮岬に起り、北に互りて伊勢の西境を作り、關ヶ原の一道を残して伊吹山横山嶽となり、濃江越の境に於て支那山系に合し、加賀の白山に抵りて再び西北の方向を取り、俱利伽羅峠となりて能登半島に延び、珠洲岬に於て日本海に終る、其他岩代と羽後とを分つに一脈あり、東南に延びて奥野の間に隆起する處は有名なる白河にして、奥羽七國の關門なり、兩羽間に院内の東西小脈あり、羽後陸奥間に銚ヶ關の起伏あり。

其他全國臻る處南北の延長脈を截斷するに幾多の東西脈あらざるはなし。

然れども本邦の地勢より論ずる時は南北するは幹にして東西するは枝なり、樺太支那の兩山系は梯の縦木にして、伊勢、飛濃、富士等の東西脈は階なり、南北するは東西するよりも易し、然れども幾多の障害なくして南北する能はざるなり。

故に日本國の地勢は伊太利、スカンダナビヤの如くブーエー氏第二則に因るなれども、之れに加ふるに希臘、瑞西の如く東西脈のあるありて又第一則に因るものなり、以て一統和合するを得べし、以て一統の下に分離自治を計るを得べし。

今日本國を他の文明國に比せんか、余は先づ之を英國と比較せざるを得ず、英國の稍や東方「北海」に向つて閉ぢ西方大西洋に向つて開くは我の西方日本海に向つて閉ぢ東方太平洋に向つて開くが如し、而して其東西方に於てテムス吐口シンク諸港(Cinque Ports)ポーツマス、サウザムプトン等に於て歐大陸を迎ふるの狀は我の西南諸港が西開して亞細亞大陸に向ふが如し、其山脈に南北するものと東西するものとあるは大に我の山系と相均し、日本を稱して東洋の英國と云ふ、其大陸に

對する位置も、其大洋に面する狀も、山脈の方向に於けるも二者の類似は甚だ多し。

余は又日本を希臘半島に比せんと欲す、希臘の東面して亞細亞に對するは我の西南地方が西向して同大陸に對するが如し、其多島海に散布する百餘の島嶼は我西海の諸島が我と大陸との間に羅列するが如し、其ペロポネサスは我の四國九州ならんか、其コリント灣とエーギヤ灣は我の瀬戸内海と大阪灣ならんか、然らばピラスを神戸とし雅典を京都とせよ、我の琵琶湖に對するに彼のピオシヤの窪地とコバイス湖あり、我の函嶺に對するにオスリス(Othrys)山あり、テサリーの野は關東の平野なり、馬塞頓マセドニアの原は奥羽の曠原なり、特に西岸アドリヤ海に濱する邊は港灣屈折甚だ尠く、羅馬歴史家モムセン氏の伊太利はアドリヤ海岸に於て希臘と脊合脊合をなせをなせりとの言の能く意を盡せるを見るなり、希臘が歐洲本土に開く所は其西南にあつて西北にあらず、我の日本海に閉ぢて支那海に開くに比較せよ。

希臘の山脈に又南北するものと東西するものとの二様あり、前者は大陸山系にしてアルプス山の一支が南向して爰に至りしものなり、恰も我の支那脈ヒマラヤが喜馬拉亞脈

の餘波として東北するが如し、又本脈を横斷するに副脈あり、全國を分ちて數箇の地方となす、恰も我の東西脈が邦内各地の封建自治を促すが如し、日本は亞細亞の希臘なり、共に大陸の東陲に起つて東門の關を守るが如し。

余は又更に日本を歐羅巴大陸に比せんと欲す、余は已に之を希臘に比せり、而して希臘は小歐羅巴なり、日本亦小歐羅巴ならざるを得んや。

歐の地勢の東北より西南に走るは我と異なる事なし、もし本州のみを以て歐大陸に比べんか、比較益々相近きを見ん、彼の地中海は我の「瀬戸内海」なり、彼のイベリヤ半島は我の山陰山陽なり、彼の溫暖なる伊太利半島の橄欖樹を以て掩はるゝは我の南海の紀伊半島の蜜柑樹を以て馥郁たるが如し、アドリヤ海を伊勢海とせよ、而して尙ほ想像力の自由を許すならば衣ヶ浦以東伊豆半島までをバルカン半島と思ひ見よ、歐大陸南方の三半島は我に比較物の供すべきあり、我の西北海岸亦然り、不列顛群島を表さんが爲に我に隱岐群島あり、丁抹半島の日耳曼海に突出するに對して我に能登半島の日本海に突出するあり、獨逸北岸の平潟千里に互るに對し我に

北越の砂岸百里に亙るあり、東北の露西亞平原は我の奥羽北海の郊野なり、スカン
ダナビヤ半島を表さんが爲に我に佐渡島あり、竹島（鬱陵島）の孤島は隱岐の西北日
本海中にありて英の西北大西洋中の孤島アイスランドを想ひ起さしむ、外形上の二
者の類似は實に緻密なるものと云ふべし。

余は已に歐大陸の山系を論ぜり、而して今彼と我との比較を山脈の方向に於て取
らんとするも亦決して難きにはあらざれども冗長を免がれん爲に之を讀者の考察に
任せん、余輩の已に注意せし如く我國は南北東西の山脈を以て現然たる郷域に區分
せらるゝあり、而して之れ又歐大陸の地勢たるは余輩の已に攻究せし所なり、余輩
をして再び想像力の翼を借り、歐洲を我蜻蜒洲面に畫かしめよ、歐の諸強國を我の
本土に割布する亦難きにあらざるべし。

我本州の西南、日本海と瀬戸内海との間に伸びる長半島は冷血なる長州人の住居
する我の西班牙なり、東隣の畿内は久しく我國文明の中心たりし我の佛蘭西なり、
紀伊半島は我の伊太利として南海に突出し、尾濃の沃原の其東北に附着するは、恰
もポー沿岸の郊原がアペニン山の東北に横はるが如し、半島の北境、琵琶湖の淡水

が八景を呈する邊はレマン湖を有する瑞西ならん、アルプス山の重嶺巨峯蜿蜒として東に互るに比して濃飛信の重巒が鬱然として國の中部に蟠るあり、其南支して遠駿豆となりて海に終る所は我のバルカン半島なり、關東の野、利根の水域は洪牙利の沃野ダニューブの水域とせん、北海の能登を我の丁抹となし、之より平瀉百里東北に向つて弓形をなして海に臨む我の北越は實に獨逸聯邦の位置にあり、是より東北廣袤の地、文化を蒙る最も遅かりし我の奥羽北海の地はムスコビヤの全土たる露西亞の位置に立つに非ずや、休言よ、余輩の比較は想像力の濫用より來ると、余輩我國を亞米利加に比せんとするも能はざるなり、阿弗利加なり、濠太剌亞なり、印度なり、支那なり、余輩は比較を求めんと欲して能はざるなり、日本國の位置は亞細亞的なれども其構造は歐羅巴なり。

已に其位置を知り、其構造を究めたり、リッテル、ギョーの迹を踐みて謹慎靜肅に地理學上の事實を歴史的に解せんには余輩亦我邦の宇宙に對する天職を探り得ざらんや、已に先例の供せられしあり、余輩の解題は必ずしも惰者の夢想とは信ぜざ

るなり。

一、日本は島國なり、而して島國の用は常に大陸間の交渉を助くるにあり、英國が歐、米の間にあつて歐の粹を以て米を開き、米の富を以て歐を利すとは余輩の已に論ぜし所なり、シンリーが地中海の中央にありて歐、弗兩大陸の思想交換の地たりしあり、地中海東隅の一島シプラス(Cyprus)は亞、歐、弗三大陸の間に介し、一方にはフィニシヤ、バビロンの文明を吸収し、一方より埃及の文物を採取し、之に住せしむるに重に希臘人を以てしたれば、古代三代文明の混同は此一小島に於て行はれ、文化西漸して歐大陸に達せしは多くは此島と其西隣なるカンジヤ(Cardia)島を通過してなりと云ふ、日本國の位置は米、亞の間であり、其天職は是等兩大陸を太平洋上に於て鏈鎖するにあらずして何ぞや。

二、日本國の港灣に米に向つて東開するものと支那本洲に向て西開するもの多きは、米、亞間の媒介者たる私の位置を確定するものなり、見よ、私の室蘭、松島、横濱、四日市等の東向して旭日に向ふに對して、米のバンクーバ、タコマ、

ポートランド、桑港、サンデーゴ、サンブライス、アカブルコ等が西向、夕陽に對して我に應ずるを、我の神戸、馬關、長崎、三角が西に開いて我が西隣を迎ふるに對して、黄河、揚子江は我に向つて流れ、其天津、上海、漢口、福建は悉く我に向つて開き我の招待に應ぜんとするの狀を、我は一手を伸して米を迎へ、他手を伸して亞を招き、二者をして我に於て合一ならしめんとするが如し、恰も英が西向しては米に向つて開き、其グラスゴ、リバプール、ブリストル、クインスタウン等が米のボストン、紐育、ヒラデルヒヤ、ボルチモール等と相對し、東向してはハル、倫敦、ポーツマス等を以て歐大陸の西北諸港を受くるが如し、我の亞と米とに對する位置は英の歐と米とに對する位置ならざるを得んや。

三、我が山脈の軸線南北するは我國に亞細亞的統一を施すに難からざらしめ、又之を横斷するに東西脈の所々に存するは統一の下に歐羅巴的の自治獨立の精神を養成し得せしむ、即ち我に亞歐兩主義を同化するの特質ありと謂つべし。

日本國の天職如何、地理學は答へて曰く、彼女は東西兩洋間の媒介者なりと、勿_レ

言なかれ 何ぞ簡短の甚しきやと、是れ一大國民たるに恥づべからざる天職なればなり、是れ希臘國の天職たりしなり、是れ英國の天職にして彼女の強大なるは彼女が能く其天職を盡せしが故なり、媒介者の位置、……「和平やまらを求むるものは福あひはひなり、其人は神の子と稱へらるべければなり」。

地理學の指定に係る我國の天職は大和民族二千年間の歴史が不識の中に徐々として盡しつゝありし天職ならずや。

支那文明の中心は黃河の沿岸なりし、而して其渤海は我に向つて開け、其遼東を経て高麗半島は我に向つて伸び、我の對馬、壹岐、五島は其地勢を受けて我の九州に及ぶ、而して支那文明は此地理學上の通路を經過して斷えず我に來入せり、我は悉く之を受け、能く取捨選擇し、之に加ふるに非常の進歩と改良とを以てせり、制度、文物、美術、工藝、耕耘の法に至るまで創意は我は悉く之を支那に受けたり、而して神武大帝一統以來、日本武尊、田村麿の東征、仲哀天皇、神功皇后の西征に至るまで、荒陬の地未だ道路の便甚だ乏しきの時、能く短日月の中に東征西服して

全土を一中央權の手に握るを得せしめし者は、日本の地勢がブーエー氏第二則に依り、軸脈、國の延長に従つて連互し、彼等の遠征に妨害を與へざりしが故なり、故に應神の世に始めて支那の統一主義の我邦に輸入されしや、國民は喜んで之に接し、爾來各王朝が制度改革に従事せし時、必ず西隣の制度に則り、我蜻蜒洲に家族主義に基むる支那政略を施すに敢て一も不便を感じざりしなり、加之、支那の大陸的思想は日本に渡りて島國的の壓搾蒸粹を來し、忠孝仁義の常道は殆ど宗教的の教理と化し、竟に世界に供するに萬世一系の天子を以てするに至れり、強國の間に介し、重嶺高嶺一國を十八郷に分斷する瑞西國に於て我の制度を施さんとするも全く能はざるなり。

我等の吸收せしは勿論支那のみにあらず、西藏蒙古を経て黃河沿岸に輸送されし印度思想も直に地理學上の常路を経て我に輸入せられたり、而して佛法一たび我邦に入りしや釋迦牟尼佛は幾くもなくして一大帝國を彼の領土に加へたり、日本に於ける佛法の發達は實に之を輸入せし人の豫想外に出でたり、佛法學者は云ふ「もし釋氏をして彼の死後三千年の日本佛法に接せしめしならば彼はその彼の宗教なるを

判別し能はざるべし」と、印度本國に於ては殆ど消滅し、西藏蒙古に於ては喇嘛教となりて法主制度の迷信に下落し、支那朝鮮に於ては儒教政治の下に僅かに下民の信崇を仰ぐに止まる佛教は、我日本に於ては直に王室の宗教となり、我の寶貨と美術と智能とは悉く其使用に供せられ、今や佛教國民中我の如く普く釋氏の感化力に與り、能く彼の眞理を解するものは地球面上なきに至れり。

嘉永六年六月、北米合衆國の一艦隊が我の浦賀に來り威嚴と禮節とを以て我に開港を促せし時は、東西兩洋間の媒介者が强健有望なる新郎に接せし時なり、米の我と交通を求むるに至りしは實に止むを得ざるに出でたり、之に先んずる七年、西洋文明は已にロッキーマン脈を横斷し太平洋岸に下りカリホルニアに樂園郷を作り始めぬ、之に先んずる十年、攝理は砲聲を以て我が西隣の惰眠を破り、彼等に堯舜の美德を世界に發揚せしむるの時機を供せり、カリホルニア開け、支那開放されて、其中間に立つ日本にして永く拱手干渉せざるを得んや、新郎新婦已に丁年に達せり、媒介者の立つべき時は至りぬ。

提督ペルリ開港要求の理由は米國の漁船にして薪水の缺乏を告ぐる時は我の之を

供せんことにありたり、然れども彼をして爰に至らしめしは米國支那間に航路を開かんが爲には日本の開放を必要と認めなければなり、日本の位置たる太平洋航路の衝に當り、支那の富港より桑港、ポートランド、プゼットサレンビ淺瀬諸港に往復せんとする船舶は我國に寄港せざるを得ず、殊に黒潮の我が海岸に沿ふ數十里の沖を流るゝあり、西南反對貿易風帯の我を去る遠からざる處に始まるあり、我に寄らずして東西兩洋間に航海せんとするものは海流と氣流との援助を抛棄するものなり。

必要に迫られて日本は開放せられたり、而して自然は世界の創造の時より此開放を待ちつゝありたり、東京灣の深く陸地に浸入し、關東の郊野を控へ、横須賀、横濱の要港を具へて東の方米國に向つて開くは、永く彼が來りて我を開かんことを待ちつゝありしなり、長崎、兵庫、堺は支那、印度に對する我が關門として已に開放せらるゝ茲に千餘年、然るに今や我が東門は開かれたり、東隣との交際之より繁く、萬邦の賓客、我は多くは之を東門に迎ふるに至れり。

米國一度刺を通じて我に親交を求め、我之を諾して彼と握手せしや、彼の文物は最速度を以て我に浸入し來りぬ、已に支那印度を學び盡せし日本は彼女の性來の同

化力を以て歐米を吸收し始めぬ、而して東洋主義に堪へ又之に依つて涵養されし日本人は、又能く西洋主義に堪へ、能く之を消化し、其東洋的の腦裡に蓄ふるに西洋的思想と精神とを以てせり、西隣未だ一尺の鐵路を有せざりし時に、我に已に千有餘哩の鋼鐵路の文明を我の僻陬に輸入するあり、清廷未だ曆を太陰の運行に求め運を宿星の出沒に卜するに、我はニュートン、ラプラスの天文學に基ける太陽曆を以てするあり、卅年間に於て日本は東洋國ならざるに至れり、而して四千年の昔、詩聖ホームルの時代に於て早や已にアリヤン人種の腦裡に浮び、「アムフィクチオニック」會議（Amphictyonic Council）となり、「ツリビュートン」政治となり、「マグナカルタ」を生み、英國清教徒ピュリタンを出し、米國獨立となり、佛國革命となりし個人主義は、西洋文物と共に我の認むる所となり、西隣未だ自由の一聲をも揚げざるに、釋迦の印度は奴隸國の恥辱に沈み孔子の支那は滿洲掠奪者の占領物たるに際し、亞細亞の日本に已に歐米的の憲法ありて自由は忠君愛國と共に併立し得べしとの證例を世界に擧げぬ。

日本をして米、亞の文明に接せしめしものは勿論其地理學上の位置に依れり、之

をして亞細亞的の統一に堪へしめし者は其軸脈の南北して一國の統御を易からしめしが故なり、而して西洋主義の輸入に會して直に之に應ずるに至らしめしものは東西の横斷脈ありて統一の下にありて已に自治割據の制に馴致せしが故なり、東洋的の君主主義も我に施し得べし、西洋的の自由制度も我は施行し得べし、我の制度は西洋に則れり、西隣もし西洋を學ばんと欲するか、必ず我より之を學ばん、東隣もし東洋の長を取らんとするか、必ず我に於て之を認めん、兩洋我に於て合す、パミール高原の東西に於て正反對の方角に向ひ分離流出せし兩文明は、太平洋中に於て相會し、二者の配合に因りて胚胎せし新文明は、我より出でて再び東西兩洋に普からんとす。

* さし出る朝日の本の光より

高麗もろこしも春をしるさん

本居宣長

第十章 南三大陸

赤道以南に地を有する三大陸を云ふ、阿弗利加、南亞米利加、濠太刺利是なり、共に北三大陸の延長なるは陸地の連續を以て察し得べく、其地勢の北より南に互るを以て知るを得べし、南三大陸は北三大陸の附屬物と見て可なり。

南三大陸は各々之を隔絶するに渺茫たる大洋を以てするに關せず其形狀並に構造に於ては相類似する點一にして足らず、今其重なるもの二三を左に掲げんに、

- 一、海岸線の圓滑にして屈折出入甚だ尠きこと、
- 二、地勢南北に互り、北に廣く南に狭く、山脈は陸の延長に徇ひ、東西海岸に沿うて聳ゆること、

三、西南に大曲灣を具へ、東北に大岬となりて突出すること、
然れども各大陸亦其特質あるあり、阿弗利加は高地大陸と稱すべく、平野は僅かに海岸に沿ひて存するのみ、南米は平原大陸と稱すべく、峻嶺東西兩岸に近く聳えて

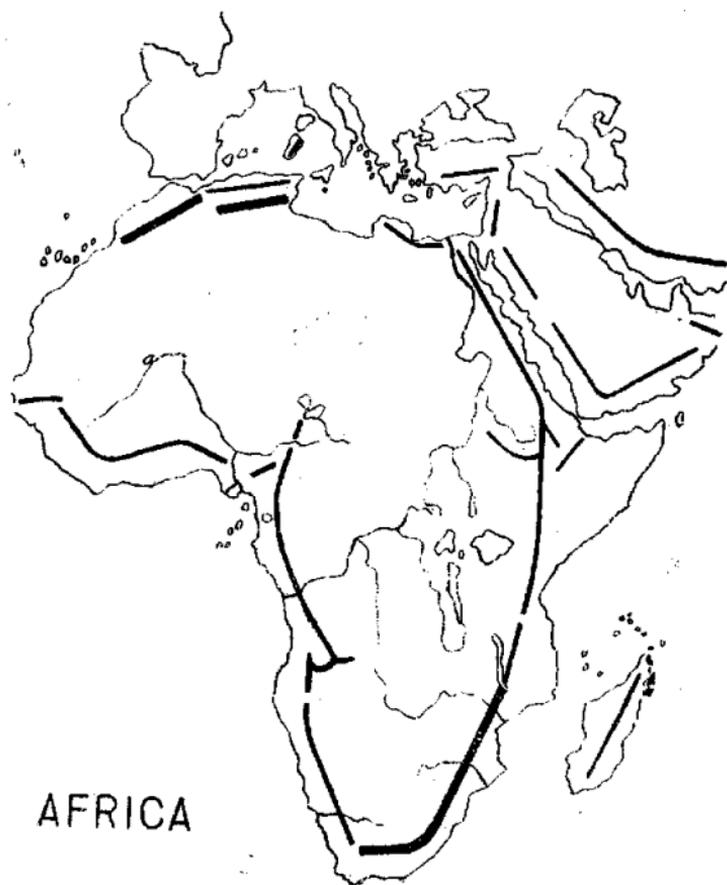
急斜傾を以て海に臨む、濠太刺利の高地は高からず、山嶺亦峻ならず、内地は重に沙漠なれば之を沙漠大陸と稱せんか、阿弗利加は北に寄る最も甚だしく、面積の過半は赤道以北にあり、南米之に次ぎ、濠太刺利は全く南半球に有り、故に南三大陸中阿弗利加は最も早く歐、亞の文化を受け、南米之に次ぎ、濠太刺利は大陸中の末子として世に現れたり。

南三大陸が人類の進歩歴史に於ける位置如何、是れ讀者の請求する問題なるべし、然れども之れ未來に屬する問題なるを以て余輩は多言せざるを可とす、余輩は之を過去に徴し、北大陸の歴史に鑑み、以て僅かに余輩の憶測を試むるのみ。

阿弗利加

阿弗利加の地理は甚だ簡單なるものなり、觸體形をなしたる陸塊、之を圍繞するに平地の條片あるあり、内に向つて進むこと平均百英里にして山脈の海岸平地に沿うて大陸を周廻するあり、山脈を経過すれば一面の高地なり、是れ阿弗利加なり、地形構造の簡單なる是に勝る能はず。

圖 六 第



阿弗利加大陸の一大特質は其交通の不便にあり、港灣の缺乏其一なり、一千二百萬方哩の大陸、一紐育、一上海のあるなし、アレキサンドリヤ港は人工に成れる埃及一國の埠頭たるに過ぎず、ザンジバー (Zanzibar) なり、クアルメーン (Quelimane) なり、ケープタウン (Cape Town) なり、蕭索たる小港以て大陸の輻湊地となすに足らず、大河の航海用に供する能はざる其二なり、ナイルは邇上五百哩間舟楫の便を許すと雖も僅かに幅二十哩に足らざる兩岸の民を利するのみ、ナイジヤ (Niger)、コンゴ (Congo)、ザンベジ (Zambezi) の三大河に至ては急流河口より遠からざる處に存し、多く人工を施すにあらざれば運輸の用をなさず、大陸を圍繞する山脈其三なり、大河の濶谷を以て海洋に向つて開くが如き阿弗利加大陸に於て見ざる所、内地何れの方面よりするも先づ高嶺を越えざれば海に達する能はず、海岸熱病地の一帯其四なり、歐人にして内地に入らんと欲するものは必ず此疫癘地を通過せざるべからず、而して熱病の感染を受けざるもの未だ曾てあるなし、故に見る阿弗利加は自然の封鎖國なるを、入るに關門あるなく、出るに通路なく、加ふるに大陸を圍繞するに山脈の高壁を以てし、外濠として惡癘地の一帯を設けたり。

此四圍僻陬の大陸、土地沃饒と稱す可らず、北にサハラ、南にカラハリありて大陸の三分一は荒漠たる沙原なり、中部高臺の地、日光の直線を受くると雖も、植生豊かならず、害蟲最も多く、印度、伯刺西爾^{ブラジル}等の樹林藁藤蔓蔓の狀は此大陸に於て多く見る能はざる所なり、阿弗利加内地を開放するも文明國は之に依りて利する所有りや否やは未だ識者間の問題なり、我の彼に給すべきものは多くして彼の我に酬ゆべきものは砂金と象牙とを除いては他に殆どあるなし、野獸は文明の進歩と共に盡滅するもの、寶金屬の量は人命を賭して求むるに足るや未だ疑問に存す、今や歐洲の諸大國は争つて地を阿弗利加大陸に求めつゝあり、然れども彼等は占領權を宣告せしのみにして未だ實際の拓植に従事せしにあらざり、英人がシャールワ(Shirwa)、タンガニカ(Tanganyika)地方に開拓を試みつゝあると、白耳義人がコンゴ河沿岸の開放を勉めつゝあるとを除いては、他に未だ此暗黒大陸を變じて人類の幸福なる棲息地となしつゝあるの經營を見ず。

然らば阿弗利加は開放せられざるか、天は之を抛棄せんが爲に阿弗利加を造りし

か、阿弗利加は人類進歩の歴史に與かるべからざるか、一千二百萬方哩の陸塊は永遠まで黒奴と野獸との占領地として存するか、余輩は然か信ずる能はざるなり。

阿弗利加大陸の墾闢は人類全體の進歩が其頂度に達せし後にあり、其交通の不便は之を超除するに今日の工學を以て爲す能はず、或は單線鐵路を架設すべしと云ひ、或は新たに吃水七呎の川蒸汽船を造るべしと云ひ、或はサハラ沙漠を變じて海となさんと云ひ、阿弗利加内地開鑿法の難きは北極に到達せんとすると同一なり、今日の學術と資本とは未だ此難に勝つ能はず、ピーテルス氏の剛膽なるもスタンレー氏の智略あるも、未だ此障害を超越るの道を教へず。

余輩は已に阿弗利加内地の比較的沃饒ならざるを述べたり、印度南米の富は招かずして開明人の垂涎する所となり、利慾は之を開鑿するに充分なる主動力なり、然れども阿弗利加は全く然らず、象牙已に盡き、買奴の蠻習禁壓せらるゝに至らば、疫癘を侵し威焰を忍び、毒蛇猛獸の險を冒すものは殆どなきに至らん、利慾が人類活動の最大主動力たる間は阿弗利加の開発は望む可らざるなり、葡萄牙人の其東西

兩岸樞要の地を占有する事こゝに四百年、未だ曾て一路を開いて便を内地に通ぜしことなし、伊太利人紅海の西岸アソワを占領し、幾干もなくして收支相償はざるの故を以て之を放棄せり、阿弗利加は義俠心と慈善心とのみを以て開くを得べし、英の宣教師ロバート・モフハート氏此精神を以て一生を黒奴の中に消費し、南方諸州が今日の旺盛を致すに至りしは彼の功績與りて力あり、彼の女婿デビッド・リビングストン氏は中央阿弗利加の開祖と稱すべき人なり、彼に敬天愛人の一片の精神ありしのみ、彼曾て人跡稀なる地を横断せんとするや、其險を説いて彼を止むるものあり、彼答て曰く、「葡萄牙人が利慾の爲に通過し得る所、我何ぞ我が神の愛の爲に通過し得ざらんや」と、彼の地理學的探險は常に博愛的の目的を以てせり、彼常に曰く、「地理學探險の終る時は我が目的の始まる時なり」と、以て黒奴の教化は彼の最大目的たりしを知るに足る、彼は生命を阿弗利加大陸の爲に犠牲に供せり、スタンレーの探險は彼を搜索せんとするより起れり、シャールワ、タンガニカの傳道的拓開は彼の考案に従つて創まれり、コンゴ自由州は彼の博愛に則りて開明國民の同盟團結の上になれり、中央阿弗利加をして今日あらしめしものは實に一宣教師の衷情

に基けり、博愛之を開くを得べく、博愛之を拓するを得可し、阿弗利加大陸の開發は博愛時代の到來を待つて始めて期すべきなり。

故に余輩は云ふ、阿弗利加大陸の存在の理由 (raison d'être) は人類の高尙なる自力を發揚せんが爲なりと、技藝なり、博愛なり、之を適用するの機會なくんば其發達は望む可らず、世に難事の存するは人の之に克ちて進歩せんが爲なり、鍛練の性を有する此地球は又人類最上の進歩を促すの場所ならざるを得んや、米人シオド・パーカー氏曾て宣教師ジャドソン氏の事業を評して曰く、「もし外國傳道事業にして一ジャドソンを生ずるに止まるとするも吾人は以て足れりとすべし」と、一偉人を世に出すは國民の大事業なり、もし阿弗利加にして百モフハート、百リビングストンを喚起せしめ、歐人之に依りて博愛の功力を悟り、弱を蠶食するの愚と害とを認め、彼等がコンゴ自由州を設立せし如く、劣等人種を遇するに人情と公義とを以てするに至らば、阿弗利加は其天職を充たせりと謂つべきなり、阿弗利加の歐羅巴に接近するや其開發は歐羅巴人より望むべきなり、今や全大陸は歐羅巴人の割

分する所となれり、歐羅巴の共同は阿弗利加より始まらざるべからず、埃及問題が公義正道に基いて結了せられ、歐人共同一致して闇黒大陸を開かんとすれば、ナイルの聖河は地中海文明を南輸するの通路となり、鐵路はニュービヤの沙漠を横斷し、カルツームの城市を過ぎ、ホワイト・ナイルの兩岸を縫ひ、竟に赤道直下の大湖に達し、淡水湖の連鎖に接續し、以て東南岸サムベジ河口に達するを得可し、地中海岸アレキサンドリヤよりモザムビク海峡クェルメーンに至るまで自然の通路の存するあり、其開鑿は未來の「歐羅巴合衆國」の一事業として存するなるべし、而して佛の植民地たるアルゼリヤは益々噴水井の掘鑿を増加し、サハラの大沙漠をして歩一步づゝ開明の域に加へつゝ進まば、竟に田園相續いてナイジャ河邊に達し、南向してカメロン山下ギニヤ灣に至るを得ん、時に阿弗利加全體は歐羅巴大陸の田畝となり、黑人安堵して白人の爲に之を耕し、奴僕は卑陋なることなく、主公は尊大なることなく、那威の北端「北岬」より阿弗利加の南端喜望峯まで靄然たる和氣の充ち満つるに至らむ、佛のビクトル・ヒューゴ曰く「十九世紀に於て白人は黒人より人を作れり、二十世紀に於ては歐羅巴は阿弗利加より世界を作らむ」と。

圖 七 第



南亞米利加

南米は北米の連續たるは余輩の已に前章に於て論述せしが如し、兩者地勢の相似たる之を同大陸を二分せしものと見做すも可なり、然るに前者は拉典人種の拓植移住せし所となりしより、後者の「チユートン」的開明に比する時は步數歩を譲らざるを得ず、ポリパー西班牙本國に叛して南米諸國の獨立を成就してより、以來自治制度に習練せざる拉典人種が北米合衆國の憲法に倣ひ、大陸の樞地に割居して共和國を設立せしと雖、サクソン民族の政治的機關は彼等の能く運用し得べきにあらざるを以て、南米の共和國なるものは僅かに虛名に止まり其實は壓制政治の最も甚だしきものと曰はざるを得ず、故に争亂紛擾止む時なく、血を流す事なくして大統領選舉の實行されし事殆ど稀なり、彼等は君主政治の賤しむべきを知りて自治制度を實行するの資格なく、思想、實力に勝るが故に暴力に依りて理想を實行せんと勉めつゝあるなり、争鬪虚日なき南米諸共和國を如何せんとは歐米識者間の大問題なり、寶礦の無盡藏なるあり、珍樹奇木の森林方千里に互るあり、世界最良最大の珈琲園、

無比の大牧場、膏腴なる麥畝、北はオリノコ河口より、南はホールン岬に至るまで、正直なる勞働に依つて仍ほ數千萬の人靈に平安と快樂とを供すべき富源は此大陸に存するなり、南米の缺乏は強固なる政治なり、如何にして之を供せんか、是れ目前の實際問題なり。

南米諸國今は將に破産の位置にあり、祕露^{ペルー}の如く其有名なる鳥糞島と全國の鐵道線路とは擧げて抵當として歐人の手にあるあり、亞爾然丁^{アルゼンチン}共和国の發達は重に英人の資本によりて成れり、其他ベネズエラなり、コロンビヤなり、其實權は歐洲資本家の掌中にあらざるはなし、故に或人は説をなして曰く、南米は早晚歐洲諸強國の有に歸す可しと。

又説をなすものあり曰く、拉典人種の性たる未だ自治共和の制に堪ふるものにあらず、西班牙に共和政治の失敗なりし、共和國として佛蘭西の紛擾常に絶えざる、共に彼等が未だ此種の政治に適せざるの徵候ならずや、見よ伯刺西爾^{ブラジル}は帝國たりし時は南米諸邦中に屹立して最も強健なる政府を有せしかども、共和國となりてより

争亂革命相踵いで起り、今や國家累卵の危きに有るにあらずや、穩和なる君主政治のみが南米の平安を維持し得べしと。

説をなすものは又曰く、南米を歐洲諸強國間に分割せん事は一には其民の承諾せざる所なるべく、二には諸強國間に國力平均の度合を失ひ反て争亂を歐本國に醸すに至らん、若かず南米全土を舉げてアングロサクソン民族の保護國となし、英國と北米合衆國とが其責に當り、南米今日の亂麻を調理すべしと。

是等諸説何れも據る所なきにはあらざれども今日の實際的難問題を解せざるが如し、歐洲諸大國占領説は縱令南米人の肯んずる所となるとするも北米合衆國は厭をの有名なるモンロー主義を取りて歐洲政府が米大陸政治に干渉するを許さざるべし、加ふるに一朝富饒なる南米諸州の割附より歐洲諸強國間の權力權衡を擾亂するが如きあれば歐羅巴全土は再び「七年戦争」、佛國革命時代の悲劇を呈するに至るべし、君主政治の回復亦望むべきにあらず、民の理想は北米合衆國にあり、已に大量なるドムピードロー帝を厭ひし民が如何で再び帝位に向つて拜すべけんや、舊世界の陳腐政治は新大陸の堪ふべきものにあらず。

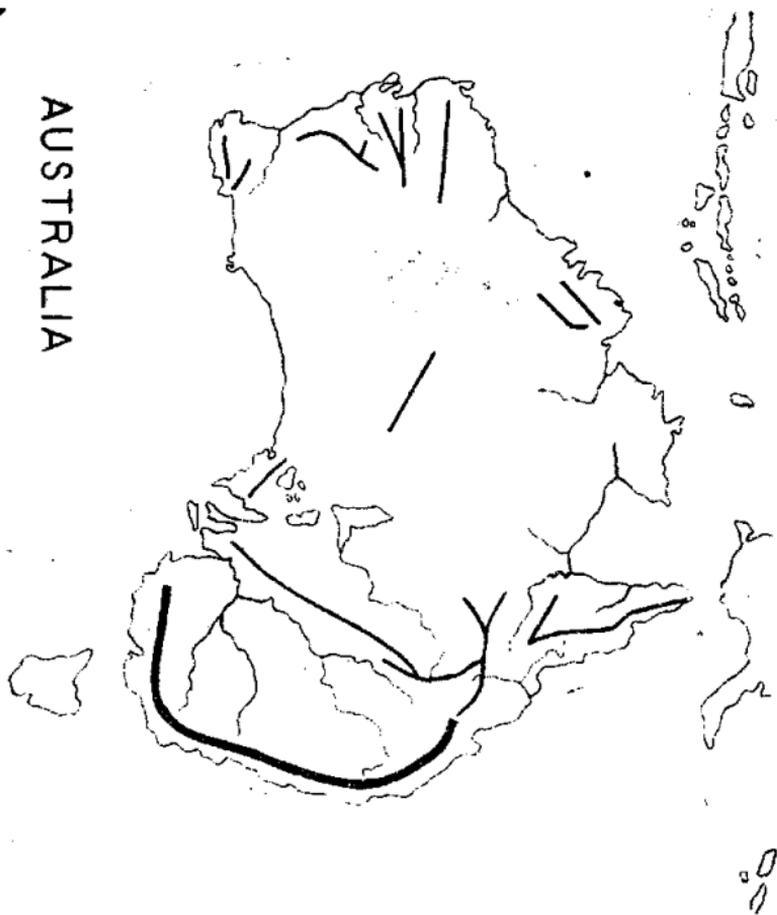
第三説は稍、實際に行はれ易きが如し、然れども之に勝るの一法、即ち自然の要
求する唯一の方法が南米の未來として存するにあらずや、即ち北米合衆國を盟主と
なし、南北兩米一大共和國を創設するにあり、是れ米大陸地理の然らしむる所、是
れ發見以來歴史の趣く所、是れ萬國擧つて異議を呈すること能はざる所、是れ兩米
大陸の利益、全世界の幸福、是を除いて他に此疑題を解するの途あるなし。

墨西哥並に南米諸共和國の憲法は皆北米合衆國の憲法に則りしものなり、合衆國
は實に新大陸の中華なり、教化は彼より始まり、團結は彼に依つて成るべし、北
方加奈陀^{カナダ}を合し、南方西印度諸島を買收し、墨西哥を誘ひ、中央亞米利加を同化し、
終に南米六百萬方哩をして清教徒祖先の理想に教化するは合衆國民の天職なり、北
光閃く所より十字星直下に至るまで、地勢の連續延長に従ひ、一大共和國の連互す
るに至らざれば、南米問題は解せられざるべし。

濠太刺利

濠太刺利は亞細亞の屬たるは阿弗利加が歐羅巴の屬にして南米が北米の屬たるが

第八圖



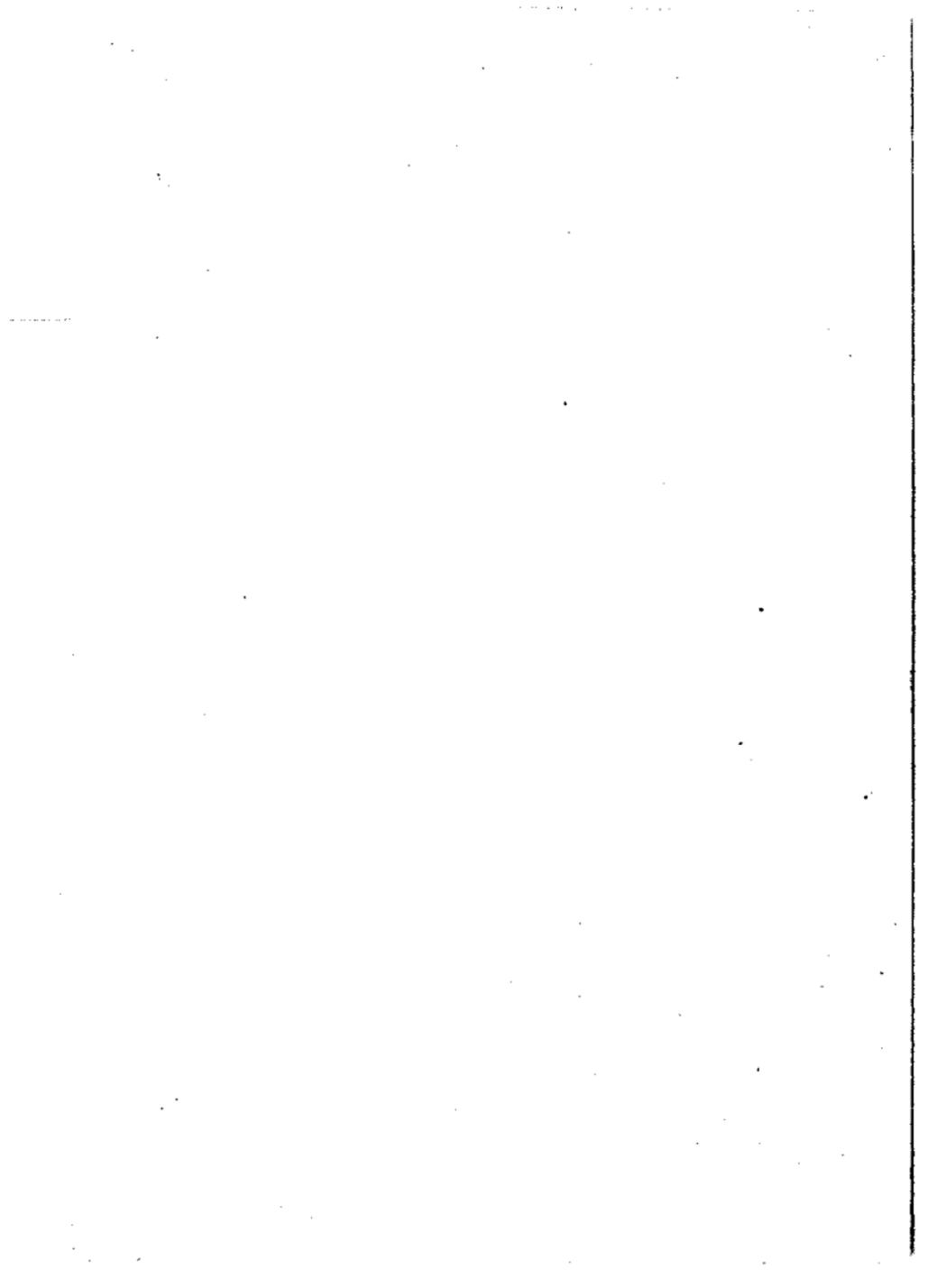
如し、其海を隔て、亞細亞大陸に對するは其獨立たるの證にあらず、余輩は已に東印度多島海の海深甚だ少きを述べたり、特に一鏈の島嶼兩大陸を繋ぐあり、亞細亞は馬來半島となりて遠く南に伸び、蘇門特臘島と殆ど陸続きをなす、是より東西二千哩をサンダ諸島となす、濠太刺利の北端メルビル島を距る二百哩の處に盡く、濠太刺利は地理學上亞細亞の屬たるは争ふべきにあらず。

濠太刺利の未來如何、もし阿弗利加と南亞米利加との各、其北大陸に於ける關係より推す時は、濠は亞、特に東亞の附屬國たるの位置に居るが如し、然れども歴史は全く地理學上の指示に反し、今や南洋の全體は歐人の版圖として存す、然れども濠洲占領問題は已に終結せりと稱すべからず、東亞振興の後、歐人永く南洋諸島に堪ふるや否やは未だ以て知る可らず、東洋人の援助に依らずして彼等が南洋を開發し能はざるは明かなり、而して實力を重ざる支那人にして永く南洋の拓植に使役せらるゝならば彼等は又其實權を握らずして止まざるべし、聞く英領香港の如きも其實際上の商權は已に支那人の掌中にありと、濠洲亦終に香港の如くならざるを得ん

や、南洋占領問題は支那の振興を待たずして容易に決すべからざるなり。

文明中央亞細亞に創まり、北半球を一周して三様となれり、歐羅巴文明なり、亞米利加文明なり、亞細亞文明なり、三者皆目的を共にして各、其質を異にす、人類全體の幸福は三者其特質を維持し益、之を發達するにあり、然れども文明は人類の生命力なれば常に増長するに非ざれば死滅するものなり、故に造化は三文明の爲に擴張の地を供へたり、歐は弗を同化し、北米は南米に伸び、亞は其理想を濠に施し、以て益、其特質を發揚し得べし、過去四百年間人類の冀望は常に西に存せり、而して今尙ほ西方の發達訓化すべきあり、然れども文明の西漸其極に達する時は其南漸の始まる時なり、南漸は已に始りぬ、未來一千年間人類の冀望は南にあるべし、而して西漸し終り、南漸し終り、人慾悉く去り、天理悉く存し、善と眞と美とが水の大洋を掩ふが如く地球全土を掩ふに至つて、此地創造の目的は達せられしなり、然れども吾人の義務は今の時にあり、此所にあり、吾人にして今、此の時と所に處して、能く吾人の天職を盡すにあらざれば、最終の佳節は來らざるなり、沈思、萬國

圖に對する時、吾人をして神命の重きを感じせしめよ。



註

三九頁*

彼等の徳義はその快樂の如く低し、

そは洗練純化の停るや、父祖より子孫に

變更改善を加へられずしてその習俗は傳はり、

愛なり友情なりその尖銳なる投槍は

頑迷の心情によりて鈍化すればなり。

或はより嚴格なる德行にして山懷ふどころに、

巢上に竦む鷹の如く、宿るものもあるべし。

されど凡そより、溫雅なる徳義にして、

より教養ある人生に現れその行路を樂ましむる如きもの、

かかるものは遠く散り散りに物怖づる翼に乗りて飛び行きて、

より心地よき空に於いて戯れ且つ羽搏かんとす。

四九頁*

而して「大洋」は狂瀾怒濤の眞中にて

安全をその子たる島國に告ぐ。

依つて恐怖なき幾時代の間

世の「平穩」は汝の岸邊を愛し、

嘗て不遜なる侵入者の狂暴は其處に及ばず

また汝の城砦を掠め田野を赤に染めしことなし。

六二頁*

翼は我が肩に羽搏くと見ゆれど、

此處を動く能はずして、我は佇立し、

天に達する道を架けたる

かの輝かしき階梯を凝視す。

(US詩は Wordsworth の Evening Voluntaries 6-7-8 Composed upon an evening of
extraordinary splendour and beauty とする詩の四十九行以下)

八九頁*

然り、人生の海に孤島と置かれ、
 鳴り響む急湍、我等の間を流れ、
 涯なき海原に點々として、
 我等幾百萬の人間は單獨に生存す。
 その島々は押迫る潮を感じ、
 かくて自己の無限の境界を知る。

九四頁*

他の人々（希臘人）は呼吸する銅像をより美しく鑄るとふことを、
 我は認む、——また大理石に生々躍動の面貌を與へ、
 より巧みに訴訟を辯じ、浮動する空に天體圖を描き、
 星座の昇るやこれに名を與ふるとふことを。
 汝は、羅馬人よ、諸民族を支配すべきを忘るべからず、
 平和の法律を創設し、破れたるを容し、誇れるを摧くこと、
 これぞ汝のわざたるべし。

（この詩につきては、岩波文庫「ウエルギリウス『アエネーイス』第六卷」、田中・木村譯二六四頁參看）

一七三頁*

この歌の作者は本書原文に於ては「平賀源内」とされてゐるが、本居宣長の『鈴屋歌集』一之卷の第一歌に、「春哥 年のはしめによめる」として「さし出る此日の本のひかりよりこまもろこしも春をしるらむ」とあるより、宣長の歌なること明かなりと思はれるので、そのごとく訂正することとした。(本居麴親校訂『増補本居宣長全集』第九卷、参照)

解 説

本書は、明治二十七年（一八九四年）五月、『地理學考』の書名をもつて刊行せられ、明治三十年（一八九七年）二月、『地人論』と改題、再版せられた。

その執筆は、明治二十六年（一八九三年）の夏から秋への二三箇月の間と推定せられる。著者の京都在留時代の最初期、日清戦争の前年、著者三十三歳の年であつた。（この年は著者の文章の最も多産なりし年であり、『求安録』『余は如何』（にして基督信徒となりし乎（英文））等の代表作もこの年に書かれた。）

*

本書に對し著者自身如何なる感想をもつてゐたかは、大正八年（一九一九年）著者編輯の『内村全集』刊行の計畫ありし當時（五十九歳）、その日記に録すところによつて窺ふことができる。

六月十七日（火）陰鬱 『地人論』の訂正に従事した、二十五年前に成りし自分の著述を讀んで尠からず教へらるる所があつた、……今に至つて地理學者とならずして聖書學者となりし事を悔いざるを得ない、詩人シルシルが言ひし如く「自由

は山に在り、腐敗の氣は未だ嘗て其新鮮なる氣流を汚せしことなし、あゝ自然は到る所に完全なり、唯、人のみが憂苦を以て之を毀損す」と、然り自由は山に在り海に在り、……あゝ人よ青年よ、汝等の自由を求めんと欲せば……山と海と地理學とに行けよ。

六月十八日（水）半晴 午前八時柏木の家を發し、三等汽車、那須軌道のガタ汽車、鹽原山道のガタ馬車にて、午後四時栃木縣鹽原の溫泉宿に着いた、……

六月十九日（木）曇 時々雨ふる、……余は獨り清流に面して舊著『地人論』の訂正に従事した、恰かも他人の作を校閲するの感がした、文は拙である、然し乍ら想は雄大である、曰く「亞細亞論」、曰く「歐羅巴論」、曰く「亞米利加論」と、世界の地理を一大詩篇として見たる作である、余は此著述を爲して置きし事を感謝する、米國アマストに於ける地歴研究二年間の結果である。

六月二十日（金）半晴 ……箒川の流聲を聞きながら終日『地人論』の訂正に従事した、日本天職論最後の結論たる「東西兩洋我に於て合す、パミール高原の東西に於て正反對の方向を取りて分離流出せし兩文明は太平洋中に於て相會し、二者の配合によりて胚胎せし新文明は我より出でて再び東西兩洋に普からんとす」

との我言を読み終つて、余は一大思想を世に供せしことを感謝せざるを得なかつた、後世之を読み我思想を政治的に世界に行ふ者があらう、或はキリストが再び來り給ふ時に彼は我と我が同志とを以て此理想を實現し給ふかも知れない。

六月二十一日（土）半晴 『地人論』訂正を終つた、隨分の骨折りであつた、然し爲す甲斐のある努力であつた、其文は拙劣なれども想は雄大である、此著は此儘にして葬らるべき者ではない、訂正を施して再び世に出すべき充分の價値があると認むる、此事を爲すために四日間山中に留まりし事を悔いない、尙ほ引續きて『興國史談』の改訂を此の靜かなる所に於て行ひたくある、併し明日の義務が余を東京に召出すのである、高原の涼風は惜くある、然し止むを得ない、……サヨナラ箒川、有難う、君の清流に勵まされて困難い仕事を爲すことが出來た、復た來るよ。

また、

九月十七日（水）半晴 『地理學考』（地人論）の校正を了つた、『内村全集』發行中止のため張合抜けがしたが、然し今之を訂正して置いて決して悪くはない、自分ながら此無邪氣なる幼稚の作を愛せざるを得ない

とある。もつて著者の本書に對する評價を知るに難くない。本書が五十年後の今日このやうな形に於て廣く日本人の前に提供せられることは、その思想の正當に理解せられる限り、甚だしく著者の本意に反くものではないと信ずる。

本書は、大別して、總論、各論、結論の三部分より成ると見ることが出来る。總論は「地理學研究の目的」「地理學と歴史」(上下)「地理學と攝理」の四章、各論は「亞細亞論」「歐羅巴論」「亞米利加論」「東洋論」の四章、結論は「日本地理と其天職」および「南三大陸」の二章である。解説者は以下略、右三部分の順序を追うてその内容の若干を略述し、もつて本書全卷に涉る著者の思想につきその構造を鮮明ならしめたいと考へる。

まづ總論は地理學研究の目的如何といふことをもつて始められる。著者によれば地理學研究に二つの目的があるとされる。一つは地理學によりて一國の「殖産政治美術文學宗教」の「發點」を知るにある。他の一つは地理學によりて國民の「健全

なる世界觀念を涵養」するにある。もともと一國の文明は他國の文明に共通なる一般法則によつてのみ成立せず、それには特にその國土の地理（自然的環境）が基礎的な契機として存在する、そのことを知らずして一國の文明の特質を理解し又その發達を期待することはできない。併し同時に國民は「眼を自國以外に注」ぎ世界の地理と歴史とに於て普遍的な世界精神の動きを知ることなくして、自國の國民精神を理解し又之を眞に愛することはできない。「眞正の愛國心とは宇宙の爲に國を愛するを言ふなり、而して斯の如き愛國心のみが最も國を利するの愛國心なり」である。本書は、この國民的にして世界的、世界的にして國民的といふ二にして一なる地理學研究の目的のために、世界地理をもつて世界史を、世界史をもつて世界地理を論じたものと言ふことができよう。

地理と歴史は「舞臺と劇曲との關係」に於てある。もちろん劇曲に對し舞臺をあまり高く評價しすぎてはならないが、さりとて之を低く評價しすぎてもならない。舞臺なくして劇曲は演ぜられない。地理を離れて歴史は考へられず、歴史はその性格と方向とを地理によつて影響せられざるを得ない。

山國に自由獨立の歴史があり、平原國に壓制服従の歴史があり、海國に世界王國

的の歴史がある。これ山國に「獨立の胸壁」たる山脈（特に東西脈）ありて自由を守り、平原國に交通と物資とありて全體主義體制を可能とし、海國に世界に通ずる海洋の支配があるからである。——特に海國の位置たる、世界史の行程に於ける「文明」の受授者として世界史的の任務を擔ふ。希臘、英吉利、日本のごときそれである。そしてこれらの國々がその港灣開閉の方向等その地勢と海岸線に於て如何にその受授の任務にふさはしきか、これ本文に著者の詳論して止まないところである。——また山脈の方向たる、一國の他國に對する政治關係、また一國內の政治形態と深き關係を有する。山脈に東西脈と南北脈がある。東西脈は國家間の分離獨立を助ける（ブーエー氏第一則）、併し南北脈は國家の統一合體を妨げない（ブーエー氏第二則）。また東西脈は民主的自治制を發達せしめ、南北脈は君主制の獨裁制を可能とする。この山脈の走行方向に關する法則は全篇にわたり著者の援用して立言の根據と爲すところのものである。「こは海岸線は他邦との關係を審かにし、山脈の方向情實は内治の如何を明かにし、兩者に依て國民が世界に盡すべき天職の如何を判決し得ればなり」である。

さて世界史の「舞臺」たる地球表面を見るに、陸地の分布は、北極を起點として

相互に相似なる三大陸塊に分たれてゐることを知る。すなはち、

(一) アジア・オーストラリア陸塊

(二) ヨーロッパ・アフリカ陸塊

(三) 南北アメリカ陸塊

これである。(三陸塊の相似性については著者により本文に詳述されてゐる。)

そしてこれら三陸塊の北半中央部を順次その「舞臺」として、「劇曲」たる世界史は西漸するのである。

個人の生長に「小兒(幼年)時期」「青年時期」「壯年時期」「老年時期」の各時期がある。人類の發達にもその各時期がある。而して「地は人類の此發達を促さんが爲に造られしもの」である。故に世界史の各時代に應じ、地に人類の

(一) 「産室並びに幼時發育の爲の大陸」(小兒・幼年時期)

(二) 「彼の鍛錬場(教育場)に供せられし大陸」(青年時期)

(三) 「彼の活動大陸」(壯年時期)

(四) 「克己博愛の性を養成發揚するの大陸」(老年時期)

があるのである。「此地は意志なき偶然の作」ではなく、「一大思想の其中を貫通す

るありて、現然たる意匠（攝理）の其中に存する」ものありと言はねばならぬ。
 「地理の目的は歴史の目的なり」である。

世界史の進行は、アジアより始つた。光は東方より。世界史に於ける絶對的の東方は、アジアであつた。

人類はアジア・オーストラリア陸塊の北半「世界の屋根」パミール高原を起點として東西に分流した。世界史は西流せる人類とともに西漸を開始した。そして

西方アジアは、人類の「起源的大陸」として、その「幼年期」の、

ヨーロッパは、人類の「鍛錬的大陸」として、その「青年期」の、

北アメリカは、人類の「活動大陸」として、その「壯年期」の、

「舞臺」となつたのである。この世界史の進行に逆行せるものは、アレキサンダーのアジア征服もナポレオンの東方遠征も「一時の逆流」として消え失せざるを得なかつた。

*

西方アジアの地理は、「一高原一平原より成る」をもつて「唯一大國の存在を許

すのみ」であるとされる。ここに七大帝國（埃及、カルデヤ、兩アッシリヤ、ミデヤ、波斯、アレキサンダー）相ついで起り、「專制君主の鐵意」によつて人類の幼年期における體育知育德育に「專斷的の教訓」を與へた。併しそれとともに人類の「靈育」の開始されしも此處であつた。地中海の東隅、アラビヤ沙漠の西北の一小國ユダヤこそ、「心靈的大思想が人類間に注入されし處」であつた。

ヨ、ロ、ツ、バの地理は、「淆亂狀を呈する山脈の方向と、蝕入多き海岸線」とにより、「數個の獨立部に區分」される。人類は、その青年期に於ては、隣人より分離して「その自力を試鍊せん」ため、「個人的獨立の念」を學ぶを要する。ヨ、ロ、ツ、バは攝理によつて備へられた人類の斯の如き「試鍊所」であつた。またヨ、ロ、ツ、バの海岸線は、東に閉して西に開いてゐる。これ世界史西漸の線に沿ふものである。即ち歴史の中心は、希臘、羅馬、獨逸、西班牙と西移し、遂に英吉利を通過して「歐洲の粹」（清教主義）はアメリカ大陸に渡つた。これ「地理學上の順路」であつて「歴史上の事實」であつた。歴史は如何に「地理を離れて獨歩」しないか、これ「歐羅巴論」の特に詳論して倦まざるところである。

「アジアは高山高原に富み、ヨーロッパは山野相半」するに對して、アメリカは「特に平原大陸」であるとされる。ヨーロッパの山系は主に東西に走つて國民的分離を生ぜしむるに對し（ブ氏第一則）、アメリカの山系に南北せざるは稀であつて國民的分離を許さない（ブ氏第二則）。その海岸線は、東に開いて西に閉ぢ、ヨーロッパの東に閉ぢ西に開きたるに對する。すなはちアメリカは、ヨーロッパに發育せる思想を受けて之を實行するの地であり、「人類が之を要するに當つて攝理は之を彼に供」したのである。アジアの合同は單なる「機械的集合」のゆゑに失敗に歸したが、ヨーロッパの國民的分離は獨立自由の思想を育成した。ヨーロッパ的思想の精粹と理想はアメリカに於てその結實を期せらるべきである。

さて驕つて、パミール高原より東流せる人類の消息は如何。我等は之を印度と支那に於て尋ねなければならぬ。

印度は、ヒマラヤ山脈の西南麓、「氣候赫灼、植生繁茂を極め、之に住せしむるに抽象力に富めるアリアン人種を以てしたれば、熱帶的の早熟と共に、形而上的文明

を呈した。

支那は、ヒマラヤ山脈の東北面にあり、「氣候溫和、五穀豐熟し、之に住せしむるに實際力に富める蒙古人種を以てしたれば、温帯的の生熟と、形而下的の文明を産した。

印度人は體を忘れて靈に生き、支那人は靈に介意せずして體を事とした。併し兩者ともに、他より孤立して自己に於ての綜合統一を求むる點に於て、同じくある。

「綜合は東洋の特性」である。「支那は政治的に綜合し、印度は靈智的に綜合した。この點、「西洋文明の正反對の方向を取れ」るものと言はざるを得ない。

「分離と競争」「自由と獨立」は西洋より來り、「一致と合同」「和合と從順」は東洋より出づ。前者に利と害がある、後者に利と害がある。西洋に缺くるは綜合性統一性である、東洋の弱點は分離性獨立性の不足である。「完全なる文明は、ヨーロッパがアジアと婚を結んで後にあり」である。

**

然るに今や、「パミール高原の東西に於て正反對の方向に向ひ分離流出せし兩文明」は、遂に「太平洋中に於て相會」せざるを得ざるに至つた。西洋文明の西漸は、

すでにアメリカ大陸を横断しロッキイ山脈を越えカリフォルニヤを開き太平洋に迫つた。支那は砲聲をもつて惰眠を破られ自己の開放を強ひられたが、東洋文明東漸の勢ひはすでに久しく日本に及んでゐる。中間に立つ日本は何時まで拱手傍觀すべきでない。「新郎新婦已に丁年に達せり、媒介者の立つべき時は至りぬ」である。

日本の「媒介者」たるはその地理學上の位置による。併しその職分を果すにふさはしきは地理學上の構造にある。日本の海岸線は、本州に於て東に開いて西に閉ぢ、九州に於て西に開いて東に閉ぢてゐる。もつてアメリカを迎へ得べく、もつて支那に向ふことができる。またその山脈は南北脈を主とし、之に東西脈を配してゐる。ブ氏二法則の示すごとく「以て統一和合するを得べし、以て統一の下に分離自治を計るを得べし」である。「東洋的の君主主義も我に施し得べし、西洋的自由制度も我に施し得べし」である。すなはち「アジア的統一」とともに「ヨーロッパ的自治獨立の精神」を同化し得るの特性を有すること、これその山脈の構造に於て知ることができぬ。

この地理學上の性質は歴史の事實であつた。「米國ひとたび刺を通じて我に親交を求め、我之を諾して彼と握手せしや、彼の文物は最速度を以て我に侵入し來」つ

た。併し「已に支那印度を學び盡せし日本は彼女の性來の同化力を以て歐米を吸収し始め」た。そして「東洋主義に堪へ又之に依て涵養されし日本人は、また能く西洋主義に堪へ、能く之を消化し、其東洋的の腦裡に蓄ふるに西洋的思想と精神とを以て」した。されば今より後、「西隣もし西洋を學ばんと欲するか、必ず我より之を學」ぶであらう。「東隣もし東洋の長を取らんとするか、必ず我に於て之を認めなければならぬ」。

斯く「兩洋我に於て合す。」併し我に於て合したる兩洋文明は、また我に於て新文明を生まざしては止まないであらう。

二者の配合によりて（我に於て）胚胎せられし新文明は、我より出でて、再び東西兩洋に普あまねからんとす

といふ。東西兩洋文明の綜合止揚によるより、高度なる「新文明」に於て、世界史はここにより、高き第二の階段に入り、今よりは之までと正反對の進路を取り、日本を出發點とし、此處より東洋西洋への還流が開始されるに至るであらうといふ。

（そしてこの「新文明」たる、人類の完全に成熟せる所謂「老年期」の「克己博愛」の時代の文明でなければならぬことは、著者の明言の此の個所に見られぬ、

らずそれは本書全體の構成から推測して誤りなきことと思ふ。

併し、著者の構想は以上を以て終らない。世界史は未だ北半球を一周したにすぎない。未だ南半球三大陸が觸れられずして残されてある。これが世界史の舞臺となるに至らずして世界史は完結に達しないであらう。

「南三大陸は北三大陸の附屬物と見て可なり」ることは、地理學的に、上述の世界三大陸塊説において見るが如くである。併し今や世界史の最後の段階に於ては、ヨーロッパはアフリカの、北米は南米の、アジアはオーストラリアのために、世界史完成のための責任を擔はなければならない。

アフリカは「自然の封鎖國」である。交通の不便は此の大陸の一大特質である。地味は瘦せてゐる。「天は之を抛棄せんが爲にアフリカを造りしか。アフリカは人類進歩の歴史に與かるべからざるか。」否である。「アフリカ大陸の存在の理由は、人類の高尙なる自力を發揚せんが爲」である。「利慾が人類活動の最大主動力たる間は、アフリカの開發は望む可からざるなり」である。人類の「老年期」たる「博愛時代」が到來し、ヨーロッパは自己のためにアフリカを分割することなく、自己

をアフリカのために與ふるに至つて、アフリカの開發は成るのである。そのために、「ヨーロッパの共同はアフリカより始まらざるべからず。」アフリカの開發はまさに未來の「ヨーロッパ合衆國」の一事業として爲さるべきものと言はねばならぬ。而してこの博愛時代が右のごとく日本の東西兩文明の媒介者たる天職を果したる後に到來すべきものとすれば、アフリカの幸福も亦た日本と無關係でないことを知らう。南アメリカ大陸の解決は、「北米合衆國を盟主となし、南北兩米一大共和國を創設するにあ」る。カナダ、西印度諸島、メキシコ、中米、南米をして「ビュウリタン祖先の理想に教化するは、合衆國國民の天職なり」である。

オーストラリア大陸は、前二者の類推よりすれば、當然、「アジア、特に東亞の附屬國たるの位置に居る」と言はざるを得ない。然るに現状は如何といふに、「歴史は全く地理學上の指示に反し」、ヨーロッパ人の占領するところとなつてゐる。併し乍ら「東洋人の援助なしに彼等がこの南大陸一帯を開發し能はざるは明か」である。これ地理と歴史との法則に反するからである。やがてかの「博愛時代」到來の時、このオーストラリア開發の任務に當る者は誰であるか。東洋人中、日本人か。或はそれは支那人であるかも知れない。「南洋占領問題は支那の振興を待たずして容易

に決すべからざるなり」である。

日本天職論の後を受けたこの南三大陸論は、その立言用語や、徹底を缺くの憾みなしとしない。併し本書全體の構造よりすれば、世界史は地球北半を西漸し終り、日本に於て東漸せる文明と合して、より高度なる段階に達し（博愛時代）、再び地球北半を反對の方向に還流し、ここに南漸の時代が始まると解すべきこと右のごとくであらうと思はれる。南漸は人類の「老年期」の光輝ある活動であり、右の南三大陸はすなはち「克己博愛の性を養成發揚するの大陸」として世界史によつて人類のために準備せられたるものと言はざるを得ないであらう。

かくて世界史はここに、「西漸し終り、南漸し終り、人慾悉く去り、天理悉く存し、善と眞と美とが水の大洋を掩ふが如く地球全土を掩ふに至つて、此地創造の目的は達せられ」たのである。併し、その實現はなほ未來に屬する。我等の爲すべきことは、今と此處にあると言はねばならぬ。我等日本人が「今、此の時と所とに處して能く吾人の天職を盡すにあらざれば、最終の佳節は來ら」ないであらう。「吾人の天職」とは何であるか。「東西兩洋間の媒介者」たることに外ならない。我等がこの

「天職」を果すことによつて、日本は世界史の中心に立ち、同時により高度なる新世界史の出発点となるのである。日本にこの責任があり、又それを果すにふさはしき資格を備へられてある。まことに「沈思、萬國圖に對する時、吾人をして神命の重きを感じしめよ」である。

かくてここに著者は『地人論』全卷の筆を擱くのである。

著者は、上掲の日記に、本書を稱して「世界の地理を一大詩篇として見たる作である」というた。また古く本書發行前後の著者の書翰（英文）を見るに、著者は本書を“Religion of Geography”（地理の宗教）とも“Spirit of Geography”（地理の精神）とも呼んでゐる。かかる稱呼をもつて著者は寸言よく本書の本質を言ひ表したものと云ふべきである。

本書はしばしば日本に於ける地政學的著作の先驅と考へられる。「地政學」(Geopolitik)とは、その代表的學者の言明によれば、「自然的な生活空間に於ける政治的な生活形式を、その土地による束縛性とその歴史的運動による制約性に於て、把

握せんとする學問」であると言ふ。併しそのことは具體的に言へば、「地上の空間に權力を能ふ限り聰明に實現するに必要な一切のものを、政治技術のために準備するのみならず、それを思想的にも使用に堪へるものたらしむることにある」といふことである。従つて「地政學は、政治的指導力の從僕以外の何者たることをも欲しない」とともに、政治に對する要求も「明確に指摘し得る事實と證明し得る法則とをもつて政治的指導力の前に現れることを許され、少くとも政治的指導力によつて聞かれ又顧みられる權利を要求せんと欲してゐる」に外ならない。斯くの如き地政學の立場に對し、本書の關係はおのづから明かなりと言はざるを得ない。本書について著者は「後世之を讀みて我思想を政治的に世界に行ふ者があらう」とも言つてゐる（上掲日記）。併しこの「政治的に」といふ意味が「世界地理の一大詩篇」として或は「地理の宗教」「地理の精神」としての本書の主張と異なるべきものでないことは言ふまでもないであらう。

カール・ハウスホーファー『地政治學入門』土方・坂本譯、八七、六三、一〇六頁參照。
 なほハウスホーファー『太平洋地政學』太平洋協會編譯、緒説一頁參照。

本書の内容に、ヘーゲル、ローリンソン、リッテル、ギョー等、先人の影響少か

らざるは容易に窺はれるところである。併しそれにも拘らず、日本の位置を世界地理と世界史との中心に置かんとする此の「日本天職論」の思想は、著者に於て始めて與へられたる先人未受の啓示であり預言である。日本が謂はば「歴史の契機の前提として全く世界史の範圍外にある」(ヘーゲル)と考へられてゐた當時、日清戦争さへ知られざりし明治二十年代の初期、早くも此の雄大なる思想を(而も單に素朴的でなく、すくなくとも地理と歴史とによつて之を基礎づけつつ)悠久幾千年の世界史と文明先進に誇る諸民族の前に提示せし日本人の存在したことは、彼の同胞として我等のまさに誇るべき事實であると思ふ。我等はよく彼の「天職論」を本書全篇の構造に於て理解すべく、部分に於て全貌を誤つてはならないであらう。

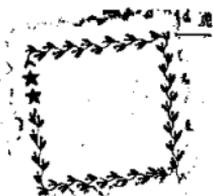
終りに本文庫版のテキストに就て一言したい。テキストは全集版に據り、之に送假名、熟字、正字、文章の掛り結び等に若干の變更を加へ、讀者の翻譯の便を計るに努めた。併しそれら變更の個所は極めて僅少にすぎないことは勿論である。前掲日記中著者が本書の「改訂に従事した」ことが記され、又「校正を了つた」ことも

記されてゐるが、その改訂版は遂に發行に至らず、その原稿も今日尋ねて其を得るの途がない。依て初版に基く全集版をもつて本文庫版のテキストとなした次第である。なほ原本の有する頭註及び文中の傍點圈點等は、文庫編輯者の意向により、除去せられた。そのため得失双方の結果を生じたと思ふが、止むを得ざりし處置として諒承を乞ひたい。併し全集版に省かれてゐた圖版は、原本に據りて、全部これを挿入することとした。尙、本文の後に「註」を附し、本文に引用せられてゐる英詩の、解題者による拙譯を掲げた。文庫版讀者よりの注意による。その出典については神田盾夫氏の厚志に與つた。岩波書店の長田幹雄、長谷川覺、大塚光幸、堀内きよ子の諸氏に、この機會に深き感謝の意を表する次第である。

昭和十七年六月

鈴木俊郎

出 文 協 承 認



昭和十七年九月二日印刷
昭和十七年九月七日發行

(二萬五千部)

地 人 論 ★★

定 價 四 十 錢



(桂川製本)

著 者

内 村 鑑 三

發 行 者

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
岩 波 茂 雄

印 刷 者

東京市神田區錦町三丁目十一番地
白 井 赫 太 郎

發 行 所

東京市神田區
一ツ橋二丁目三番地

岩 波 書 店

電話九段〇一八七番(代表)
接番口馬東京二六二四〇番
東京番號一〇二〇三七

刷 印 社 興 精

(一四東京)

配 給 元

東京市神田區
霞給町三丁目九番地

日本出版配給株式會社

すまじ存くたひ頁を任責に久永はて就に物版出の店小
いさ下で出申御へ店小接直は合場の等丁亂・丁落らか

讀書子に寄す

岩波茂雄

——岩波文庫發刊に際して——

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。當ては民を愚昧ならしめるために愚鈍が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の精齊と研究室とより解放して街頭に隈なく立たせしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大衆生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと勝利する全策が其組織に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の顯露企圖に敢ての態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を緊縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推舉するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の意重大なるを思ひ、従來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より慮して來た計畫を嚴重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亘つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原動力を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては厳選最も力を盡し従來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

